

星の金

Z32-B88

号月二



国立国会
R. 3. 26
図書館

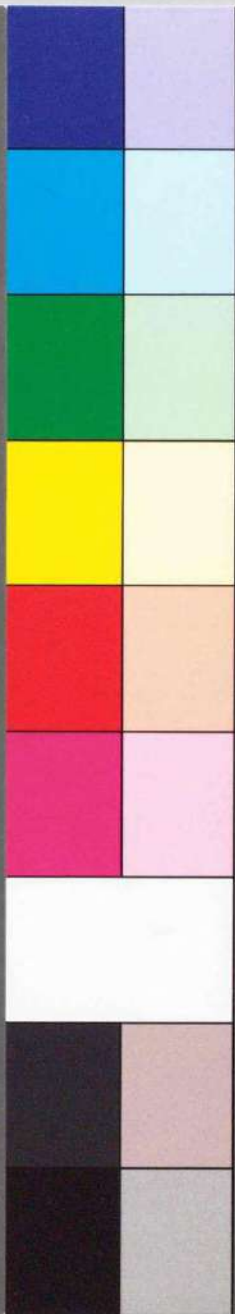
號二第

卷八第

(郵税十二銭)

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

沖野岩三郎先生著・四六判箱入美本・三二〇頁
定價金壹圓八拾錢・送料六錢

日本の児童と藝術教育

「ミエ」の「ソツル」
著名さべす比に「ル」

著者沖野岩三郎先生が藝術と教育問題に就て如何に卓越せる見識を持つてゐるかは、何人も知つてゐる處です。本書は沖野先生の「童話論」ともいふべきもので、「児童教育と童話」との關係に就てあらゆる方面から、著者獨特の研究と意見を述べたものであります。恐らく我が國の児童教育問題で、これ程傾聴すべき名説は、他に求めることが出来ないと思つてゐます。沖野先生自身も、本書一卷を以て世に問はうといふ大抱負のもとに發表されたものでありますから、眠れる我が國の教育界に一大警鐘となつて鳴り響くでせう。

嘗てルツソーの「エミール」が、児童教育問題の上に世界的反響を起して、當時の思想界に一大變化を來した如く、本書の一讀は必ずや讀者の思想を一新せしめずには措かねでせう。教育家は勿論のこと、児童藝術に携へる何人も、是非一讀すべき名著であります。

東京本郷坂町
金星社
振替東京五九五六番

お伽王國

オハナシ

四六倍判假裝全五冊 定價各一圓
紙數各冊八十頁 送料各八錢

巖谷小波 著
岡野榮、小林鎮吉、杉浦非水畫

日本の畫噺

袖珍假裝全三十五冊 定價各二十五錢
紙數各冊三十餘頁 送料各四錢

巖谷小波 著
太田三郎、岡野榮、細木原靜岐畫

オトギウタ

四六倍判假裝全三冊 定價各八十錢
紙數各冊三十餘頁 送料各六錢

(書圖俗通定認省部文)
お話し—それはお子さんたちの成長に伴ふ止みがない教養の表現です。筋のたつたお話しはお子さんたちにどれ程大きな糧となるか量り知れないもの、あることは否めない事實です。岡野先生のお話しは直ちにお子さんたちの心に強く入つてゆくことを信じます。

お子さんたちの一番のお友達はお伽噺と動物の世界です。その抱く想像力は到底大人の及ばぬ夢の國の美しい宮殿です。小波先生はお子さんたちのお相手として少しも不満のない物語りを綺麗な繪に添へて書いて下さつたのがこれです。

見るものも聞くものも、お子さんたちにとつて、それはすべて歌ひです。歌ひを感じたとき誰しもさつと唱はすには居られないでしょう。これは美しい繪と一緒に次々と讀いてくる小波先生のお伽噺、さあ皆して唱ひませう。唱ひませう。

東京日本橋通
丸善株式會社
東京・田三・田丸・ル
大塚 神戶 京都 名古屋 札幌
仙台 横濱 東京 大阪
札幌 仙台 横濱 東京 大阪

船のアノ

創世紀の物語から、
 かに綴つたノアの船を始
 め、強い鶯種子詩を糴り
 集め、入るの何十篇の童話
 幼ない時代の思ひも、美し
 やい幻想、憧れのユウトビ
 持たつて、徒らに描いた自
 である。世界を小供自身の
 奇心を挑發したり、小供の
 純情に脅威を與ふる様など
 を、健全なものとば全然趣
 を異にする。如何にも美し
 く、童話清らかに、正しく
 庭の微笑、小供に、大人に、
 足るの微笑があるでせう。
 殊に河野遁勢氏の装幀、
 魂を魅了し、去らなければ
 止まない出来栄である。

四六判 原色版刷込装
 定價 價 貳十 六
 送料 書留 十八 錢

オヂラの供子

東京 高師 齋藤董雄著
今日、何人も此の智識を會得して置く必要は事新らしく説くまでもありませんが之れを會得する上に從來の發刊されてゐるものは何れも専門的に互つてゐるものが多く爲めに子供さん達の指針書たるを得なかつた遺憾がある。之れに鑑み今度東京高等師範の先生が、子供に容易に解し得られ而も自ら作り、自ら楽しむことの出来る様、丁度學校の黒板に一々書いて説明さるゝ様に詳しく圖面入りで、その理を説かれてある。子供さん達の研究と趣味には恰好の著です

四六判美裝
寫眞版五十箇錢
定價壹圓四拾錢
送料書留拾八錢

發兌 東振 京替 市東 芝京 區五 八九 幡六 町〇 二〇 五番 厚生 閣

菊判四百八十頁
凸版三度刷美裝
村上秀隆裝幀

定價參圓
送料書留十八錢

國語讀本を
劇曲化する

兒童劇脚本

小學教育界の
革命的名著！
教育藝術化の
具體的提唱！

兒童劇の效果は今更喋々しない。その弊害も認めてゐる。だがそれは正しき兒童劇を解せざる徒の跳梁に依ることも斷言しおく。正しき兒童劇に何ぞ害があるか、美しき人生を慾する人々よ。崇ま人間性を培はんとする人達よ。藝術の前にゆかづけ。そして正しき兒童劇を打立てよ。私共はその小さな貢獻として之を書いた。

収むる所の三十二篇の脚本は何れも實演の上異常なる效果を得たものである。卷の一より卷の十二に至る全巻を通じて比類なく材料を蒐集網羅し、さるかに合戦「桃太郎」以下「アア物語」「用水堀」「青の洞門」等演出に簡單にして讀本の真意を表現し、兒童の實生活に多大の感銘を與へるものばかりである。學藝界等の爲め必需書である。

厚生閣編(改訂) 定價貳圓 送料拾八錢
動作のやさしい唱歌
ついた

詩北原白秋其他
曲草川信其他
振眞島睦美其他

「動作のついたやさしい唱歌は教室と云はす、
廣々とした野原の真ん中と云はす、恐らく子供
が三々五々集ひ得る所であれば何處でも賞演出
るのです。作詩・作曲・振付共に斯道の大家に
乞ふて子供が自由に楽しく踊れるものとした。」

發兌 東振 京替 市東 芝京 區五 八九 幡六 町〇 二〇 五番 厚生 閣

理學士 原田三夫先生著

◇各卷四六判洋裝美本
◇各卷紙數三百頁前後

最新 子供の聞きたがる話

各方面から歓迎せらるゝ子供供讀物！

子供の頭は好奇心と知識慾とで張切つて居る。何を見ても不思議を感じ珍奇斬新を求める。而も今の子供はお伽噺や作り噺では満足しない。科学の話を根掘り葉掘り聞きたがる。其新しい話、聞きたがる知識を百科百方面に求めて、重に分るやう澤山の寫真版を入れて、面白く丁寧に全く噛んで含めるやうに説明したので、凡そ兒童教育者が話材の資料として無二の好著である。

大高評全十卷

第一卷	發明發見の卷	第六卷	生理衛生の卷
第二卷	天文地文の卷	第七卷	探險冒險の卷
第三卷	動物植物の卷	第八卷	珍談奇談の卷
第四卷	電氣磁氣の卷	第九卷	鑛物岩石の卷
第五卷	化學工業の卷	第十卷	文明開化の卷

◇定價各冊壹圓五拾錢 送料各金十五錢

弊院地方販賣部擴張の爲め好評比類なき誠文堂發行の「子供の聞きたがる話」を金の星愛讀者に限り左の特點を以て提供いたします
上記十卷の内どの巻でも一冊御買上げの方には本院發行の◇メーラルリンク作
◇若月紫蘭譯
青い鳥 半紙一八五頁 定價七拾錢

この有益無二、面白くつて爲めになる好著を無代進呈いたします
◇金の星愛讀者諸兄速かに御注文を願います

申込所
東京市四谷區七軒町三
ヤナセ書院宛
振替東京二五〇一〇番
郵券一割増。代金引換には定價壹圓五拾錢と送料を要す

少年少女世界名篇物語

四六判美入本・定價各冊金十九錢・送料二十錢

第一編 赤穂義士物語

足立朗々先生著 ◇高坂元三裝幀挿畫

いまだに世界童話叢書を發行して多大の御賞讃をいたゞきました弊社は其の御厚情に報ゆる爲め更に世界名篇物語叢書を發行いたす事になりました。少年少女のお友誼である弊社は、益々その本領を發揮する爲め定價も一層引き下げました。しかし内容體裁とも、何所へだしてもひけをとらない立派な物語である事は世界童話叢書と同じで御座います。どうか引續き御愛顧を願ひます。

(逐次新刊)

第二編	八犬傳物語	第三編	クオ・ヴァ・ヂス
第四編	膝栗毛物語	第五編	水滸傳物語

東京市東區上野
金蘭社
振替東京一七六七番
電話淺草一七六番
東京市東區上野
金蘭社
振替東京一七六七番
電話淺草一七六番



畫雄

寺内萬治郎・水島爾保布
岡本歸一・柳田謙吉

目次

[illegible]



日向ぼつこ (金の星篇)
岡本歸一畫

ひ

戦



(いさ下覽御を語物犬愛)

書郎治萬内寺

著氏兒虹谷落

百畫選集 私の畫集

佛蘭西洋行研究の置土産として
愛する母國の若人等へおくる

▽▽中形背綴美本
送金壹圓貳拾錢
留十六錢

美にして聖なるものゝ最大權威書として一大高評を博せるもの。方今抒情版畫壇に並ぶ者なき麗筆は畫に詩に妙技神に入ると謂ふも亦過言ならざるべし。苟も繪を愛し詩を解する諸士の唯一なる良書として益々白熱的の注文を得つゝあるなり。

((版一十第))

虹兒 悲しき微笑

四六判總網布
特美上製箱入
原色版畫入り
金壹圓九拾錢
送金壹圓十八錢
留十六錢
第十一版愈々
發賣さる

本書は特に著者が良書の上梓を目的にて内容の挿畫こまかく新に描かれたるものにして原色版の如きは最も意を盡して彩筆を振はれ墨繪亦一葉を描くに二日を費したるが如き實に纖細美妙の神筆は讀者の誰人をも魅惑せずんば止まない好著と専ら定評あり。

落谷虹著	虹兒畫集	睡蓮の夢	金壹圓七拾錢 送金壹圓十八錢 留十六錢	落谷虹著	私の詩畫集	金壹圓六拾錢 送金壹圓十八錢 留十六錢
落谷虹著	虹兒畫集	銀砂の汀	金壹圓參拾錢 送金壹圓十六錢 留十六錢	吉屋信著	第一第二花物語	各金壹圓貳拾錢 送金壹圓十六錢 留十六錢
落谷虹著	虹兒畫集	青い小徑	金九拾錢 送金壹圓十二錢 留十六錢	西村醉著	第三第四花物語	各金壹圓貳拾錢 送金壹圓十六錢 留十六錢
落谷虹著	虹兒畫集	虹兒畫集		香氏著	歌物語	金壹圓參拾錢 送金壹圓十六錢 留十六錢

交蘭社

東京 市口 神座 田東 區京 南四 保〇 町二 十七 六九

大特典提供

本日代表童謡大作の界を金星の童謡曲集

第十輯 名 所 め ぐ り (目曲) 長船の橋、柱ぐり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳結、石山等の秋の月	第九輯 あ の 町 この 町 (目曲) あこの町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、風の小母さん、證誠寺の御摩	第八輯 べ ー ん べ ん 鳥 (目曲) 紅殻蜻蛉、さみだれ	第七輯 お 人 形 さ ん の 夢 (目曲) お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、まの穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱	第六輯 子 守 唄 (目曲) 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、蘆坊主、蔵の下道	第五輯 夢 こ り (目曲) 夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水波、雀の機織り	第四輯 赤 い 靴 (目曲) 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮船屋、眠り龜の子	第三輯 青 い 空 (目曲) 青い空、燕、雨夜の傘、でんぐ蟲、雀の酒盛り、呼子鳥	第二輯 一 つ お 星 さ ん (目曲) 一つお星さん、七つの子、鵲と雀、鷄さん、象の鼻、四丁目の犬	第一輯 人 買 船 (目曲) 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
--	---	--	--	--	---	--	--	--	--

東 京 本 郷
 動 坂 町
 金 星 社
 振 替 東 京 五 九 五 六
 電 話 小 石 川 三 五 八 七
 大 賣 捌
 東 京 市 外
 下 目 黒 四 六 八
 振 替 東 京
 五 四 五 八
 社 自 眉

世界少年少女偉人傳大系(2)

霜田史光先生著

裝幀 寺內萬治郎畫伯
挿畫 柳田謙吉畫伯

ロマン
英雄
シーザ

四六判箱入頗美本
內容一九〇頁
插畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

世界の英雄中で一番の人氣者は、何といつても古代ではジュリヤス・シーザー、近代ではナポレオンであります。しかもシーザーは、ローマの古い時代に活躍した大英雄だけにまた特別の面白味があります。ローマをあれ程立派な大國にしたのはシーザーの力でありました。命懸けの戦争は何度やつたか知れませんが、しかも其の當時は、勝てば征服者となり負けば奴隸にされて了ふやうな恐ろしい時代でしたから、英雄と英雄とは互に火華を散らして戦ひました。

シーザーの一生は、最初から終りまで眞に大英雄としての生涯でありました。本國を追はれて流浪の旅に送つた幼年時代から、最後にローマの元老院で敵のために刺し殺されるまでの繪巻物の如き一生は、親友アントニーのシーザーに對する葬ひの大演説と共に、今なほ語り傳へられて世界の歴史を飾つてゐます。

本書は少年少女の爲めに書かれた最もよいシーザー傳であります。

町 坂 動 郷 本 京 東
社 星 の 金

振替東京五九五九六番

金社の星編 世界少年少女名著大系

四六判箱入類美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第一編

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程澤山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編

ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポルトンか、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

第三編

ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ瘡馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ愉快な物語りです。

第四編

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

第五編

大人國小人國めぐり
ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやや、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさまざまの目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて来るまでの實に面白い物語りです。

金社の星編 世界少年少女名著大系

四六判箱入類美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六編

ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが悪い男のために國を棄れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戦を起したり、悪い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編

アラビヤンナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるか分かります。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編

ギリシャ神話
オデッセー物語

ギリシャの詩聖ホメーロスの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編

シェークスピア物語

有名なシェークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テン・ヌスト』『御意のま』『ハニスの商人』『がみ』『女賊』『真夏の夜の夢』『冬の夜げなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編

グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話であるが、少くも少女の珍寶として尊ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められてゐる作はグリムの数多くの作の内、最も有名な面白いものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

星の金 世少少年少女著名大系 編 社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一十第

入 繪
イソップ物語

編二十第

神 日 本
古事記物語

編三十第

新 子 供 キ リ ス ト 傳
約 物 語

編四十第

西 遊 記

編五十第

ローマ英雄物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで、随分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つの物語に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話を讀みながら面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語である。日本の國がはじめて出来た話から始めて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それこそすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス、キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この偉い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

支那から印度へ、はる／＼お經を取りに行つた玄奘三蔵の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の怪物に出遇ひ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けない世界的名作。この本を讀まない者は不幸である。

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたもので、面白く、面白く一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロムルスとレムスの不思議な物語から、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戦の話など、順々にあらはれ息もつけない面白く物語りです。

『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、幾度となく繰返し讀む有名な物語です。日本の『古事記』のやうな物語で、ユダヤの國の昔にやつた、神様と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことかわかつて面白味が深いでせう。

白人種のために大敵同様にあつかはれてゐた奴隷の物語りです。偉人リンコンが現れるまで、米國のあはれた奴隷たちの生活が現れたもので、それから最初の頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。博大、崇高な氣持が、この本によつてどんなに變はれることぞう。

日本にはじめて紹介されたギリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングズレーです。傳説に従つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに済ませるのは残念です。

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

幼くして父を失ひ、神の如く氣高き母を持つた小公子の運命を書いた物語りです。世界的に有名な家庭小説にして我が國にも早くから知られてゐましたが少年少女のために紹介されたのは本書が最初です。原作はバーネット女史の作で、全篇清い愛と涙と教訓に満ちた作品です。

星の金 世少少年少女著名大系 編 社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六十第

舊 こ ども 約 聖 書 物 語

編七十第

奴 隸 ト ム 物 語

編八十第

ギリシヤ英雄物語

編九十第

アンデルセン童話

編十二第

小 公 子

沖野岩三郎先生著（最新刊）

どんぐり山

四六判二一〇頁

定價壹圓貳拾錢

送料金六錢

私はどんぐり山の猿であります、私の先祖には桃太郎さんから可愛がられた猿もあれば、猿蟹合戦のにくまれものゝ猿もゐました。が、私達は昔のまゝの私達ではありません、皆様が學校で學問を勉強なさるやうに私達も勉強してをりますから昔のやうに人間の眞似ばかりして猿智慧と笑はれることは決してないと思ひます。今ではどんぐり山に大學が出来て私はその先生をしてをります。

さて、私達から見た人間の世界は誠に面白い事ばかりであります。その内で私の思つたこと、おかしいこと、不思議なこと、面白いことを沖野先生へお願いして書いて頂いたのがこの本であります。

東 京 日 本 橋 數 寄 屋 番 大 阪 屋 號

金 星
二 月 號



（通卷第七拾五號）

兎が来い

作曲 藤井清水

作詞 野口雨情

M.M. ♩ = 104
(單純に)

III

mf

や ま か ら こ い
イ ソ イ ダ コ い
あ そ び に こ

mf

う め だ け り づ い つ ぶ じ に
サ ト り づ こ い ち ち ち
は ね は ね く い ち ち ち

mp

は ら だ ら や ま ら ち ち
う づ め ち し ん ち ち
つ ぐ だ ら ね に は へ ち ち

兎が来い

野口雨情

山から来い

兎が来い

月夜になるから

山道来い

いそいで来い

里見て来い

お山の兎が

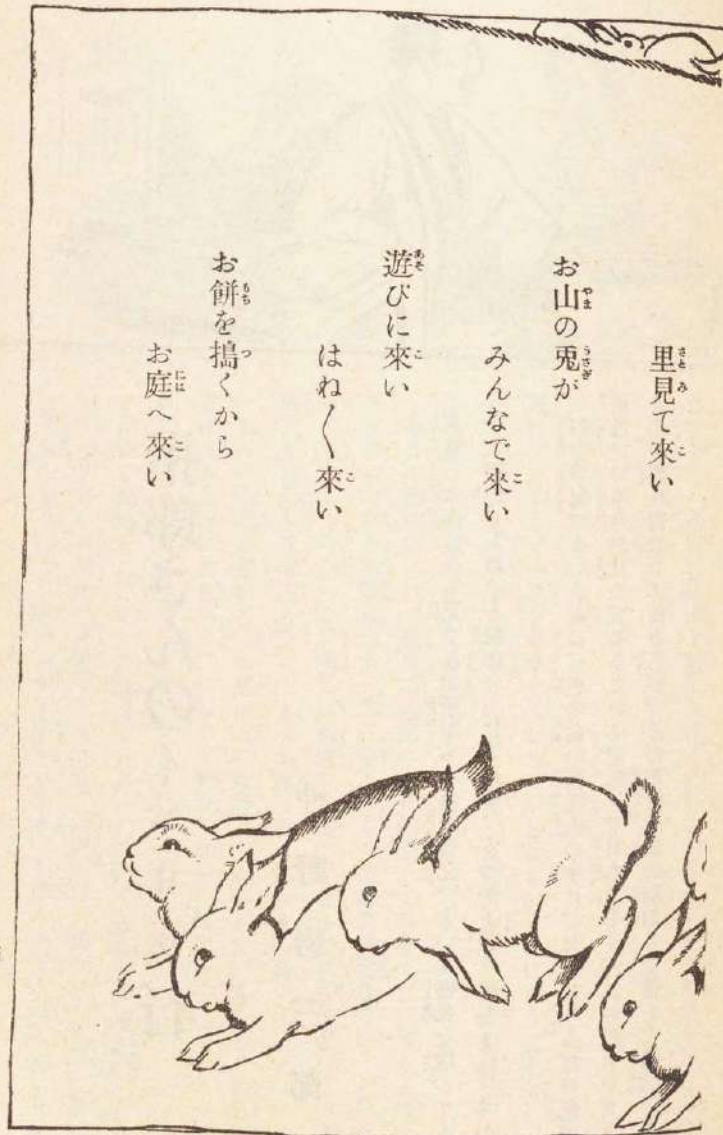
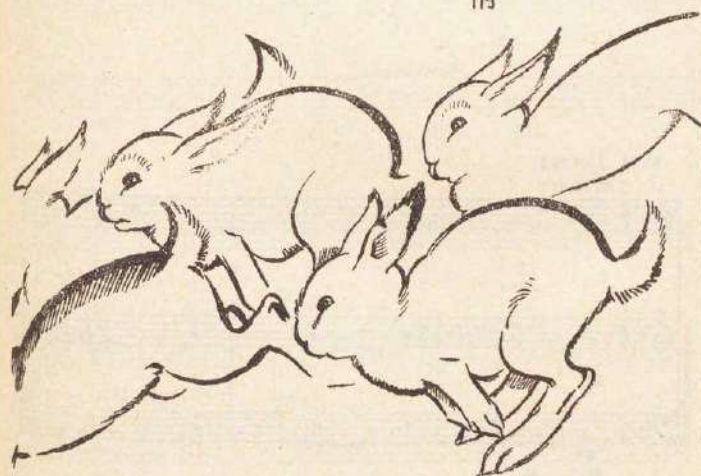
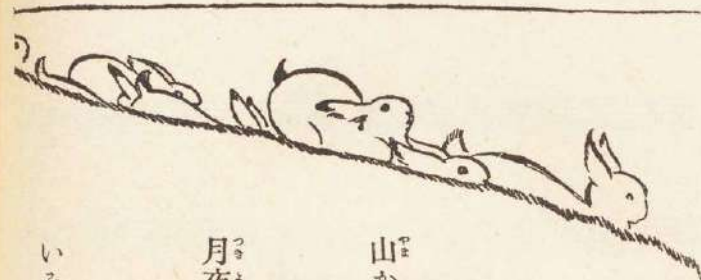
みんなで来い

遊びに来い

はねく来い

お餅を搗くから

お庭へ来い



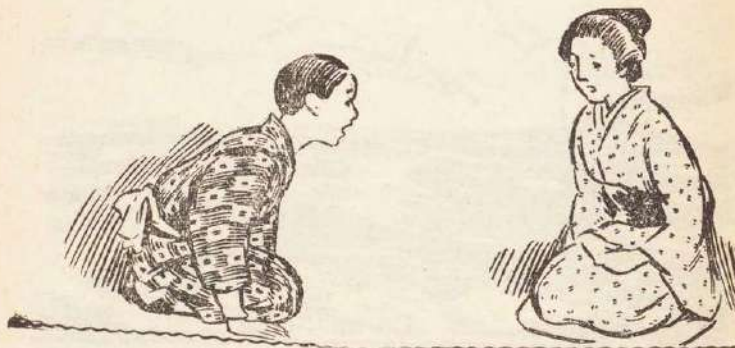


指郎さんのイギリス行

沖野 岩 三 郎

東京の大學にゐる兄さんの所から『白中黄記』といふ書物を送つてもらつた指郎さんは、一晩のうちにそれを、すつかり讀んでしまひました。

『白中黄記』といふのは、色の白い西洋人の中に、たつた一人だけ色の黄色い日本人が交つてゐるといふ意味で、日本からイギリスのケンブリッヂ大學に留學してゐる人が、その學校生活の面白さを書いた書物でした。



指郎さんは其の書物を讀んだ時、急にイギリスへ行つて、そんな面白い學校生活をしてみたくなりました。しかし指郎さんは、まだやつと中學の三年を修業したばかりですから、英語だつて十分には出來ません。

或日、指郎さんは仲のいゝお友達に其事を打あけてみましたがお友達は『いづそ、中學を卒業してから、出かけるがよいだらう。』と申しました。けれども中學を卒業するまでには、まだ二年といふ長い月日があります。それはなか／＼待遠しい。

そこで指郎さんは、教會の牧師さんに相談してみました。すると牧師さんは『中學を卒業した上、二三年みっちり英語を勉強なさい。そして、私からあなたのお父様に御相談してあげませう。』と申しました。指郎さんは此上五年間も待つことは出來ないと思ひました。

たうとう思ひ切つて、お父さまに相談してみました。すると、お父さまは大へんうれしさに、にこ／＼笑つてゐました。

『では、お父さま。イギリスへやつて下さいませんか。』

指郎さんは、うれしさに問ひました。しかし、お父さまは意外にも、『イギリスの大學校へ入學することは、大賛成だ。其の白中黄記を書いた先生のやうに、日本の大學を卒業した上、十年も學校の先生をしてゐ



たなら、多分其の學校から、留學生として、イギリスへやつて呉れるかも知れない。」

と申しました。指郎さんは明日からでも、行きたいのですが、お父さまはすつと、二十年向ふの事を考へてゐらつしやる。

そこで指郎さんは、おッ母さんにお願ひしてみましたが、おッ母さんも無論不賛成でした。

しかたがありませんから、指郎さんは、もう自分一人で、イギリスへ行く事に決心してしまひました。

中學四年の試験が終ると同時に、指郎さんは東京にゐる兄さんの所へ、イギリスへ行くことに決心したといふ手紙を出しました。それを見た兄さんは、驚いてお父さまの所へ手紙を出しました。

お父さまも、びつくりして、直ぐ指郎さんを膝もとへ呼びよせて、
「指郎、お前はイギリスへ行くつもりか。」と少しく怒つたやうにたづねました。

「はい、行くことに決心しました。」と指郎さんは平氣で答へました。

「誰とそんな相談をしたのか。」

お父さまは、指郎さんが、誰かにおだてられてゐるのではないかと思

つて、そんな質問をしました。ところが、指郎さんは、
「私は神様と相談いたしました。」と、はつきり答へました。

「なに？ 神様と？」

「はい、友達に相談しても、牧師さんに相談しても、お父さまに相談しても、おッ母さんに相談しても、みんな賛成して下さいませんから、私は一所懸命に神様と御相談いたしました。」

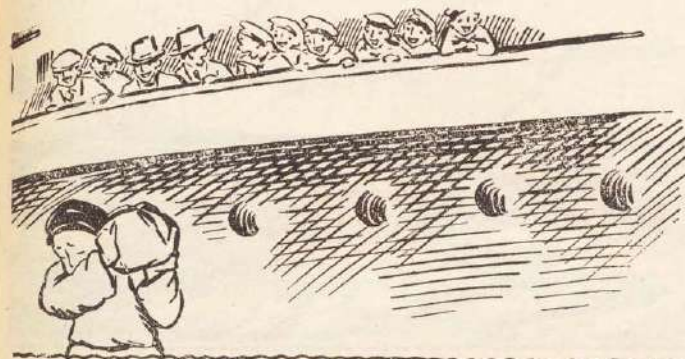
「神様と御相談した結果、イギリスへ行くことに、獨りできめてしまつたのか。」

「はい、神様はきつと正直にして働く者を守つて下さると思ひます。私はイギリスへ行つて、どんな苦勞をしてでも、一所懸命に働いて、お父さまに御心配はかけません。」

指郎さんは、お父さまが何と仰しやるだらうか、それが心配でたまらなかつたので、うつむいたまゝ、心の中で、一心に祈つてゐました。

「うん、さうか。それはど一心に思ひつめてゐるものを、無理に引とめるのも、かわいさうだ。」と云つたまゝ、お父さまは暫く黙つてゐました。

『では、お父さま。私をイギリスへやつて下さいますか。』
指郎さんは恐る／＼顔をあげました。



「では、イギリスへ着くまでの、旅費だけあげるから、向ふへ行つたら、自分で働いて、自分で勉強するやうになさい。」

お父さまは、さう云つて、ほろりと膝の上に涙を落しました。

「はい、きつと眞面目に働いて勉強いたします。御心配はかけません。」
指郎さんの眼にも、うれし涙が光つてゐました。

願ひを聞届けられた指郎さんは、間もなく神戸に來ました。神戸には年上のお友達で、神學校に勉強してゐる廣里といふ青年がゐましたので、いろ／＼なお世話を頼みました。

指郎さんは、そこで新しい洋服を作りました。生れて始めて脊廣服を着るのです。ネキタイの結び方を覚えるのに三時間もかかりました。新しいトランクを買ひました。其中には鏡や櫛やチツクなどが入つてゐます。しかし指郎さんの髪は丸刈でした。

いよいよお船が神戸の港を出る事になりました。廣里さんは見送りに來て呉れて、二人はデツキの欄干に凭れて、涙ながらに祈つて別れました。

船が岩壁を離れた時、指郎さんは眼に一杯涙を泛べて帽子をよつてゐ

ました。廣里さんも船の見えなくなるまで岸壁に立つてゐました。
これから一人の知人も居ないイギリスへ行くのだと思ふと、指郎さんの若い心にも、言ひ知れない淋しさが襲ひました。

お船は静かな瀬戸内海を通つて、馬關で一日碇泊しました。指郎さんは、もう今日限り暫くの間日本の土地を踏まないのだと思つて、下の關の町中を、ぐる／＼と歩き廻りました。

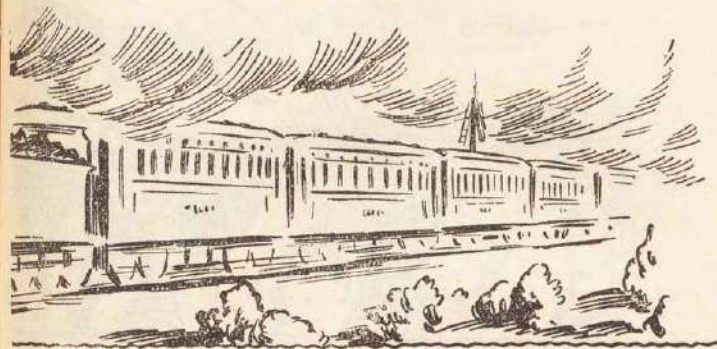
翌朝早く船は港を出ました。デツキに出て陸地の方を見てゐますと、段々自分と日本の土地とが間を隔てゝ行きます。十六年の間自分を育ててくれた日本の土地にしばらく別れてしまふのだと思ふと、知らず／＼涙が頬を傳つて流れます。

「神様よ。どうぞ私を守つて下さい！」

指郎さんはさう言つて祈りました。船は四日目に上海へ着きました。

「外國へ來た！こゝは地理の書物で習つた事のある支那だ！」

指郎さんは船を出て上陸しました。始めて外國の土地を踏むうれしさに、物珍らしく、あちこちと歩いてゐますと、立派な公園の入口に來ました。そこには立札がしてあります。讀んでみますと、「支那人入るべからず。」と書いてありました。支那の内地にある公園に支那人が入つて



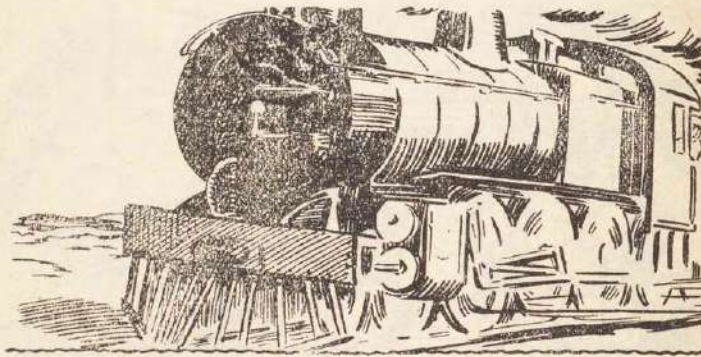
はならないといふ立札に驚きながら、お船に歸つてみますと、お船へは支那人が果物やお菓子を買りに來てゐました。船員や乗客は争つて夫れを買ひました。しかし誰もお金を拂はないばかりか、支那の商人を殴りつけたり蹴とばしたりして、お船から追ひ出してしまひました。

『馬鹿野郎！ 俺たちは日本男兒だぞ！』船員達は、泣きながら逃げて行く支那人の後姿を見て威張りました。

指郎さんは、なさけなくなりました。日本男兒といふ者は、こんな事をして得意になつてゐて善いものであらうかと思ひました。自分がつと年をとつてゐて、柔道でも強かつたなら、あのかわいさうな支那人の味方になつて、賣つた品物のお金だけは取つてやるのにと思ひました。しかし指郎さんは、まだ十六の少年です。

程なく、お船はホンコンを経て、シンガポールに着きました。指郎さんのお姉さまが、シンガポールの、英領コランボといふ所のお醫者様と結婚してゐるので、指郎さんは其所で上陸して、お姉さまを訪ねて行くことにしました。

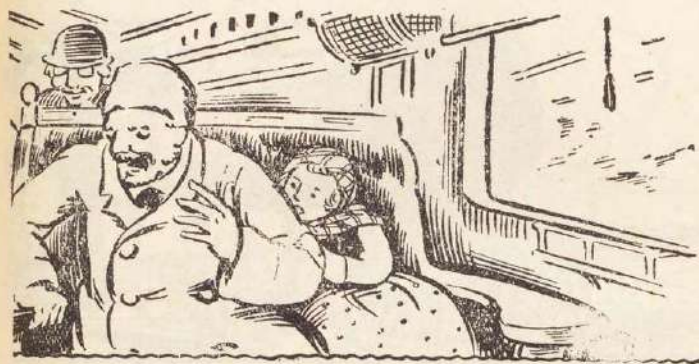
港には日本人が多勢ゐました。指郎さんは早速日本人の營んでゐる宿



屋に行つて、久しぶりに日本料理を食べ、日本流のお風呂に入りました。それからコランボ行の汽車に乗込みましたが、船の中とは違つて、汽車の切符を買ふにも、乗場を問ふにも、みんな英語をつかはなければなりません。で、かなり、まごついて、やつと汽車に乗りましたが、車内には日本人らしい人は一人も居ません。ビル腹のロシア人、色の黒い印度人、背の高い西洋人、耳に銀の輪をはめた支那人、いろ／＼の人が乗つてゐます。其の中にたつた一人日本人のかあいい少年指郎さんが乗つてゐるのです。

汽車が一時間ばかりも走つたと思ふ頃、五十歳あまりのイギリス人の車掌が乗客の切符を調べに來ました。すると指郎さんから三人目に坐つてゐた一人の労働者風の男が、突然立ち上つて次の列車へ行かうとしたので、車掌は其男を呼びとめました。男は切符を買はないで乗込んだらしいのです。

男と車掌との間には、はげしい議論が起りました。たうとう車掌は汽車の戸を開けて、其男を外へ突出さうとしました。すると男はもう絶體絶命ですから、ポケットからナイフを取り出して抵抗の用意をしました。それを見た車掌は同じくポケットからピストルを取り出しました。



大變な事になつたので、乗客はみんな色を變じて二人の方を見つめてゐました。けれども誰ひとり仲裁してあげるものはありません。

このまゝにして置けば、二人は斬るか射つかしなければなりません。そこで指郎さんは勇氣をふるつて、二人の中へ割つて入りました。そして中學校で習ひ覺えた下手な發音で、

「Don't quarrel, are you not brethren?」と言ひました。それは「喧嘩をしてはいけません。あなた方は同胞ではないか。」といふ意味です。

不意に可愛い外國の少年が仲裁に入つたので、車掌も労働者も兩方へ別れました。今まで、どうなる事かと氣を揉んでゐました乗客は、一度に手を拍つて指郎さんの勇氣を賞めました。

やがて汽車は次の停車場に着いたので、車掌は其男を車から降しました。指郎さんは夫れから幾つかの驛を通過して、コールランボの驛に下車しますと、後から一人の紳士が近寄つて来て、

「あなたは、これから何所へ行くのですか。」と問ひました。そこで指郎さんは、お姉さまの嫁入つてゐる宇野ドクトルの所へ行くのだと答へますと、紳士は、

「私はその宇野ドクトルを知つてゐます。馬車を備つてあげるから、そ



れに乗つてゐらつしやい。車賃は三十錢拂へばいいのです。」と申しました。

指郎さんはお禮を申して其の馬車へ乗りますと、紳士は名刺をくれて、

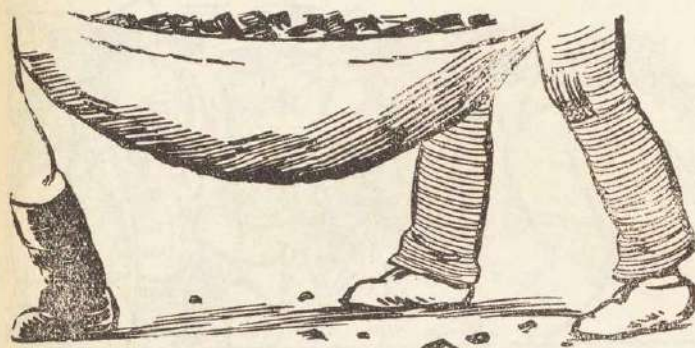
「あなたが汽車の中でした事はいい事でした。私は感心いたしました。こちらにゐらつしやる間に、私の宅へお遊びに入らつしやい。」と親切に言つてくれました。

指郎さんはお禮を言つて紳士にわかれしました。そして、お姉さまの所へ行くと、宇野ドクトルも、お姉さまも大騒ぎをして大歓迎をしてくれました。

二三日たつて、指郎さんは停車場で名刺を買つた紳士を訪問しますと、紳士は喜んで迎へてくれました。それから毎日紳士の所へ遊びに行くうちに、其の紳士は此の町の教會の牧師さんだといふ事がわかりました。

或日牧師さんは、指郎さんにむかつて、「あなたは、これからどうするつもりですか?」とききました。すると指郎さんは、

「私はイギリスへ行つて、ケンブリッヂ大學へ入學するつもりです。」と答へました。



『イギリスへ勉強に行くには、すのぶん學費がいります。あなたは毎月どれだけ、お父様から送つて貰ひますか。』

牧師さんは、さう問ひました。指郎さんは頭をかき乍ら、

『私は船賃の外に二十ドルしかもつてゐません。ロンドンへ行つたなら、一所懸命に労働しながら勉強するつもりです。』と申しますと、牧師さんは大へん驚いて、それは冒険だと申しました。

『ロンドンには、誰か知つた人でもゐるのですか。』と牧師さんは親切にきゝました。

『私の信じてゐる神様がゐらつしやるだけです。』

指郎さんは正直にさう申しました。すると牧師さんは一通のお手紙を認めて、

『もしも、ロンドンでお困りになつたなら、此の手紙の宛名の所へ行らつしやい。』と言つてくれました。

指郎さんは其のお手紙一通をポケットに入れて、間もなくコールランボを出立いたしました。お姉さまも、宇野ドクトルも、牧師さんも停車場まで送つて来て、少年のひとり身で、遠くイギリスまで行く心がけを獎勵してくれました。



指郎さんは又シンガポールから船に乗つて、イギリスに向ひました。お船は印度の熱いコロンボを経、スエスの海峡を通り、やがてフランスのマルセーユに着きました。そこで乗客の日本人は大抵船を出てしまひましたので、指郎さんは淋しい船室に残つて、三日の後にイギリスの港へ着きました。

目的の地へ着くは着いたが、さつぱり言葉もわからず、方角もわかりませんので、お船へ歸つて、今一晩だけ宿めて下さいと頼みましたが、都合があるからと云つて、ことはられました。

途方にくれた指郎さんは、海岸の石段の所にトランクを置いて、其上にうつむいて、

『神様、どうぞ私を守つて下さい!』と泣いて祈つてゐました。すると後から『おう』と云つて、指郎さんの腰の所を軽く蹴つた者がありました。驚いてふり向いてみますと、それは石炭を擔いだ、雲突くやうな眞黒く日にやけた大男でありました。指郎さんは、其の男の石炭を運ぶ通路に坐つてゐたのです。



盗賊の子

岡崎六郎

一八

支那の唐の代のことです。
長安の都に、鐵砲打の名人で、韋生と云ふ男がをりました。

或る時、韋生は、河南の方へ馬で旅を續けてをる途中、偶々一人の年老いた坊さんと道連れになりました。二人は、四方山の話に旅の疲れを忘れて夢中になつて居ります中に、日脚の短い秋の日は、次第に暮れかゝつて來ました。

やがて、道がふた岐に別れる處に差しかゝると、坊さんは駒の足をとめて、

『ねえ、若いお武家さん。わしの家は、こゝから三里奥にあるのだが、折角の道連ちや、この儘、別れるのも名残り惜しい。なんなら一寸、寄つて行かれますか。』と、愛想よく話しかけるので、韋生も『それならば……』と云つて、一緒に行く事になりました。

韋生は、坊さんの後に隨いて、駒の足を運ばせました。

したが、四里行つても五里行つても家らしいものが見當りません。とう／＼韋生は堪へ切れなくなつて、『一體、何處まで行けばいいのです?』と心配さうな顔を致しました。坊さんは、遙か向ふの森を指して、

『あそこが、そうだ。』と云つたなり見向きもしないで、すん／＼先を急ぐのです。やがて、その森もなんのこともなく通り過ぎてしまひました。

もう夜も大分更けました。かうなると、韋生は、變に心配になつて來て、坊さんを疑ひ出しました。

深い山奥のことですから、萬一騙されるとも限りません。

『この乞食坊主め、俺を騙しでもするつもりなら、こちらにも覺悟がある。』と、韋生は胸の中に考へながら、背に負ふて居つた鐵砲の掛金に、そつと、指を挟んで、今にも放ち得る身構へをしました。そして、坊さんに向つて叱る様に云ひました。

『私は、路を急ぐものですが、折角のお招きですから御同道したのです。それに、黙つて隨いて來ればいいことにして、もう廿里近くも參りました。一體何處が家なのです。人を騙すにも程がある。おい、貴様の心は、ちやんとこつちに解つて居るんだ。さあ、覺悟をしろ!』と云ふが早いか、随分、氣の速い男だつたと見えて、鐵砲を構へて坊さんの額を目がけて、ズドンと一發打放ちました。彈は正しく、頭の真中にあたつたのですが、當の坊さんは一向平氣で、痛いとも痒いとも申しませんどころか、ゆうゆうと知らぬ顔をして済ましたものです。

韋生も、これには呆氣にとられました。『何を小癪なッ。』と思つて、續け様に五發を打ますと、坊さんは始めて、命中した處を指で擦つて見て、除に、韋生の方に向き直り、『惡戯は罷めたがい。』と云つたきりで、相變らず前のやうに馬の手綱を執るのでした。さすがの韋生も、これには、度膽を抜かれ

て、どうすることも出来ませんでした。

すると、暫くして、大きい門構への屋敷に着きました。家の中からは、大勢の召使らしい人々が、てんでに、炬火を翳しながら出て来て、坊さんを迎へ



ました。韋生は、今に、どうなることかと、ビクビクしながら、門の外に蹲んで居りますと、坊さんは韋生を案内して屋敷へ入りました。そして、立派な座敷へ通して、

「若いお武家さん。御心配には及びません。ゆつくり御休みなさい。」と、云ひました。

韋生は狐に憑かされた様に、何が何やら判らず、ボカンとするよりほかはありませんでした。それから、別な、これも善美を盡した座敷に、通されました。そこには、山海の珍味を並べた御膳が韋生を待つてをるのでした。韋生は、すっかり恐れ入つて、以前の不禮を恥ぢて、坊さんに手を突いてあやまりました。

「いや、それには及びません。」と云つて、坊さんは韋生を座に着かせて、

「私は、あなたを信じて申上げのですが……」と、顔を寄せ聲を静めて、「實は、私は盜賊の首領です。

終つて、

「さあ、御覽下さい。此が先刻あなたが私を打つた彈丸です。」と云ふなり、右手を挙げ、自分の頭の背を撫でたかと思ふと、五發の彈丸が、バラ／＼と疊の上に落ちて來たのです。韋生は、吃驚して、目を見張りました。

やがて、韋生のために宴會が始まりました。御膳の上には、十本の銀の小刀を供へた仔牛の蒸焼や、美味いお團子が山と盛られて居るのです。韋生は、どれからさきに手を附けていゝのか迷ひました。坊さんは、色々とお世辭を云つたりして、今度は、

「何も御馳走がなくて、生憎でしたが、私には少々こぶんがありますから、それを一つお見せ致します。」と云つて掌を敲きますと、朱の着物に太い帯を結んだ、五六人の強さうな若者が、出て來て階下一列に並びました。坊さんは、韋生の方へ向きながら、これらの者に大きな聲で、



とは申せ、武術のことにつきましては、武士にも劣らず、日夜心をくだいて修業して居ります。今日、はからずも、あなたが、神技とも思はれる様な、鐵砲の達人でをらるゝこと知り、密かに舌を卷いたのです。今後は是非、親しみを交へて下さい。」と云ひ

「この方のお顔を拜せ。若しおまへ達であつたら、今日は、この方の鐵砲に粉微塵に打ち碎かれたであらう。氣を附けい。」と、嗚鳴り附けました。間もなく宴會が終つて、韋生は、獨り寢に就かうとして、室に歸りました。すると、コツ／＼と戸を敲く音が致しました。戸を開けてみると、坊さんがたつた獨りで訪ねて來たのでした。坊さんは、韋生



二二
の傍に坐るなり、是非相談したいことがあるから聽いて呉れと云つて、懇々と韋生に頼むのです。その時、坊さんの云ひますには、
「私は、随分、久しいこと盗みを働いて來ましたが今は、もう年も老いて、先は短い。この際、眞人間になつて、今までの罪を悔ひ改めたいと思ひます。けれども、不幸にして私には、たつた一人の伴で飛と名付ける者がありますが、この子は、盜賊の道にかけては、私も及ばない程のしたゝか者です。然しながら、この子を生かして置いては末が恐しいのです。又私の罪はいつまで経つても滅びません。さればと云つて、私の手にかけて殺すのは親の情として、どうしても忍びません。お願ですから、あなたの立派な武術の腕前で、あれを殺して下さいませんか。どうぞ、私のこの一生の願ひを叶へて下さいませ。」と云つて、涙を流しました。
これを聞いた韋生も、あはれな親の心に同情して



一旦は斷りましたが、涙を振つて、坊さんの願ひを承諾したのでした。
息子の飛々と云ふのは、見れば未だ十六七の紅顔の少年でした。碧い長袖の衣物を身につけて、すらりと丈が高く、肉はかつちりと締つて居りまして、見るからに、頼もしい若者でした。韋生は内心、
「これは油斷がならない。」と思ひました。

やがて、坊さんは、飛々に向つて「裏の小堂で、韋生さんを待つて居れ。」と云ひつけました。それから、坊さんは、韋生の手に一ふりの劔と五發の彈丸を渡して、
「伴もなか／＼の強の者ですから、どうぞあらんかざりの妙技を盡して、射止めて下さい。」と附け加へました。そして韋生を小堂の中に案内して、外へ出られない様に、戸口に重い錠を下し、自分は堂の外で事の終るまで待つて居る事に致しました。
眞暗な小堂の中の四隅には、燈燭が燃えてをりました。あまり廣くも無い堂でしたから、そんな灯でも、向ふの隅に端然と坐つて居る飛々の顔は、かなりよく見えました。韋生が這入つて行くと、飛々はギラリと鋭い視線を投げて、さつと立ち上りました。彼の身には右手に一條の短い鞭を携へてをるばかりです。韋生も早速、鐵砲に彈丸をこめ、飛々の立つて居る處の隅から三四間離れて、身構へをなし、相

手の虚を狙つてをりました。

やがて、韋生は虚を見つけて、ズドンと一發放ちました。すると、『えい。』と云ふ絹を裂くやうな聲が堂の中に響き渡つたかと思ふと、飛々はヒラリと躍り上つて梁に飛つき、小猿のやうに兩手足でブラ



二四
ンコ下りをしました。彈丸は、狙ひを外れて、柱に深くめり込んでしまひました。韋生は、更に、『何を！』とばかり、一發やりましたが、今度は飛々が壁に沿ふて、やまりの様に床へ飛下りたので、矢つ張り、丸は壁を貫いて外へ飛んでしまひました。そんなことで、いくらうつても、當りません。

またたく間に貫つた彈は盡きてしまひました。かうなると、韋生も、しかたなく、今度は鐵砲を捨て、劍を執り、抜くが早いか飛々の腦天めがけて、地までも通れと打ち下しました。が、飛々は忽ち身を替して、却つて、韋生の小手をした、か鞭で打ちつけました。韋生も、さるものです。死もの狂ひになつて、敵を追ひ廻したものですから、今度は飛々も、到々鞭を折られてしまひました。けれども韋生は、疲れはて、とう／＼飛々に一ヶ所の傷も負はせることが出來ずに、その場にへたばつてしまひました。

挿いて、

『とても飛々さんには、かなはない。殺すどころか此方がまけてしまつた。』と云つて、顔を隠してしまひました。

坊さんは、近くに、ボカンと佇んでゐた吾子の顔をしげ／＼と見据へて、

『韋生さんに感謝なさい。お前が一人前の盜賊になつたかどうかを試して下さつたのだ。あゝあ、お前は、矢つ張り、天晴な盜賊の子や。これはどうにも仕方のないことだ。』と淋しく笑ひました。

其の夜、坊さんは、韋生を相手に酒を酌み、劍術や、弓鐵砲の話で夜の明けるのも知らずに語り合ひました。

翌朝、韋生は、一家の者に別れを告げ、遠く鋒える北嶺の峰々の雪を仰ぎながら、河南の方へ獨り馬を進ませたのでした。

(をばり)



しばらくして、坊さんは、どうしたことかと思つて堂の中へ這入つて來ると、この有様ですから、驚いてへたばつて居る韋生を抱き起して、

『どうしました？』と、訊きました。韋生は、頭を

愛犬物語

小島政二郎



日敷がたつにつれて、バックはいつまでも外の犬の下に附いてゐるのが厭になりました。どうかして橋曳犬仲間の頭になりたいと思ひました。しかし、利口な犬でしたから、無闇に外の犬と喧嘩をして憎まれるやうな真似はしませんでした。殊に、例のスピッツに向つては、どんな目に逢はされても怒らず時の来るのをちつと待つてゐました。

三

ところが、スピッツは、早くもバックの野心を見抜いて、自分の大敵の現れたことを知りました。で、やつつけるならバックの體がまだ北地の寒さに鍛へられてゐない今のうちだと考へたのでせう、折さへあれば、バックをいちめに掛りました。

その日の夕方、一行は荒涼たるバルジユ湖の岸に天幕を張ることになりました。

櫓から放たれるのを待ち兼ねて、バックは或岩陰に上手に罠を作りました。暖かで、寝心地がよさうでした。フランソアが火に炙つて投げてくれる魚を食べて急いで歸つて見ると、驚いたことに、誰かもう自分の罠を占領してゐました。

見ると、それはスピッツでした。スピッツは、バックが近づくのを見ると、唸り聲を立てて威嚇しました。バックは、今日までこの敵に我慢に我慢を重ねて來ましたが、もう勸忍袋の緒が切れました。矢庭に、スピッツ目掛けて飛び掛つて行きました。

スピッツの目に映つてゐるバックは、體ばかり大きい癖に大の臆病者で、とても自分に向つて来る勇氣のある犬とは思つてゐませんでした。それが今突然荒れ狂つて噛みついて來たので、スピッツは事の意外に驚きました。

二匹は縫れ合つて、毀れた寢所から飛び出しました。それを見たフランソアは、びつくりして聲をあげましたが、忽ち「あゝ、さうか。」と事の起りを推量すると、あわてゝバックに

「駄目だ、仕方ないから、譲つてやれよ。」と呼びかけました。

二匹は、足を十分踏み締めて、牙を剥いて睨み合ひました。暫くは低く唸り合つてゐましたが、つとスピッツは體を動かしたかと思ふと、バックを取り巻くやうに攻め寄せて、さつと引き上げると見せて矢庭に飛び込んで來ました。これが、山犬流の戦法でした。バックは見事に敵の第一の攻撃を引ッ外す

が早い、自分も同じやうに、スピッツを攻めると見せて引き上げ、引き上げると見せて飛び込んで行きました。

かうして二匹が命の遣り取りをしてゐる最中に、この廣い雪の大海原の上を、百匹近く群をなして食物を漁り歩いてゐた宿無しの山犬が、パンや魚の匂を嗅ぎつけて、突然天幕を襲つて來ました。

バックもスピッツも、その他の樺犬も、餓鬼のやうにお腹をへらした山犬の群に取りかこまれました。もうかうなつては、仲間同志の喧嘩なんかしてはゐられませんでした。バックもスピッツも毛を逆立てて目に餘る泥棒犬の大群に向つて行きました。

山犬にとつては、樺犬を殺せば、それが餌食でした。だから、すさまじい勢ひで攻め立てて來ました。バックは忽ち三匹の山犬に取りかこまれて、あつと云ふ間に、頭と兩肩とを幾所か噛裂かれました。弱虫のビリーは、いつものやうに泣いてゐるばかり

擇つて泥棒犬を追ひ散らしてくれなかつたら、樺犬は九匹とも山犬の群に斃されて、餌食にされてしまつたでせう。

幸ひ一匹も死なずに助かりましたが、その代り、誰も彼も四五ヶ所づゝ傷を受けてゐない者はありませんでした。フランシアはそれを見て、

『あゝ可哀想に。何と云ふひどい目に逢はせるのだらう。お前達みんな、この疵が元で氣違になんかなつてくれるなよ。』

實際、目的地まではまだ百七十里もありました。犬が命とも云ふべき樺の旅で、全部に氣違ひにでもなられたらそれこそ大變ですから、フランシアの心配するのも無理はありませんでした。

ところが、二三日旅を續けてから後、或日突然ドリと云ふ犬が發狂をして、いきなりバックに飛び掛つて來ました。バックは恐ろしさに驚いて逃げ出しましたが、一足遅れてすぐドリも追ひ掛けまし

でした。デーブとソルとは、幾十とない傷を負ひ全身に血を浴びながらも、並んで勇敢に戦つてゐました。ジョーは惡鬼のやうに敵に食つてかゝつて、一匹の前足に噛みついたかと思ふと、ボキリと骨の折れる音がしました。すると、バイクが、その跛犬に躍りかゝつて、一噛みで殺してしまひました。

バックは傷を負つてから、不思議に勇氣が湧き立つて、一匹の敵の喉元に喰ひ附きました。頸動脈を噛み切つたのでせう。ヒラリと素早く飛び退いたにも拘はらず、飛び散る血潮に全身が眞赤に染められました。口の中に残つた生温い血の味ひが、一層彼の氣を荒々しくして、咄嗟にまた、外の敵に飛びかゝつて行かせました。ところが、突然横合から、あべこべにバックの喉へ噛み附いて來た奴がありました。振りはずして置いて、見ると、それは味方のスピッツが、卑怯な眞似をしたのでした。

若しこの時、ペロールとフランシアとが、根棒を

た。幾ら一生懸命に走つても、すぐ一足うしろにドリリーの唸り聲が聞えて、どうしても逃れ去ることが出来ませんでした。で、氷の張つた川を渡つて島へ上つて、島を走り抜けてまた川へ降り、第二の島、第三の島と逃げ廻つて、とうとう川の向岸まで逃げのびてしまひました。が、それでもまだ、ドリリーは夢中になつて追ひ掛けて來ました。しまひには、バックは疲れ切つて息苦しくなりました。

その時、フランシアは急いで、斧を手にして川のこつち岸まで出張つて行きましたが、

『バック、バック。』と、大きな聲で呼びかけました。すると、その聲に、初めてバックは向きを變へて川の上を眞一文字にフランシア目がけて馳け寄つて來ました。苦しげに息を切らして喘ぎながら……。

フランシアは、斧を振りかぶつて待ちかまへてゐました。その前を、バックが走り抜けたかと思ふとさつと打ち鉚された斧の下に、ドリリーは、コロリと

倒れました。

バックは勢ひ餘つて櫓にぶつかつて、その場にへたばつてしまひました。力

は全く脱け切つて、呻きながらハア／＼肩で息をしてゐました。

と、突然、スピツ

ツが躍りかゝつて、全く戦ふ

力のないバ

ックを二

度までも

攻撃し、

骨に達

する程

の大



怪我をさせました。

「こら、何を卑怯な真似をするのだ。」と云ふと一緒に、フランソアは鞭を揮つて、ビシリ！ スピツツを打ち懲りました。

「キャン／＼。」と逃て行くスピツツを見送りながら「あいつは本當に仕様のない奴だ。今にバックを殺してしまふかも知れない。」と、ベロールが心配さうな顔付をして云ひました。

四

一行は、いよくこの旅行中で一番難所と云はれてゐる「三十マイル川」を溯ることになりました。川の岸は櫓を曳いては通れないので、氷の張つてゐるのを幸ひ、川の上を走るのでした。寒腰計を見ると、氷點以下五十度を示してゐました。

ベロールは、櫓の先に立つて進むのですが、運悪く氷の薄い上を踏んで、スポリ急流の中へ落ち込む



ことがありました。落ち込んだが最後、寒さと、水は氷の下を流れてゐるのですから、どこからも這ひ上ることが出来ずに、凍え死んでしまひます。――ですから、ベロールは氷を踏み割つて落ち込むと同時に、早業で、手に持つてゐる長い竿を、ヒラリと穴の上に横たへて、水の中へ宙ブランソになつて助かるのでした。その寒いこと、云つたら、服はビンとまるで鐵のやうに突ツ張つてしまつて、焚火で乾すのも容易ではありません。

また或時は、櫓が落ち込んで、デープとバックまで引きすり込まれ、助け上げるまでに二匹とも半分凍え死んでゐたこともありました。その時も、ドン・ドン焚火をして火のまはりに毛の焦げる程近く二匹を寄せて、汗と滴がダラ／＼垂れるのを、いつまでも駆けさせました。

さう云ふ危険と苦しみと戦ひながら、それでも一行は「大鮭川」を溯り、「小鮭川」を溯り、「五本橋

の瀧^{たき}を通して、目的地^{もく的地}のドーソンまで辿^{たど}り着^つくとに成功^{せいこう}しました。

こゝで一週間^{しゅうかん}休^{やす}んで、またベロールは政府^{せいふ}の大事^{だいじ}な手紙^{てがみ}を託^{たく}されて、引き返^{かへ}すことになりました。

その間に、犬達^{いぬたち}もすっかり疲れ^{つか}れを休^{やす}めて、前^{まえ}より一層^{いっそう}元氣^{げんき}で歸^{かへ}りの旅路^{りょろ}につくことになりました。

三日^{さんびつ}目の晩^{ばん}、飯^いを食^くべた後のことでした。ふとどこからか兎^{うさぎ}が一匹^{ひき}飛び出^だして、ビリーの目の前^{めまへ}を掠^{さら}めて行^いきました。ビリーは忽ち^{たちまち}飛びかゝりましたが噛^かみつきそくなつたので、組犬^{くみけん}全部^{ぜんぶ}が叫^{こゑ}び聲^{こゑ}をあけて一時^{いとき}に追^おひかけました。すると、その聲^{こゑ}を聞きつ

けて、五十間^{いそかん}程^{ほど}離れたところに同じやうに野營^{やえい}をしてゐた外の天幕^{てんまく}から、四十匹^{しじゅうひき}ばかりの樞犬^{しゆけん}が飛び出^だして來^きて、この群^{ぐん}に加^{くわ}はりました。

兎^{うさぎ}は實^{じつ}によく跳^はんで走^{はし}りました。ビヨン／＼、ビヨン／＼、月の光^{つぎのひかり}に蒼白^{そうはく}く照^てらし出^だされた、凍^こつた川^{かわ}の上^{うへ}を走^{はし}り降^{くだ}つて、小さな枝川^{えだがわ}に逃^にげ込^こんで行^いき

ました。犬^{いぬ}の群^{ぐん}は、素晴^{すはら}しい力^{ちから}で雪^{ゆき}を蹴^け散^{さん}して突進^{とっしん}しました。バックは、忽ち^{たちまち}五十匹^{いそひき}の荒犬^{あらいけん}の先頭^{せんとう}に立^たつて川のまがるが儘^{まま}に追^おひかけましたが、目の前^{めまへ}に雪^{ゆき}の靈^{れい}のやうな眞白^{まっしろ}な姿^{すがた}だけは見^みえてゐながら、どうしても追^おひ附^つくことが出来^きませんでした。彼は躍^{はね}起^おとなつて唸^{うな}りながら、大きな體^{からだ}を波^{なみだ}打^うたせて、一躍^{ひととび}また一躍^{ひととび}、連^つ二無^ふ二突^つき進^{すす}んで行^いきました。しかし、それにつれて、兎^{うさぎ}も輕々^{かるく}とスル／＼、スル／＼にるやうに段々^{だんだん}狭^{せま}い川^{かわ}上^{うへ}へ逃^にげ込^こんで行^いくのでした。

あなた方は、蜻蛉^{せみ}や蟬^{せみ}を採^とりに行^いつて、向^{むか}うが逃^にげれば逃^にげる程^{ほど}夢中^{むちゅう}になつて、我^{われ}を忘^{わす}れて追^おひかけた經驗^{けいけん}をお持ちでせう。バックを初め五十匹^{いそひき}の犬^{いぬ}共^{ども}は、今^{いま}丁度^{ていど}あれと同じ心持^{こころもち}で、我^{われ}を忘^{わす}れて追^おひかけてゐるのでした。殊^{こと}に、バックの如^{ごと}きは先頭^{せんとう}に立^たつて、若^{わか}し掴^{つか}まへる者^{もの}があるとするれば、それはとりもなほさず自分^{じぶん}ですから、外の犬^{いぬ}よりも一層^{いっそう}夢中^{むちゅう}に

を忘^{わす}れなかつた犬^{いぬ}がゐました。それは例^{れい}のスピッツでした。彼は追^おひかけながらも、或^{ある}計略^{けいりやく}を考^{かんが}へ附^ついて、こつそり群^{ぐん}を離^{はな}れました。

そこは、丁度^{ていど}枝川^{えだがわ}が大きく右^{みぎ}へ曲^まつて、また左^{ひだり}へうねつてゐるところでした。ですから、正直^{しやうじき}に兎^{うさぎ}の跡^{あと}を追^おはずに、川^{かわ}から岸^{きし}へ跳^はび上^あつて、眞直^{まっすぐ}に走^{はし}り抜^ぬければ誰^{たれ}よりも早^{はや}く左^{ひだり}へうねつて來^きる川^{かわ}の上^{うへ}へ出^でられる譯^{わけ}でした。かう

して彼は先廻^{さきまわり}り



なつてゐました。
さうした中で、たゞ一匹^{ひき}、夢中^{むちゅう}になりながらも我^{われ}

をして兎の來るのを待ちかまへてゐました。

バックはそれを知りませんでした。右へ曲つて左へ曲る間に、彼は幾らか兎に追ひ近づいたのを知つて、更に勇氣を奮ひ起して、突き進んでゐる時でした。

突然、左の岸の上から、灰色の何物か兎の眞上へ飛び降りるのを見ました。

バックは、自分が取るものと極めてゐた獲物を横取りされた腹立ちで、その灰色の動物へ、牙を鳴らして躍りかゝりました。それがスピッツであることを知ると、彼の怒りは猛然と油を得た火のやうに燃え上りました。

二匹は肩と肩とを打つて、飛び散る雪の中に轉げ合ひました。

しかし、スピッツは忽ちにして立ち直つたかと思ふと、全轉んでゐた状も見せずに、いさなりバックの肩先に一撃を加へて、ヒラリと飛びのきました。

と、すぐまた飛び込んで来て、一噛み噛むが早いカヒラリと體をかはしました。

その間に、バックも十分足場を踏み締めて戦鬪の準備を整へました。その瞬間に、彼は覺悟を極めました。いよいよその時が來たことを知りました。生きるか死ぬかの一番勝負の時が來たことを悟りました。

二匹は、耳をうしろに寝かし、物凄く唸り聲を立て、互に敵のまはりを廻りつゝ、鋭く隙を狙ひ合つてゐます。

五十匹に近い犬の群は、バックとスピッツのまはりに圓陣を描いて、靜かに勝負の成行を見守つてゐました。どつちか一方が斃れれば、彼等の餌食になるのです。

空には、蒼白い月が雪の大海原を冷たく照らしてゐました。

(つゞく)

橋の袂 (推薦)

名古屋市 島本夫二

橋の袂で

月を見りや

月が柳に

かかります

アレかかります

橋の袂の

お月さま

橋の擬寶珠も

光ります

アレ光ります





赤い靴

中西悟堂

それは郊外地に建つてゐる、或る立派な家でした。その家は眞白な洋館で、幾つもの窓や露臺や庭園がありました。窓や露臺にはいつも美しいサイネリヤやアネモネやアスパラガスの花の鉢が置かれてありました。庭には澤山の樹々が植ゑられてあつたり、やはらかい敷物のやうな芝生があつたり、花菱草だの薔薇だの、花壇があつたり、花壇の間を縫つてゐるしつ

とりとした路があつたりしました。そして山吹の繁つてゐる庭の隅には、僅かばかりの空地に鞦韆や遊動圓木が備へられてありました。窓からは、男の子や女の子の顔が出ました。その子供達のお母さまの優しい顔や、お父さまの顔もよくそこに見えました。庭には枝から枝へ可愛らしい小鳥達が飛び交つてゐますし、綺麗な蝶が花から花へ飛び廻つてゐます。よく晴れた日には、庭はまるで笑つてでもゐるやうに輝きました。雨の日にはまた雨の日で庭一面の青葉や花が、しつとりと優しく潤ひました。この家はほんたうに幸福さうに見えました。ところがこの家にはたつた一つ不幸なことがあつたの

です。といふのは、この家の主人は大層朝寝坊だつたのです。もう太陽が高く昇つて、庭の鳥達が午前の歌を歌ふ頃でも、また外の往來を人や車が澤山通るやうになつても、なか／＼寢床から出ないのです。それはかりではありません。お父様を見習つて、子供達も皆寝坊助でした。この家には英夫といふ男の子と、淑子、君子といふ二人の女の子とありました。一昨年上の英夫はもう七歳でしたが、お父さんのやうに、大層な朝寝でした。英夫が起きるのは、いつもお午頃でした。そして女の子達も英夫に負けず劣らず寝坊をします。だからこの子供達は朝の太陽の美しさも知りませんし、葉の上にな

まる優しい朝露の色も知りません。そして寝坊のためか、英夫も淑子も君子も、からだが弱くて、顔色が悪いのでした。この子供達はいつも萎れた草の莖のやうに元氣がありませんでした。そしてそれと共に妙に心もひねくれてゐました。子供達がこんな風だものですから家の中は何となくひつそりとして寂しうございました。お母様は子供達のからだの弱いのと、心のしなびてゐるのを大層心配いたしました。そしてどうかして朝寝の悪い癖を直さうと思ひました。早起きさへすれば、きつとからだも心もよくなるし、子供達が元氣になれば淋しい家の中も春のやうに賑やかになると思ひま

した。或る日のこと、お母様は英夫に向つて「ねえ英夫や、あなたはおのお日様を、ちつと眞正面に見ることが出来ますか。」「いゝえ、だつて眩しいんですもの。」と、英夫は答へました。「ところが朝早くだと見ることが出来るのよ。英夫さんはまだ知らないだらうけれど、お日様が雲を破つてお出ましになる時は、それは何とも言へない程綺麗なのよ。大きくつて、眞赤で、まるで繪のやうなのよ。おまけに雲といふ雲が薔薇の花のやうに赤くなつて、その赤い雲が段々に薄れてゆくと今度は藍色の空の中に、ゆつたりと王様のやうにお日様があらがりになるんだものね。それは此の

世では一番美しい景色なのよ。」

「さう。そんなに綺麗なの？」と英夫は珍しさうに問ひ返しました。「そしてそのお日イ様はちつと見てゐられるの？」

「さうともね。その綺麗なお日イ様をちつと見てゐると今度はお庭の樹も草も露を浴びてきら／＼と寶石みたいに光りますわ。そしていろ／＼な小鳥達が、それは／＼面白い歌をあつちの樹の枝やこつちの繁みで歌ひ出すのよ。英夫さんはそれを見たいとは思ひませんか。」

「だつてねむいんだもの。僕そんなに早く起きられないや。」

「そんならお母様が起きてあげよう。」

「厭だ、厭だ。朝のお日イ様やお庭がどんなに綺麗でも起きるのは厭だ。」と、英夫は駄々をこね始めました。

かうしてお母様の折角の心持も無駄になつてしまひました。お母様は、どうしたら早起の子供にすることが出来るだらうかと、それはかり考へるやうになりました。

二

かうして朝寢を續けてゐるうちに、英夫は段々からだが弱くなつて、病氣ばかりするやうになりました。胃病をわづらつたり、頭がぼんやりしたりしました。そして益々朝起きが出来なくなつてゆきました。六つになる淑子も、五つ

になる君子も、やはり英夫と同じやうに、からだを悪くしては朝寢をして居りました。英夫はもう何を食べてもおいしくありませんでした。その癆胃病のことです。無闇に何かを食べたいのです。そして、さて食べて見ると何もかもまづいのです。

「ねえ。何かうまいものはないの。おいしいものを頂戴よ。」

かう言つて英夫はいつもお母様にねだりました。女の子供達も同じことです。お母様は或る日のこと、かう言ひました。

「英夫や。本當においしくつて、おなかに薬で、そして非常に美しいお菓子があるのだよ。」

しい英夫は燃えつくやうに問ひかけました。

「あすこを御覧なさい。」とお母様

は庭の楓の樹を指しました。楓の樹の青い枝の一本が窓にかぶさるやうにして繁つてゐましたが、その枝には飾物のやうに綺麗な、一足の赤い小さい靴が結びつけられてゐました。

「あれは靴ぢやないの。」

「さうですよ。お靴ですよ。あの靴の中にそのお菓子が入つてゐるんです。」

「おいしい／＼お菓子か？」

「さうです。」とお母様は優しく微笑みました。英夫

はすぐに窓のところへ駆け寄らうとしました。窓から手をのばせばすぐ届くところにその靴はあつたのですが、お母様は英夫を止めました。

「いゝえ。駄目々々。今行つたつてありませんよ。そのお菓子は人間のこしらへたものではないんだよ。」

「おやあ誰がこしらへるの？」と英夫は不審さうにふりかへりました。

「夜明の神様がこしらへるのです。」

「さうです。夜明の神様がおこしらへになるのです。」とお母様はきつぱりと言ひました。そして續けま

した。『まだお日様の出ないうちにおこしらへになつて、そつとあの靴の中に入れてお置きになるのです。それはさら／＼と桃色に光つてゐて、夜明の露で出来てゐるお菓子なのです。だからお日様がおのほりになると、もうすぐ消えてしまふのです。』

『だつて僕寝坊だもの。そんなお菓子は食べられやしないや。お母様が起きたら、それを取つてしまつて置いてくれるといふな。』

『そんなことは出来ませんよ。夜が明けると、もう消えてしまふんだものね。だから食べたかつたら夜の明けないうちに起きなければなりませんよ。そしてお母様なんぞに頼まずに自分で取つて喰べな

ければなりませんよ。お母様は毎朝々々食べてゐるけど、そりやもう何とも言へないやうに美しくつて、おいしいんだものね。』

『あゝ／＼。僕も食べたいなあ。』と英夫は思はず叫びました。

『そんなに食べたいのなら早くお起きなさい。おいしいばかりでなく、そのお菓子はたいへんからだに薬なのです。毎朝それを食べてゐると、もう決してからだが悪くなるなんてことはないのです。おなかも丈夫になるし、風邪も引かないしね。』

『ちやあ僕、あしたから早く起きてそれを食べよう。』と英夫はその不思議なお菓子が食べたさに、遂に決心してかう言ひました。

『それちや、きつとあしたから早く起きるのですよ。』と、お母さんは嬉しうに英夫と約束をいたしました。

三

その翌日の朝、英夫は本當に夜の明けないうちに起きました。そしてすぐに窓のところへ飛んで行つて靴の中を探しました。ところがどうでせう。本當に桃色のお菓子が、しかも三つも入つて居りました。それは肌ざわりのすべ／＼した胡桃ぐらゐの大きさのお菓子でした。英夫はその内の一つを食べて見ました。それは今迄食べたこともないやうにおいしいお菓子でした。あまりおいしかつたので



英夫は自分一人で食べてしまふのが惜しくなりました。

『さうだ。淑子にもやらう。君子にも。』

さう言つて英夫は二人の妹を起しにゆきましたが、妹達は到頭起きませんでした。英夫は残念さうに舌鼓を打ちました。

『チエツ、駄目だな。こんなにうまいお菓子なのに。』

その内にやがて夜が明け始めて太陽が上がりかけました。英夫はお母様から、お日様が上るとそのお菓子は消えてしまふといふことをきいてゐたので、仕方なしに三つともそれを食べて了ひました。

と、そこへお母様が来て、『どうだい。英夫、お菓子はうま

かつたかい。』

『えゝ、本當においしかつたの。あしたの朝もあるの?』

『ありますとも。夜の明けない前に起きさへすればきつとありますよ。』

『そんなら、あしたも僕早く起きるよ。』

英夫は元氣にかう言つて、あしたの朝を楽しみに待ちました。かうして四五日程は英夫はたゞひとり朝起きをいたしました。が、自分ひとりでは何だかつまりませんでした。妹達にもそのお菓子を食べさせてやりたいと思ひました。そしてそれを食べながら夜明の庭で一緒に遊びたいと思ひました。英夫は淑子と君子とに、そのお菓

子の大層おいしいことを言つてきかせました。

『それは人間がこしらへるんぢやないんだよ。夜明の神様が露でこしらへになるんだつて。』

かう言つて、お母様から聞いた通りを話しましたので、妹達も早起がしたくなりました。かうして到頭三人は毎朝早く起きて、その美しいお菓子を一つづつ食べるのでした。そして食べてしまふと、庭の芝生へ出て遊んだり、樹の繁みの間で隠れん坊をしたり、鞦韆に乗つたりして、さやつ／＼と戯れました。しまひにはお母様も一緒になつてその仲間に入りました。それは或る非常に美しい夏の夜明でした。家の裏に廣い野がつゞ

いてゐて、その果にこんもりした森が見えましたが、その森のうしろから、まるで血のやうな太陽が顔を出しました。

『あれ／＼お母様。』といつものやうに庭で遊んでゐた英夫は、びつくりしながら、その太陽を指しました。

『あれは何でせう？』

『あれかい。お日子様ぢやないの。』

『あれがお日子様？ お日様があなたに大きいの？』

『さうだよ。そら、あなたにいかお話したことがあるでせう。夜明のお日様はちつと見てゐるこ

とが出来らつて。』

英夫はいつかお母様が話してゐた朝日の事を思ひ出しました。『淑子も君子も早く来てごらん。綺麗なお日様だよ。』妹達も英夫のそばへ飛んで行きました。そして不思議な出来事でも見るやうな目をしてそれを眺めました。

やがて太陽のまはりに散らばつてゐる雲の群が一度に蒼白色になつたかと思ふと、太陽の清らかな光が颯と廣い野の上いちめんに充ちわたりました。

英夫の眞白い家も桃色に輝きました。露を持つた庭の樹々の梢がきら／＼と水晶か紅玉のやうに光りました。と今度は庭の小鳥達が幸福さうに歌ひ始めました。あつちの枝でもこつちの枝でも、ちい



／＼ちくちくと面白さうに囁つてゐます。庭の花々もそれにつれて真珠のやうに一つ二つと開いてゆきます。あらゆるものが太陽の恵みを受けて、一齊に麗しい姿を見せて居ります。英夫はすつかり驚いて鳥の聲をきいたり、花を見たりしました。そしてこの世にもこんな立派な世界があるのかと思ひました。

『どうです、英夫。夜明といふものは美しいものでせう。』と、お母様はにこ／＼しながら英夫にかう言ひました。

『本當に立派ですね。お母さま、僕はもうお菓子がなくなつたつて毎朝早起をしますよ。』英夫は嬉しさのあまりお母様にかう約束をいたし

ました。

やがて英夫は、樹や、澄んだ青空や、鳥達や、花や、太陽や、快く肌を撫でる朝の空氣や、ありとあらゆるものを愛したくなりしました。

そして、かうした愛するもの、中にゐて、お母様や妹達と遊んで居られる自分を、幸福者だと思ふのでした。

英夫は、お母様に言ひ掛けました。

『ねえお母様。お父さまはなぜ朝寝坊をなさるんでせう。こんなに夜明はいいのに、なぜお起きにならないのでせう。』

お母様はその譯を答へる代りにかう仰有いました。

『あなた達三人でこれからお父さまを起しておあげなさい。そしてお父さまも私達のお仲間にしてしまふのです。』

四

その翌朝から、この夜明の庭にお父様の姿も見られるやうになりました。

お父様は子供達に交つてまるで子供のやうに鬼ごつこをしたりして、愉快さうに遊びました。

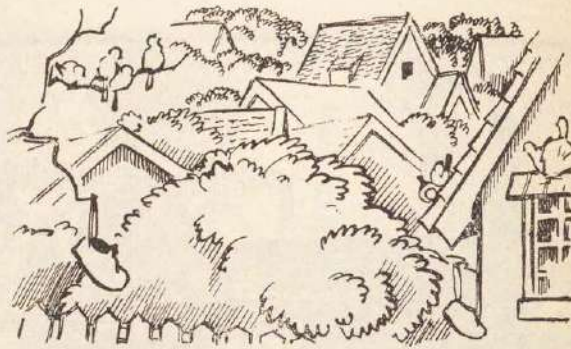
こんなことが一二ヶ月も続きました。いつの間にか英夫も淑子も君子も、すっかりからだが丈夫になつて、顔の色も見違へるほどよくなりました。

四

それに何よりもいいことは、今迄愚圖々々してゐて、意地悪でさへあつた子供達の心がすっかり素直になり、優しくなりそして活潑になつたことでした。

この家の家族の心は一日一日と明るくなつてゆきました。そしてしまひには近所でも羨む、らゐ幸福な家になりました。

それではどうして夜明の靴の中にそんなお菓子があつたのでせうそれは言ふ迄ありません。どうかして子供達を早起させようと苦心したお母様は、子供達の知らない間に、そつと櫛の枝に赤い靴を吊したのです。そして毎朝々々、子供達の起きないうちに、靴の中



へ桃色のお菓子を入れて置いたのでした。

子供達は朝早くそれを食べたからおいしかつたことに氣が付きませんでした。そして本當に夜明の神様がそこへ入れて置くのだと信じてゐました。

かうしてお母様の優しい計略は美事に成功したのです。

近所にも澤山朝寝の子供のある家がありましたが、その家々のお母様達は、英夫のお母様のしたことをみんな讃め合ひました。

そして英夫のお母様に見習つて、みんなそれと同じことをいたしました。

やがてこの部落にはあつちの家にもこつちの家にも、庭の樹の枝に赤い靴がさげられるやうになり

ました。

それと共に此の部落の子供達はみんな早起になり、そして優しい、活潑な子供達になりました。

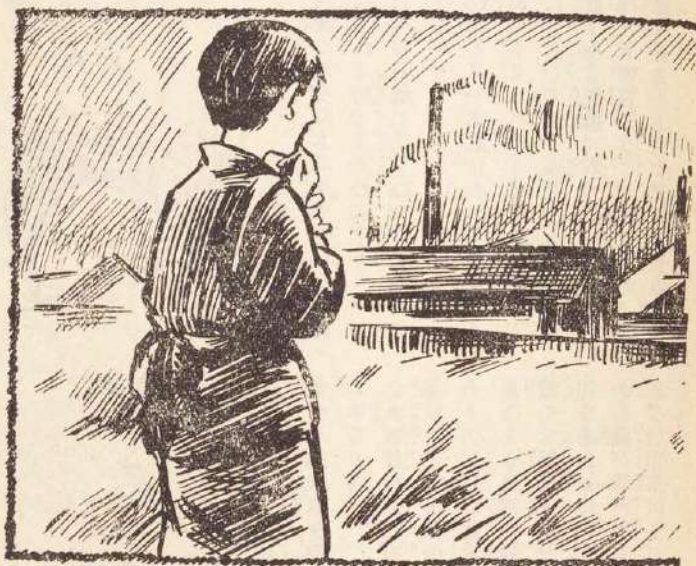
ですから、この部落を通る人達は、方々の庭の樹に赤い靴がさがつてゐるのを見て、不審に思ひました。

そして又、どの子供達も天使のやうに立派で優しい心を持つてゐるので、大層不思議がりました。

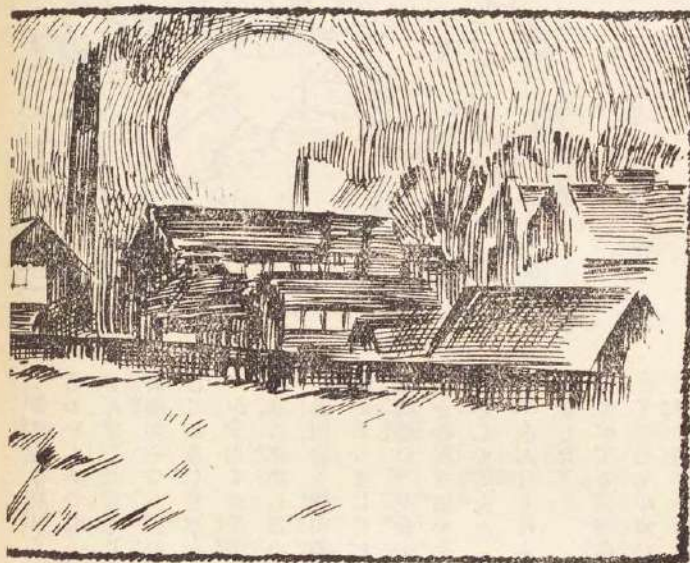
やがて、此の部落は『天使の部落』といふ名がついてしまひました。

皆さんもこんな部落をこしらへて見たくはありませんか。

(をばり)



母さんも
 いつも今ごろ
 歸るのに
 今日はどうして
 遅いのか？
 もう夕飯の
 ころだのに
 暗い空地で
 ぼく一人
 赤い月みて
 泣いてゐる



晩景

四六

青手あきら

ぼくの母さん
 歸るころ
 けふも空地で
 待つてるご
 ぼつかり赤い
 月が出た
 工場の屋根に
 月が出た
 工場がへりの



尾なし鼠の話

(理科童話)

大戸喜一郎

四八

『晩になつたら、王さま鼠が探險につれて行つてくれる!』
尾なし鼠は大喜びで夜になるのを待つてゐました。そして日がくると、一郎鼠はさつそく王さま鼠のところへ出かけて行きました。そしてたゞふたりきりで、お勝手へと探險に行つたのです。けれども可哀さうに、尾なしの一郎鼠は王さまと出かけた最初の晩に

大へんな失敗をやらかしてしまつたのでした。
大きなからだの王さま鼠は、一郎鼠にとても出来さうにない、いろ／＼な危い蕨當をやりました。あるときは細い針金の上を上手に渡つて行きました。あるときは一間くらゐはなれた籠に、天井の梁から飛びこみもしました。さうして、一郎鼠がまだ食べたこともな

い、おいしいご馳走を分けてくれたのです。それで一郎鼠は自分まで偉くなつたつもりで、棚の上で大威張りであちこち捜し歩きました。たうとう一郎鼠は捜しあてました。小さな赤い紙のはつてある箱でした。尾なし鼠は得意になつて自分の分捕品をかちりはじめたのです。そしてやつと先の黒い細長い棒を一本くはへ出して、かち

つて見ました。けれどもまぐも何ともありません。それで食べるのはやめて、ごろ／＼、ごろ／＼、ころがしたり、足でか／＼へたりして、ざればはじめました。一郎鼠がかうしてむちうで小さな箱を投げ出したときです。床の上にボタンと落ちるといつしよに、箱は「ボツ!」と大きな聲を出して、バツと燃え上がったのです。一郎鼠はびつくりして、大急ぎで流しの下へかくれてしまひました。仕合せなことに、燃え上がった火は、その時は消えてしまつて、あたりはまたもとの闇にかへつてをりました。

ものどきかされました。そしてまつ赤に輝き出したのが火で、それを食べようとでもしようものなら、大怪我をするのだときかされました。
一郎鼠はさうして次第に大きくなつて行きました。そしてだんだんと探險に行つても、失敗しなくなりしました。
ある晩のことでした。王さまはそれは／＼面白い所へつれて行つてやると言ひました。けれども非常にもむづかしい仕事で、どんなことがあつても言一つたてることができず、大きな聲などは間違つてもしてはいけないといふのでした。鶏小舎へ忍びこんで、雌鶏の抱てゐる卵を取つて來ることです。

さつそく仲間うちから腕のきいた鼠どもが狩り集められました。どれもこれも、みんな年をとつた大きな偉さうな鼠ばかりでした。その中にたつた一匹一郎鼠が、若い鼠だつたのです。ですから、尾なし鼠の得意さといつたらありません。
王さま鼠を先頭にして、みんなは静かに／＼進んで行きました。鶏小舎は、母屋の廣い土間の天井にあるのでした。たつた一つの梯子が小舎に寄せかけてあつて、それを傳つて、中へ入るのです。まづ一ばんに年寄り鼠が梯子をつたつて、小舎に入つて行きました。そして、鶏たちが氣持よく寝こんでゐるのを見届けてから、み

んなそろ／＼と這ひ上がつて行きました。もちろん音一つ立てることはできないのです。やがてみんな雌鶏の後ろへ、そつと忍びよつて、抱いてゐる卵を静かに静かに、雌鶏に氣づかれないやうに引き出しました。

雌鶏は大へん注意深いので、少しでもからだを動かさうものなら大へんです。眼がさめたがさいご大聲にどなり出すに違ひありません。さうなると家ぢうの人の眼を覺してしまふことになるのです。けれども仕合せと、たれひとり雌鶏の眼をさますずに、卵を引き出すことができました。一郎鼠はみんなの巧いのに感心して見とれてをりました。それでもこれから

がいよ／＼大へんなのです。雌鶏の腹の下から取り出した卵を、いち／＼地面に下ろさなくてはなりません。

王さま鼠は一枚の長い鳥の羽根を持つて来て、一郎鼠にくはへさせました。それから卵を腹の上のせて、手足でしつかりとかゝへさせました。すると二匹の年とつた鼠が、一郎鼠を中にはさんで、くはへてゐる鳥の羽根をめい／＼口にくはへたのです。さうして、しづかに／＼梯子を下りはじめました。一郎鼠は梯子で背中をするするかきむしられるので、襟ばくしてしかたがありませんでした。それでも笑ふことも、口一つきくこともできません。やつとがまんを

して一つだけ地面へ運びました。さうして三つも四つも、みんなで十あまりも地面へ運びました。またこれと同じやうなやり方で、住家まで卵を運んで來ました。

一郎鼠はこの晩の面白かつたことを一生忘れる事はできません。また卵をわけてもらつて食べたときのおいしさも、決して忘れられないことでした。

けれどもそのうちに、一郎鼠をあれほど可愛がつてくれた王さまは、だん／＼元氣がなくなつて、今では少しも外へ出ることがないやうになりました。そしてある日のこと、一郎鼠を呼んで、王さまになるやうにと言はれました。尾なしの一郎鼠が、王さまにな



るのです。でも今では尾なしの一郎鼠はからだも大きくなり、いろいろな業もできる立派な一匹前の鼠だつたのです。それでたうとう王さまになることになりました。

一郎鼠が王さまになつてから、三日目に、もとの王さまはなくなりました。

王さまとしての一郎鼠がどんなことをしたか、それは皆さまの想像にまかせて、たゞ一つ二つ、一郎鼠がどんなに利口だつたかを話申しませう。

ちやうど一郎鼠が住んでゐる家に、大きなお祝ひがあつた時です。いく日も前からお勝手では大せいのお客さまに出すお料理をこしらへるので、大いそがしでした。一日ちうおいしい匂ひが、ぶん／＼にはつて來るのです。その匂ひをばん早く嗅ぎつけた一郎鼠は、兎になるのを待つて、さつそく出かけて行つて見ました。すると鳥だの、魚だのが天井から一ぱい吊り下がつてをりました。

『かうしておけばいくら鼠でも届きはしない。』

お料理をこしらへる人が安心して自分の新案を得意になつてさう言つたのです。まつたくお魚は天井から細い針金でさげてあり、その針金の中ほどにはブリキで屋根の様に蔽ひがしてあるのです。ですから、下から飛びつかない限りは、どうしたつて届きつこはありません。

さすがの一郎鼠も、これには手のつけやうがありませんでした。棚から近いものでしたら、飛びついて届くこともできるのですけれど、遠くはなれてゐるのでさうすることもできません。ちやうど大きな魚の下がつてゐる下に臺がありまして、下から飛び上がつて見ましたが、なか／＼届くどころではありません。すつかり閉口して、一郎鼠は口惜しさに獲物をちつとにらんで、長いこと見つめてをりましたが、そのとき、一郎鼠はとつせん、

「チュ、チュ！」となき出しました。そして大いそぎで引き返して行きました。大きな丈夫さうな鼠だけが、十

匹あまりも流しの土管の中から這ひ上がつて來ました。そして皆臺の上に乗つて、暫くといふものちつと獲物を見つめながら話してをりました。鶏の肉のま下と思はれる所へ、中で一ばん大きな鼠が立ち上がりました。すると第二の鼠が静かにその肩の上にのつて、調子をとりながら立ち上りました。その上に、第三の鼠が立ち上りました。さうして、第四第五といふやうに、上へ上へと乗つて行きましたが、見事に、鶏の肉へ届いてしまつたのです。

あくる日のこと、自慢をした料理をする人が出て來て、魚も鶏もみんなかぢられてゐるのを見て、どんなに口惜しがつたかしれませ

ん。

「何といふ狡猾な奴だ！」

大怒りに怒つて、料理人はきつと鼠を取つてやるといつて、おいしさうなお魚の片れを、お勝手の隅つこに放つておきました。

やがて夜になりました。一郎鼠は大せいの仲間をつれて、お勝手に入つて行きました。するとおいしさうなお魚が、お勝手の隅にあるではありませんか。みんなはこれを見て大喜びで飛びかゝつて行きました。と、一郎鼠は、みんなに言ひました。

「今晚と、あしたの晩と、あさつての晩、きつとこのお魚がこゝに出されるに違ひない。今晚と、あしたの晩には食べてもいいが、あ

さつての晩には決して食べてはいけない。もし食べようものなら、それこそお前さんたちの命はなくなるんだ。」

さうきいて、仲間の鼠たちは、

でした。それどころか、大へんにおいしい肉だつたのです。そのあくる晩も、みんなはまたあの威張りやの料理人がおいてくれた、おいしいお魚を御馳走にな

した。まつたく、昨日のよう、おととひのように大きくて、おいしいさうだつたのです。

「三晩目だ！食べてはいけない。」一郎鼠はさう言つてみんなが食



今さらのやうに一郎鼠の利口なことに感心してしまひました。

まつたく一郎鼠の言ふとはりでした。みんながお魚の肉を食べてもちつともお腹は痛くならないの

りました。

けれども三晩目に、また同じやうにおいしさうなお魚がおいてあるのを見ると、みんなは一郎鼠が言つたのも忘れて食べようとしま

べたがるのをやめさせました。

あくる日の朝、料理人はきつとお勝手へ飛びこんで來ました。にくい鼠が今日こそ、死んでころがつてゐると、かたく思ひこんで

来たのです。けれども……

料理人はさつそくお魚をおいたところへ行つてみました。ところが、どうでせう。一ばんおいしい肉をおいてやつたのに、手もつけずに、そのまゝ残つてゐるではありませんか。

「ウーム！」

料理人はたゞ唸るばかりで、口をきくこともできませんでした。そして暫くしてから、やつと「畜生ッ！」とどなつただけでした。ところが、その時のことです。いつの間に入つて来たか、猫が、いきなりこの魚に飛びついたのです。驚いた料理人は、

「こらっ！」とどなつて、とつさに猫の尻尾をつかまへました。そしてやつと手もとへ引きよせて、くはへてゐる魚を取つてしまひました。けれどもおかげで、料理人はいやつといふほど猫の爪にひつかれたのです。それでも料理人はがまんしました。もし猫がこの魚を食べようものなら、見てゐる間に死んでしまはなければならぬのです。

鼠には馬鹿にされ、猫にはひつかれた料理人は、それつきり鼠を取らうとするのを止めました。おかげで一郎鼠の仲間、どんなに安心して探險に出られたかしれませんでした。

それでも、たうとう一郎鼠の最後は来ました。長い間鼠仲間から尊ばれてゐた尾なし鼠の王さまは

氣の毒にも、ある日のこと、かまどの中に落ちたのです。一度も王さまになつてから失敗したことのない一郎鼠が。そして、熱い薬灰のために、からだちう大火傷をして、おまけに眼までつぶれてしまつたのです。

いく日もく尾なし鼠の王さまは、寢床の中に入つてをりました。仲間の鼠たちは、まい日くおいしい食べ物を運んで来ては、王さまに食べさしましたけれども、一郎鼠はどうしてこれががまんできませんう。

ある日、からだのやけども大へんなほつてからのことでした。一郎鼠は、そばについてゐる年とつた二匹の鼠に言ひました。

「私は、大へん喉がかはいてしかたがない。是非川までつれて行



つてくれ。」
それをさいた二匹の鼠は、こん

な晝日中、外へ出るのは危いからと言つて止めました。その代りおいしい大根を持つて来てくれたのです。

「いや、私は川へ行つて水がみたいのだ。」

一郎鼠はさう言つて、大根は食べようとしません。仕方なく二匹の鼠は、王さま鼠を川へつれて行くことにしました。

一本の藁をどこからか持つて来ました。それを尾なし鼠にくはへさしました。そして一郎鼠をまん中にはさんで、二匹の鼠は兩わきからその藁を口にくはへて歩き出しました。天井裏から庫の外へ、庫からお庭へ、お庭から竹藪へ、かうして三四の鼠は犬や猫や人の

眼をさけながら、静かに歩いて行きました。川へついて、尾なし鼠の王さまはどんなにおいしがつて水をのんだこととせう。

それからいく時間もたつてからのこと、王さま鼠をつれて行つた仲間、はびしよぬれになつて、たゞ二匹かへつて来ました。

王さま鼠はどこへ行つたのでせう。どうしたのでせう。それは私にもよくわかりません。

たゞ尾なし鼠が王さまだつた鼠の仲間には、また新しい王さまが選ばれたとだけ申し上げておきませう。

(をはり)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

お手毬(賞)

山口 喜市 (山形)

お手毬つきませう
一二三

ちんちんちろりの
ちんちろり

お庭に子雀
一三三
てんでんお手毬

てん手毬
お手毬つきませう
一二三
ほんぼこほんの
ほんぼんぼん

長い橋板橋(賞)

金森 武夫 (岐阜)

長い橋 板橋

かつかつ渡りや

川が川瀬が

かつかつひびく

長い橋 板橋

こつつりこつつり渡りや

川が川瀬が

こつつりこつつりひびく

おもやまで

宮尾 進 (臺北)

おはばこ こばこの
葉をさがし
あせみち添ひ添ひ
葉をさがし

さがしさがし行かうよ

おばあの家へ

おはばこ こばこの

葉をふいて

さけぬやう揉み揉み

葉をふいて

ふいてふいて行こうよ

おちいの家へ

牧場の雨

名方 和郎 (大阪)

仔牛も羊も
小舎の中

雨降る牧場は
静かだな
草っ原にや青草
生えてるが

雨がやまなきや

食べられぬ

こんこん小雨

早よやめよ

仔牛や羊は

可哀想だよ

指角力

青柳 亘 (新潟)

日向ぼつこしながら

指角力とろよ

影も障子で

指角力とろよ

誰が勝つやら
影までとろよ

日向ぼつこぬくいな
指角力勝てよ

子供と鳩

青柳しよう (東京)

お寺の庭は

春陽がぬくい

ばらばら 豆を

子供がまけば

お屋根の鳩が

とんできて食べた

お寺の庭は

春陽がぬくい

子供よ 鳩よ

仲よく遊べ

水飴

檀上春之助 (和歌山)

ちんから飴屋に

飴買った

あそこの横丁で

水飴を

おはぐろ 麦羹

赤とんぼ

水飴やるから

とーんで来い

栗落ちろ

野坂 治 (福岡)

秋風小風

そよ／＼吹けば

お山の栗の實

皆落ちる
姉ちやん里から

歸つたけに

落ち栗拾ひに

つれてゆこ

姉ちやんもおいらも

山が好き

お山にや栗の實

もう落ちる

小馬

阪野 潤 (大阪)

厩でヒンヒン

なく小馬

おまんまはしくて

なくのかよ

おまんまはしなら

ちきやるに
馬環棒鳴らさず
まつてゐな

鐘がなりや

藤野ふくを (大阪)

お寺の鐘が

一ツなりや

銀杏の枯葉が

一ツおちる

お寺の鐘が

二ツなりや

銀杏の枯葉は

二ツおちる

お寺の鐘が

なるほどに

銀杏の枯葉が

みなおちた

おでん屋さん

森 ほとる (愛知)

おでん屋さんの
来る頃は

いつも寂しい

夜更けです

おでん屋さんの

りんの音は

寒い夜更けに

ひびきます

暗い街道で

今晩も

チリンチリンと
呼んでます

野やき

高橋 五村 (茨城)

野やきだ

野やきだ

さらもえろ

草枯れ

田甫の

西風が

寒くて

さらもえろ

菊の花

日高 紅椿 (臺中)

おせどの畑に
咲きました

菊の花が

十と七つ

十と七つの

おとしなら

姉さきとおなじ

おとしだな

お目いさん出るよ

あついでしょ

姉さまの日傘

かしてやろか

きぬた

かすの里 (東京)

山のお家は

さみしいな

夜はきぬたの
音がする

五八

トントントン

トントントン

生れた赤児の

泣く聲も

きぬたにまじつて

夜が更ける

トントントン

トントントン

まんざい

山本 景月 (千葉)

一丁目のかどへ

まんざいが來てる

トントコ トントコ

トントコ トントコ

二丁目の子供

かけ／＼行つた

トントコ トントコ

トントコ トントコ

雀はチユンチユン

お牛はモーモー

トントコ トントコ

トントコ トントコ

三丁目の松で

鳥も見てた

面白もんちやと

鳥も見てた

葦切

佐々木 俊一 (盛岡)

葦切

チヨンチヨン

葦刈つた

沼邊の

出穂の

葦刈つた

みんなが

見てゝも

葦刈つた

栗鼠

石橋 宗雄 (福岡)

りすりす小りす

山のりす

栗の實

拾うて

何にする

りすりす小りす

山のりす

賞の實

拾うて

何にする

りすりす小りす

稲角力



十五夜ちや

お月さんでも

待ちなされ

雪が降る

名和 暢兒 (福岡)

雪降れ雪降れ

さつさつさつ

僕等は風の子

さつさつ降れ

山のま竹は

まだ割れぬ

肩組んで雪けろ

ころつころつころつ

お日様遠くで

見ておいで

小犬早う來い

雪が降る

寧王女

(爲朝物語の内)

三島霜川



六〇

琉球は、今の沖縄縣でございます。昔は、日本と支那との南方の屬國になつてゐたのですが、それは、地勢上の關係や、いろいろの事情があつたからでした。明治の前、三百年間は、琉球と薩摩についてゐたのですが、しかし、商家といふ王様があつて、立派に其の國を支配して居りました。徳川氏の頃は、その王城は、「首里」にありました。ハッキリと日本の國になつたのは、明治天皇の時からでございます。風俗や食物などは、よほど支那朝鮮に似てゐる所があるとも云ひます。

『城』のことは、「くすく」と云ひます。爲朝の渡つた頃の都は、多分『浦添』の城ではなかつたかと思はれます。

『金札の鶴』が、遠く南の方へ飛んで行つて了つてから、爲朝は、毎日、何か、浮かぬ顔をして、日を送つて居りました。すると、ある晩のこと、爲朝は、不思議な夢を見ました。

と、見ると、春の若草のやうな緑の着物を着て、顰眉も、銀のやうに美しく白いお爺さん、これが、枕もとに立つて、『八郎殿。八郎殿。鶴は、海を渡つて、南の國へ行きなした。かしこで、あなたの來るのを待つてゐます。疾く、往き玉へ。南海にはまた、さる位の高き御方、あなたを待つて居らる。』

さういふかと思ふと、異人の姿は、忽ち振袖すやうに消えて了ひました。爲朝の夢は覺めました。その翌日、京都の父、爲朝から、使が書面を持つて参りました。それに依りますと、一の院、鳥羽上皇が、金札の鶴を求めさせ玉ふ。急ぎ、鶴を伴ふて、都に上れとありました。尊き御方の仰せとあつては、一日も、愚圖々々しては居られぬ。爲朝は、さう思つて、妻の白縫に、事のあらましましを打明けた。そして、その夜のうちに、商人のやうに身をやつし、八町、櫻の和平日一人だけを供につれて、玖磨川を渡つて、薩摩の國の方へ入つて行きました。さうして、鹿兒島の濱から便船を求めて、種子島、屋久島、大島、徳之島といふ順に、島から島へ渡つて、琉球へ渡りました。

虬の珠

その頃、琉球の國は、亂れに亂れてゐました。國王は、嘯雲國師といふ、魔法遣のやうな、怪しい、『道士』といふ者をお信じになつて、その云ふこと

六一

と云へば、何んでも聞いておいでになりました。忠臣があつて諫めても、それはお耳に入れられませんでした。

國王には、王子がありませんでした。只、一人、寧王女といふ王女があるきりでしたが、琉球では、王子がなければ、王女に位を譲るのが當前のことのやうになつてゐました。それで、國王は、寧王女に位を譲らうとして、まづ、聖器、「琉」と「球」といふ二ツの珠を、寧王女にお授けになりました。

ところが、この二ツの珠のうちの二ツが、いつの間にか、寧王女の手許から紛失してしまひました。珠の一ツが無くなつたことが解ると、國王は、大そうお憤りになつて、寧王女を、その生みの阿母さんの廉夫人と一緒に、王城から逐出してお了ひになりました。

珠の一ツは、ひとりでに消へて了つたのか、それとも誰かに盗まれたのか、これは、大きな謎でこ

「その噂雲國師は、後の君が、片腕ともお頼みになつてゐるお味方ではありませんか。後の君は、あの魔法道の道士にお呼びつけなされて、珠を盗まされたに違ありません。」

「いえ／＼、后様が、まさか、そんなことをなさうとは思はれません。そんなことを考へるよりも、私たちは、一生懸命に、珠の在所を探しませう。私は、きつと、この琉球の國のうちの、どこかに、隠されてゐるに違ないと思ひます。」

寧王女は、堅く、さう信じてゐるやうに云ひました。

「したが、あの道士の妖術で、珠が消えて了つてゐるかも知れません。」

「大丈夫でございます。」と、寧王女は、にっこりして、

「あの珠には、あの珠の御威徳がございます。なかなか、あの魔法道の道士の妖術なぞで、消えて了ひ

六二
ございました。寧王女は、阿母さんの廉夫人に手をひかれて、泣く／＼王城を出しました。

「私は、どうしても、誰かゞ、あの珠を盗むものと思ひます。ひよつとすると、あの意地悪の後の君の仕業ではないかと思ひます。」

王城を出はなれると、廉夫人は、さう云つて、そつと、寧王女に囁きました。

後の君といふのは、國王の二の後で、國王と同じやうに、やはり、「殿下」と、敬はれてゐる方でした。生まれつき、嫉が深いといふので、國內の評判も好くありませんでした。つまり、寧王女は、この後の君のお生みになつたお子さんでなかつたことが、寧王女に取つて、何よりの不幸でした。

「でも、それは何も證據のないことです。私は、后様に、そのやうな疑をかけたことはありません。……もし、珠を盗む者があるとしたら、それは、あの、噂雲國師より他にないと思ひます。」

は致しません。よく考へて見ますと、珠の失くなつたのは、私に王の位につく徳がないからかも知れません。もし、私に、眞正に王の位につくだけの徳と福とが備つて居りましたら、珠は、きつと、私の手に復りましよう。」

寧王女は、まだ十五歳の乙女でしたが、その心は、雄々しく落ちついて、考へも、しつかりしてゐました。

寧王女は、もう妄に欺かうとはしませんでした。

さうして、廉夫人を慰めながら、住馴れた王城の方を見返りがちに、山の方へと、あてもなく漂泊の途に上りました。その行く先きには、頼むで、一夜、泊めて貰はうとする宿もなければ、立ちよつて、休まうとする木蔭とでもありませんでした。南の國の烈しい日は、カン／＼照りつけて、昔から「琉球は、石原小石原」と、小唄にあるやうな石原道——その嶺のやうな道を、母子はトボ／＼と、大里の方に向

ッて進むで行きました。

舊虬山の怪蛇

爲朝が與那原といふ琉球の港に着いたのは、この寧王女の騒動があつてから、凡そ五十日程経つて後のことでした。

爲朝は、まづ、旅宿を求めて、暫らく、そこに逗留しました。そして、紀平治と二人で、あつちこつちと、金札の鶴の行方を探して廻りましたが、なか／＼知れません。聞いても、誰も知つてゐる者がありませんでした。それどころか、何處へ行つても、琉球國の人たちは、皆、おど

おどと、落ちつかぬ様子で、寧王女が王城を逐出されたことや、曠雲國師の悪い行ひや、朝廷には悪い人ばかりが蔓つてゐることや、嫉み深い后の群の悪い噂をこそ――と話合



ッて、「この先き、國が何うなるか。」と、心配をして居りました。そして、皆、賢い寧王女のお身の上をお氣の毒だと云ツて、歎いて居りました。それで、熱帯の、明い／＼日の照り輝いてゐる琉球も、黒雲が八方に塞がッて、晝も暗いやうに打沈むだ國になッてゐました。

すると、五日目の朝のことでした。爲朝は、何氣なく起きて見ると、商の品のやうに見せかけるために持ッて來てゐた錦や練絹の巻物が、一ツも残らず無くなッて了ッてゐました。急いで、旅宿の者を呼んで調べさせて見ますと、何うも外から盜賊の入ッた様子も見えませんでした。

『不思議なことだ！ 何んにせよ、官に訴へよう。』
爲朝は、さう云ツて憤りますと、旅宿の者は、慌てゝ留めました。

『いえ／＼、これは盜賊の仕業ではありませぬ。噯、雲國師のなされたことでございます。ですから、官

恨むだといふだけで、もう恐ろしいお祟があるの
ございませぬ。



旅宿の者は顔の色を眞ッ青にして、留めました。
爲朝は、頭を振りました。

にお訴へになりましたても、駄目でございます。』

『何故、駄目だ。』

『はい、その噯雲國師と仰有る方は、國王様が、大さう御信仰あそばしてゐらッしやる道士でございます。術をばお造ひなさる。雲に乗ッてお歩きなさる。鼈にも蛇にもお化けなさる。人の物が欲しくなりますと、術を以て、何んでも取ッてお了ひなさる、まことに不思議なお方でございます。』

『奇怪な奴だ。さういふ奴が居るから、國が亂れるのぢや。そして、其奴は、いつも王のお傍に居るのか。』

『いえ／＼、何んでもふだんは、こゝから東の方へ五里ほど、舊虬山といふ山の窟のなかにお出ださうでございます。』

『よし。俺が行ッて、退治してくれよう。』

『いえ、およしなされませ／＼。とんでもない事でございます。あのお方は、盜まれましたのを、只、

『心配をするな。俺は、自分の物を取返しに行くのだ。鎮西の八郎は、日本の男だぞ。』

と、云ツて、直ぐに紀平治に、出發の用意をさせました。そして、ハブといふ毒蛇を防ぐためには、かたんばといふ草で編むだ笠を用意をする。食糧には、琉球甘藷（さつま芋）を用意しました。この食糧は、焼いて喰へば腹の盈てる便利なものでした。紀平治は、これを芭蕉布の袋に入れて、肩にかつぎました。

舊虬山は、岩石を削ッて、そゝり立てたやうに、峻しい山でした。路と云へば、一と足、踏みはずすと、底の知れぬ深い谷へ落込むやうなところばかりでした。そして、榕樹といふ大木の密生林が、處々に、こんもりと茂ッて、晝でも暗いところもありました。

爲朝と紀平治とは、危ない路を傳ッて、づん／＼、山深く進むで行きました。しかし、噯雲國師の窟は、

なか／＼、見つかりませんでした。そのうちに、日が、とつぷりと暮れて了ふ、南國の空に、星がキラキラ光って來ました。爲朝主従は、榕樹の下に露宿をして、かはる／＼起きては、どん／＼、どん／＼焚火をして、惡獸などの防禦をしながら、一夜を明しました。

静な夜は、何事もなく明ける。紫、紅、金色の雲に彩られて、黎明の空は美しく映えて輝く。爲朝は、紀平治と一緒に、甘藷を焼いて、朝飯にしようとし、二人ともに、恐ろしく喉が渇いて來て、まるで、焦つくやうでした。

『どこかに水はないか。とても我慢が出来ないぞ。』爲朝は、呻くやうに云ひました。

そこで紀平治は、用意の竹筒を下げて、谷底の方へ、水を求めに行きました。ところが、谷川もなければ、清水の湧いてゐるところも、なか／＼見當らないので、紀平治は、谷を一つ渡つて、あつちこつ

……が、谷を一つ越えて向ふですから、間に合はない。『もう、駄目だ！』と、思ひましたが、『うのれ、殿の誓め。』と、夢中で、懷ろの分銅を取出すと、蟒蛇の眼玉を目がけて、『ヤッ。』と、投げつけました。

八町礫の鐵のやうな腕に投げられた分銅は、鐵砲の玉のやうに飛んで、蟒蛇の眼玉に命中つて、頭になかまで抉りこみました。と、そこから、異しい人の影が、煙のやうに、スウと立って、忽ち榕樹の後ろの方へ消へて了ひました。蟒蛇は、大地に、どつと落ちて、波のやうに、のたを打つ。……

爲朝は、この物音に、目を覺まして、いきなり、源氏代々の寶刀、日月丸の太刀を引抜くと、蟒蛇の頭を、さつと斬る……と、その斬口から、ころ／＼と軋げ出した一ツの珠。それが、キラ／＼、キラ／＼と、五色の光を放って、不思議に、血にも穢されてゐませんでした。

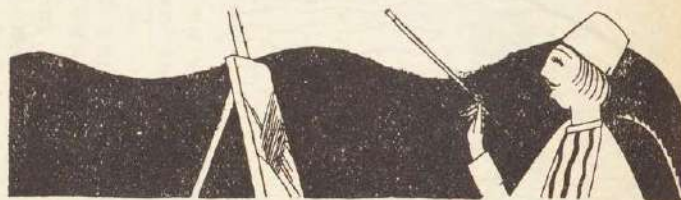
ちと、水のあるところを探し廻つて居りました。爲朝の方では、『紀平治が何うしたのか。』と、待つてゐるうちに、不思議なほどに、眠氣が催して來て、つい、ウト／＼して、それから、熱く眠つて了ひました。

すると、その幹の、三抱もあらうといふ榕樹の一部分が、奇想によろ／＼と蠢き出して、凡そ三升樽ほどもある頭が、によき／＼と宙に伸びました。爛爛と光る二ツの眼玉、ペロ／＼、ペロ／＼、と火炎のやうに吐出す眞紅の舌——その蟒蛇の頭は、スルスルと音もなく幹を下つて、爲朝の喉を目がけて、伸びかかりました。爲朝は、眠に落ちて、その大難を知りませんでした。

恰ど其の時、紀平治は、谷を一つ越えて、向ふの山に登つてゐましたが、ふと、振返つて、この有様を見ると、『あッ』と、仰天して、『スワや、殿は、蟒蛇に吞まれる。』と、叫びました。

爲朝は、その珠を拾ひ取りました。その時、腥い風が、さつと吹立つたかと思ふと、空が、俄に眞ッ暗になつて、ヒラ／＼と電光が閃き、山が崩れるかと思はれるやうな大雷が鳴り出しました。そして、やがて、雨が、瀧のやうになつて降つて來ました。

半時ばかりすると、雨は霽り、空も綺麗に晴れ渡つて、木々の緑も、滴るやうになりました。そして、紀平治も歸つて來ました。そこで、主従は、怪しい蟒蛇のことや、不思議な珠のことを話合つて、猶も山深く分入つて行きますと、今度は、頭の上、足の下、前からも後からも、灰色の霧が、もく／＼、もく／＼と湧いて來て、二人は、互に姿も見ることが出来ないやうになりました。それでも二人は、ひるみませんでした。お互に、聲を掛け合つて、危ない崖道を、虫が這ふやうにして進みました。するうち



いかトンホんさ家畫

六 浩 村 花

コンスタンチノーブルの北のノンキな畫家は、或日ラヂオで、東京放送局から放送された童謡の合唱を聴いてから、繪よりも童謡の方がすつかり面白くなりました。
『これだ、これだ』
その時、膝を叩いてバネのやうに飛び上つた畫家は、海山千里の遠い東洋から鳴りひびいて来る童謡につれて、フワリ／＼畫室の中を踊り出したのでした。
『ニッポンの子供達は幸福だなア。俺もひとから、その身の上までも物語りました。』
爲朝は、また、今朝、蟒蛇を退治して、この珠を手に入れたことから、金札の鶴の行方を追つて、琉球に渡つて来たことまで、覺束ない琉球の言葉で話しました。

「ア、その鶴は、七日ほど前に、この隱家に下り立ちました。不思議なことには、何處へも飛去りませんから、そのまゝに養つて居ります。まア、御覽あそばすが宜しい。」
廉夫人は、驚いたやうな顔をして、さう云つて、爲朝を、隱家のうちへ案内致しました。そこには、青苔のむした大きな岩が二ツ、天然の門のやうになつてゐて、五六株の芭蕉が、恰ど天幕のやうに葉をひろげてゐました。
爲朝は、廉夫人の願のまゝに、その虬の珠と、金札の鶴とを取りかへつてきました。さうして、寧王女は、珠を持つて、王城へ歸つて行く。爲朝は、九州の方へ歸りました。
(をはり)

土其古の山々はノンキでした。土其古の畫家もノンキでした。畫家はいつもの童謡を唱ひながら寫生をしてゐました。風もつないよ土其古晴れが、遠くまでつゞいて居ました。
土其古日和に
ツイふら／＼と
朝のうちから
畫布を掛けて
お寺の鐘の
鳴る方へ

つ、土其古の子供達の爲に、土其古童謡を
つくらう。
さすがのノンキ畫家も、何んだかんだと其の晩ひと晩は眠れませんでした。
さて、土其古の山々はノンキでした。土其古の畫家もノンキでした。丘の上で、畫家は寫生の繪筆を動かしながら、童謡をひれくつて居ました。
晴れた土其古の
お寺から
遠いバルカン
半島へ
土其古日和の
日が永い
わたしの畫布
日が永い

に、爲朝は、運悪く足を踏みますべらして、四五間ほど、ズル／＼と轉げたかと思ふと、やがて、逆落しに、幾十丈とも知れぬ谷底へ落ちて了ひました。一寸先きも解ぬほどの、霧でしたから、紀平治は、それを知りませんでした。

爲朝は、ふつと、我に返つて見ると、そこに廉夫人と、寧王女とが、親切に自分を介抱してゐてくれました。寧王女は、彼の、蟒蛇の頭から輶げ出した珠を、さも悦しさにして、さ／＼げ持つて居りました。

『あなたが、氣を失つてお在でしたから、何かお薬を持つてお在ではないかと、懷ろを探りますと、この珠がございました。あなたに、お怪我のなかつたのは、この珠の德のおかげでございます。これは、虬の珠と申してこの琉球の國の聖器でございます。』と、廉夫人は、かう／＼と、この珠が紛失したこ

すと直ぐに、グウグウグウと眠つてしまひました。
 どのくらゐ経つたらう。
 『チエツ、これでも自由書から叩き上げたんだぞ。……何が可笑しいんだ。』とか『へボ章語だつて？……馬鹿にするな。』とか何んとか云つて、書家は遺跡の夢の中で、肩を張



つて何んだか頻りに威張つて居るのです。
 時しもあれ、山賊の親分タータカは、したり顔のニマリ笑。
 『こいつ、いゝ氣持で晝日中夢を見てゐるな。』と書家の耳の耳輪から、こつそり土共古玉を抜き取りに掛けて居ました。

耳の穴へ随分深山の小人がコロコロコロ轉り込んで來るな、と思つて居るうちに耳の邊がムズ痒くなつて來て、書家はボツカリ眼を覺しました。
 怪しい男が突立つて居るぢやありませんか何用あつて——と書家は不審に思ひました。が、ふと、どうも見た事のある顔でした。
 『此の顔は隨に見た事がある。見たことがあ

る。』
 と一生懸命思ひ出さうとしてゐましたがハツと思ひ當つたと同時に、突然、書家の顔色はインキよりも眞蒼になつて仕舞ました。
 見た事があるも無いもない。つひ三日前に土共新聞紙上で目に掛つたばかりだ。
 「コンスタン警視廳五萬圓懸賞付犯人、山賊首領タータカと云ふ大きな活字のすぐお隣りに、物凄く控へ居たあの顔だ。そして紛れもなく此の顔だ。
 『おや！おや！』
 書家の體ぢうは、コンニヤクのやうに小さくふるへ出しました。が、それでも何氣ない振りして、相手の目色を凝んでゐた。書家は、突然活動の役者よりも素早く身を翻して、

一敗走りにスタコサと逃げ出しました。後なに見ずに随の方へ！
 どのくらゐ突走つたらう。——活動にと此のへんで、人の居なくなつた丘の上の景色だ

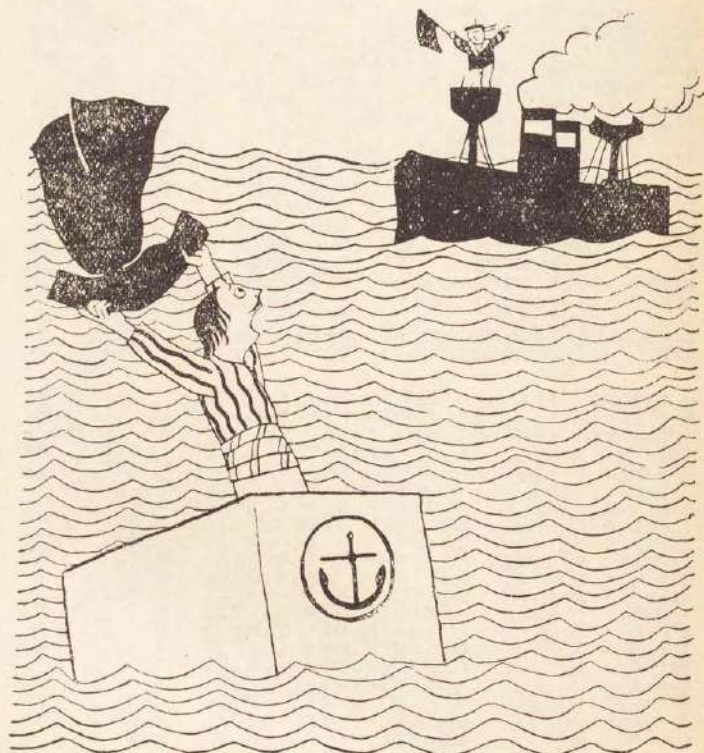


け出て、後に取り残された書布や三脚や調色盤や繪具や帽子などが、草を吹いて來る晝間の風に吹かれてゐるばかりと云ふ植式式すが。——

三
 書面が覆つて、龍の道を盲目滅法逃げ走つてゐた書家は、もう大丈夫だらう、と逃げ乍ら恐は恐は後振返つて見ると、どうせやう山賊タータカは、こいつ逃がすものかと齒ざしりぎり／＼一層凄厲な顔で、追つかけて來るのです。

またどのくらゐ逃げ廻つたことぞう。氣が付かないうちに、海へ突き出た。突ッ鼻へ出て仕舞ひました。凄く奴は草駄大で追つかけて來る、どつちへ逃げるにも海。『こいつア、失敗つた。』と途方に暮れた書家の眼に、つないである一級モーターボートが映りました。『これぞ助け舟ッ』ボンと飛び出るが早いか、舵を沖の方に取つて全速力を出しました。

一足達ひの山賊タータカ。
 『こいつ一泡吹かされた。』とばかり、推進器の泡を眺めて、仰りめり込めよと地聞駄踏みましたが、後の祭、どうにもなりません。
 『よしッ、こいつをぶッ放せ。』と山賊がやなら取出したのは、腰の六連發



「あ、これ、これは海軍の何んかだな。そんな
『はい、ア、これは海軍の何んかだな。そんな
余計な力強い話だ。』
海軍は前よりも一層安心して、ひとりで安
心して居ました。
そのうちに水平線の彼方から、ビヨコリ汽
船が黒い点のやうに見えました。横いて點々
々々々三ツ三ツ四ツ。――海軍はどんなに喜
んだことであらう。
けれども、だん／＼見てあるうちに、それ
が汽船ではなく、軍艦であることが遠目にも
分りました。
『オ、オ、演習艦隊だ。でも、ボートぐら
ゐは、此處まで出して失れるだらう。』
そう思つて見て居ると、軍艦の方では水兵
が高いマストの上で赤い旗を振つて、何か信
號を始めてました。
『何んだか知らないが……』と海軍も上を
抜いて、それを高く高く打ち振りました。
軍艦の方では何時までも止まらなかった。
海軍も振るのを止めませんでした。海軍は疲
れたので、一寸休めようと思つて、どつ
かり艦を下す。船子に、さつきは安座の下でつ
ひ気が付かなかつたが、其處のところに何か
文字が書いてあるのでした。
『聯合艦隊演習射撃用第三標的』
海軍の艦はまたも女音インキのやうになり
ました。丸音インキは腹を抜かすと『わッ』
とばかり海の中へ飛び込みました。飛び込ん
だなり、暫くは海の表へ顔を出して居ました。
た。水の中で、水を遠くへ蹴飛ばして土龍の
やうに死物狂ひでした。
『あれにかゝつちやあ、いくら山賊タータカ
が恐しいたつて、あのブタン／＼とくらべ
たら、くらべにもならないや。――あれに
かゝつちやあ……』潜りながら海軍は、こ
んな事を考へてゐました。
やがて、水の表に肩が現はれました。可笑
しいなと思つて居ると、其の肩と肩の間から
首がソ／＼と顔を出しました。これはカメ
ノコでもなんでもありません。皆さんお察し
の通り、今の海軍は、
其の時、艦隊で大砲が一せいに空を撃たふ
かしたと見たのは、ボンヤリした海軍だけで
續いてドドドド空気に鼓の音るやうな

でした。ボン／＼ボン／＼ボン／＼。
モーターボートの海軍は、水の上に落ちて
来るビストルの弾丸を見て吃驚しました。
『早く弾丸の届かない所まで。』
と今度は全速力以上の全速力を出しま
した。モーターボートは、水から三寸離れて
風のやうに走り出しました。急に其のはすみ
に、つまり最大速力を噴つたはずみに、海
軍の艦は僅だけのつり、後の空中へ置いて
き放りにされ、ドボンと海の上へ落つちて
仕舞ひました。
漸く気が付いて向ふを見ると、乗つてを失
つたモーターボートは、其儘五六丁先の矢の
やうに一直線に沖へ沖へと。
可哀さうにも海軍は、ただそこいらちう滅
茶苦茶に海に溺りました。だん／＼疲れて来
ました。取り付く薬一本なく、廣々とした海
の上に海軍はアブ／＼してゐました。
その時海軍の眼に、一點白墨のやうな白い
點がボン／＼と映りました。――これはたとへ
活動で大映しにして見ても何んだか分らな
いものでした。――遠く遠くとは思ひまし
たが、此の點は、白墨であらうが、海であらうが

そんなこと云つてゐる場合ではありません。何ん
でも構ひませんでした。たゞしがつけにい
いのでした。海軍は勇氣を出して、白の一點
を目標として泳ぎました。
漸くのこと、傍まで来て見ると、思つた
より大きいもので、真白くベンキで塗つた一
間四方ばかりのものが、恰度ウキのやうに一
定の所にブタン／＼浮いて居るのでした。海
軍はつかまつて、進二進二這ひ上りました。
『あ、これ、どうにか助つた。』と呼吸をつい
て、遙かの方へ振返つて見ると、つひ先刻ま
で寫生して居たあの丘も、半島の山々も、小
さく小さく見えしました。
『早くこの邊か舟が通り合はして呉れんかな
ア。』
……さすがのフンキな海軍も、少し寂しが
りました。でも根がフンキなもので、此のブ
タン／＼の上へ安座をかけた、自分の體も一
緒に搖籃のやうにゆられて居るうちに、――
なんと讀者の皆さんよ、處もあらうに、――
此のフンキな海軍は、あまた童話をひいて
り始めた次第でした。ひれく、年々フト見る
と、安座をかけた横つちよの所に、海軍のイ

「竹竿一本だけさ！」
とそれへ早速つかまりました。不思議な事
には、此の竹竿は海の底からでも生えてゐる

高きまで持ち上げられて仕舞ひました。
其の時、つかまつた儘ヒヨイと下を見ると

畫家は泣くのを止めました。
綱震箱(つなふるばこ) 紅を埋めて南無阿彌陀

高きまで持ち上げられて仕舞ひました。
其の時、つかまつた儘ヒヨイと下を見ると

畫家は泣くのを止めました。
綱震箱(つなふるばこ) 紅を埋めて南無阿彌陀

畫家は泣くのを止めました。
綱震箱(つなふるばこ) 紅を埋めて南無阿彌陀

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor creases and discoloration, characteristic of old paper. The left edge of the page is bound, showing the inner hinge and some stitching. The overall tone is warm and off-white.



五百七號室

三井信衛

奇怪なラヂオの放送は何處から？
不可解な盗難事件の犯人は何者？

その二 寶石店をめぐる謎

1 ラヂオの波長は？

「君、君。確かに聲がした。それも人の聲だよ！」「さうです！確かに聲です！それも「あッ」と

（前號までの梗概）
滋の家は東京日本橋の登野といふ寶石店です。お父さんは寶石研究のためフランスへ行つてゐましたが、三年ぶりで日本へ歸つて來ました。そのお土産に、滋はラヂオの機械を買ひました。ところが、東京放送局の放送が終つて二時間半の後に、「かん！かん！」といふ變な鐘の音が聞えました。すると丁度その明る朝、電報が來て、俄かに父は上海に旅立ちました。その後、寶石店では大騒ぎなダイヤナが、偽物とすりかへられてゐるのを發見しました。上海の父へ電報を打つやら警察に届けるやら、店は大混亂になりました。その夜です。夏雄と滋の二少年が、ラヂオをきいてゐると、又もや鐘の音が聞へ、ふいに部屋の後には怪しい人影がうつりました。と同時にラヂオからは、「あッ、あッ」といふ、不可思議な、人間の聲が聞えて來たのでした。

オの放送は各放送局とも、それぞれ放送の波長が違つてゐます。東京放送局の波長が假に「だ」とすれば、大阪放送局は二、名古屋放送局は三——といふ風に、それぞれ波長が違つてゐればこそ、色んな放送が混線しないで聞えて來るのです。

今、滋が波長を調べると言つたのは、外でもないが、假にこの不可解な放送が、もしや悪漢同志の何かの暗號であるとするれば、決して東京放送局と同じ波長を用ふる筈はありません。何故なら、もし同じ波長を用ひた時には、東京放送局の放送と混線して、何人にも易々と聞かれるからです。夏雄が、ラヂオの機械についてゐる波長調節器の前に近づくと、

「おッ、ぐらんない、滋さん。調節器はJ、O、A、K（東京放送局）とは全然違ひますよ。」
「うむ、成程、全然違ふ。一體このラヂオは今日使つたのかい？」
「いッ、え、今日はこんな大騒ぎが起つたもんですから、ラヂオどころやありません。これは昨夜のまゝで、誰も弄らなかつたと思ひます。」

「昨夜のまゝ……。」
滋は大きく目を睜りました。昨夜も確かに不気味な鐘の音をききました。しかもそれは東京放送局の放送から、二時間半経つて聞えて來たのです。では、いつの間にか昨夜、この波長の調節器を、暗號の鐘が聞えるやうに直しておいたに違ひありません。一體何者が

いふ恐ろしい聲でした。」
「おッ、夏雄君。今までうつかりと氣がつかずにゐたが、ラヂオの波長の調節はどうなつてゐるね。」
「おッ、それが何よりの問題です。」
御承知かも知れませんが、ラヂ

直したのでせうか？
「確か鐘の音や叫び聲は、J、O、A、Kから聞えたのではないね。」
「勿論ですよ。それにこの波長は大阪でもなければ名古屋でもありません。」

「それなら一體何處だらう？」
「さア……。」

と夏雄も遂に、深い疑問に到着してしまひました。今日日本内地に放送局が三つしかない以上、その何處でもないとするれば、確かにこれは、新しく放送機を具へつけた處でなければなりません。が、それは果して何處だらう？さうなると、てんで二人の見當はつかなくなつたのでした。とは言へ、兎にも角にもその夜を境として、二人に

はこのラヂオの不思議な放送が、
一層の疑問とはなつたのです。

2 疑問の萬年筆

その次の日は何事もありませんでした。父がまだ上海に着かないと見えて、あのダイヤの盗難事件については、未だ何の返事もなかつたが、店の内部には、更に厳重な警戒が行はれました。

「コッコッ！コッコッ！」

その夜です。ドアの外から微かに叩く音がしました。直ぐさま立ち上つた滋は、此方からも「コッコッ！」と答へました。答へによつて入つて來たのは夏雄少年です。「どうです。まだラヂオは聞えませんか？」

「うむ、波長の調節は、昨夜の通

りにしてあるんだが、まだ聞えない様だね。君、もう何時だい？」

「十二時に一寸前です。」

「さうかね。ひよつとしたら、もう聞えるかも知れない。」

ちいッと二人が擴聲機に近づいてゐると、十分か十五分の後に、ほんの微かに、併し鋭く、かかんかん！

「おッッ、鳴つたね。」

「聞えましたね。」

二人が思はず顔を見合せた瞬間「あッッ！」——その聲はラヂオではなかつた。目の前の夏雄が一聲高く「あッッ！」と叫んだのでした。

「どうしたんだ、おい！」

「影！影！又、人の影です！」

「えッ？」

「ばた／＼とドアを開けて廊下に出ると、もうそんな人影はありません。だが、急に滋が身を屈めたかと思ふと、大きく目を睜つて、
「君、こんな物が落ちてゐた！」
「えッ？おッ、萬年筆だ。ふう！これは滋さん。あの謙一君の萬年筆ですよ。」

「えッ？謙一君の……？」

「さうです。確かにさうです！」

二人の顔はサツと變りました。直ぐさま二人が足音を忍ばせて廊下を行くと、その突當りは少年店員たちの寢室、だが、そこに謙一の姿はなかつたのでした。

「おい、謙一君。謙一君！」二人は聲を合せてかう呼びました。

「はい。」 微かに返事があつたやうです。



二人が又もやバタ／＼と三階に昇ると、同時にひよつこりと、ド

「おッ、あの聲は、たしかに、三階の應接室からだ。」

「さうです。行つて見ませう。」

アを聞けて現れたのは謙一少年。しかもその兩方の耳には、ラヂオの聴取器をつけてをります。

「うむ……！」と滋は思はず謙一の顔を、真正面から見つめたのでした。「君はラヂオを聴いてゐるんだな？」

「えッ、さうです。」

「何故今頃までラヂオを聴いてゐるんだ？いゝや謙一君。君は先刻僕たちの室の前へ、そつとやつて來たさう？ 何の目的があつてやつて來たんだ？」

「えッ！」と謙一は穴のあく程、ちいつと滋の顔を見つめました。

「何ですつて？ 滋さん。いゝ加減なことを言はないで下さい。」

僕が何時あなたのお部屋へ行きました？ 何の證據があつて、そんな事を仰有るんです？」

「白はつくれてはいけない。證據

があればこそこんなことを言ふのだ。君、これに覺えがあるだらう？」

と滋が右手を差し出した時、「おやあッ！」滋も夏雄も鋭く叫んだのでした。今が今まで手に持つてゐた萬年筆が、影も形もなくなつてゐたのです！

「うゝむ！可笑しいな……。」

「これやあ變ですわね……。」二人は思はず、ちつと腕を組んでしまひました。

3 鐘の放送は遠くではない

「滋さん！夏雄君！」不意にさう言つた謙一の聲は、何かしら犯し難い響きを持つてをりました。

「ふうむ……！」と思はす夏雄と滋は、唸るやうにかう言つて、顔を見合せました……。

4 七つの眞珠の頸飾り

「大變です！大變です！滋さん。一寸來て下さい！」

その明る目の午後、慌しく滋の側に來たのは、あの松本支配人でした。

「え？松本さん、どうしたんです？」

「これを見て下さい！」と右手をバツと開けると、その中からは燦爛と輝いた——ではない。擬ひの眞珠の頸飾りが七つ！

「お！それは……！」

「さうです、さうです。まだ誰にも言ひませんが、今ふつと氣がつくと、あの頸飾りの陳列箱の中から、この偽物の眞珠が、七つも出て來たんです。」

「えッ？」

「これやア困つたことが出來た。おい小僧、小僧、小僧、電報を打て。」

登里野實石店の内部は、又もや時ならぬ大騒ぎとなりました。ダイヤどころか今日は又高價な眞珠の頸飾りが都合七個！それにしても、父は一體どうしてゐるのであらう。



「わかつてゐます！あなた方は疑つてゐらつしやるんです。僕がラヂオの聴取をしてゐたのを、疑つてゐらつしやるんです。が、僕は今それを説明いたしませう。僕がかうしてラヂオを聴いてゐるのは、僕にふつと疑問があつたからです。」

語る謙一の目は生き／＼としてその言葉にも亦何の淀みさへありません。夏雄と、滋はだん／＼とその話に耳を傾けたのでした。

「あのダイヤの事件が起つた時、僕は探偵からあらぬ疑ひをかけられました。それが何よりも残念です。僕は自分の身を潔白にするため、事件の真相を探らうと決心しました。僕はこの間の晩、あなた

のお父さんと三人で聞いた、あのラヂオの鐘の音が、何かしら意味があるやうに思へてならなかつたのです。それで僕は密に礦石の機械を作つて、それで毎晩聴いてゐたんです。何故僕が礦石の機械を組立てたか、滋さんお分りになりますか？」

「……どうしてだ？」

「礦石の機械で聞える位なら、確かに／＼この東京の附近といふところになるからです！今夜も今し方聞えました。僕の考へるところでは、あの不思議な鐘の放送は、さつと東京市内か、それとも餘り遠くはではありません。どうです！これでも僕は怪しい人間でせうか？」

5

2

「謙一君、これは何だい？」

一外でもありません。あのラチオ

の不思議な鐘の鳴り方を書いたの
です。」

八五

『僕がおわかりになりましたか。』
 『いや、失敬した。謝るよ。』
 『これを御覧なさい。かん——かん——かん——と間をおいて三つ鳴つた夜、それが二十二日、つま

「そとひの夜ですよ。あの明るく
り一昨日の夜ですよ。あの明るく
に限つて、店では何のこともなか
つたので？　ところが、その外の
鳴り方をした明る日は、店で盗難
事件が起りました。」

6
「滋しげる！悪魔だ！神を…あくま かみ」

「おゝ、三つだな。」

『さうです。一昨日の晩と同じです。若し明日、どんな事件も起らなければ、いよいよこの鐘は、暗號に違ひありませんよ。』

……と、その時でした。又不意にラデオの擴聲機から、『あゝッ』といふ叫び聲が洩れたのでした。四人はハッと聲を呑んで、顔を見合しました。

今が今まで忘れてゐたが、この
間も聞いたこの『あゝッ！』とい
ふ叫び聲、これは一體何でありま
せう！

が、それを考へる暇さへもなく
その次の一瞬間、再びラヂオから



「ふう……面白
いとここに氣が
ついたね。さう
すると君の考へ
ぢや……。」
と滋がさう言
ひかけた一刹那
目の前のラヂオ
からは、思ひが
けなくも微かに
鋭い鐘の音！
かん！——か
ん！——かん！

神を……神を……神を……神を……神を……
苦しげなその聲、さうして刻一刻とその『神を』といふ叫びは微かになり、やがてパツタリと聞えなくなりました。

「おゝッ！」
滋は叫びました。

『お、ッ!』……さう言つて二人の少年たちも、倒れるやうにとつきりと椅子に凭つたのでした。

(222)

待て！……待て！
ちくしやう
畜生！……』

は「おゝッ!」といふ叫び聲が聞
え、つゞいて

「おゝッ！しげる！しげる！」

「えゝッ？」

「滋と言つた。坊ちゃんの名だ！」

また違つた別人の聲。聞に吠ゆる狼の群のやうに、恐ろしい響きを持つた太い聲！ 途端再び先の聲が洩れました。

「しげる！ しげる！ 悪魔だ！」

悪魔だ！

圖からすもラヂオから洩れた二つの聲、
 なしにそれは、
 確かにそれは、
 一方は竜圖に類してゐるのです。だが、
 果してそれは、
 らば何故「悪魔」「神代」など、謎のや
 うな言葉が叫ぶのであらうか？
 話を返して益々複雑になつて行きます。
 詳しくは次號をお待ち下さい。





幼年詩

若山牧水選

乳のませ(賞)

千葉縣平岡校高二 根本 悦子

乳のませに行く

赤ん坊おろしても

まだ背中は温かい

赤ん坊が

私の方をみてホ、を

へこませながら

ウンとのんでる

評、終りの方が大へんい。これで全體が生きて來ました。(牧水)

ゆき(賞)

山形縣樺太長岡 きぬ

山に雪がふつた

山のをばさんの家にも

雪がふつたでせう

評、やさしい、よい詩です。(牧水)

新しい先生(賞)

千葉縣平岡校高二 森 くら

新しい先生

來た日だよ

みんなが

先生の噂をする

先生の先生の話する

評、目に見えるやうです。新しい先生も、感して居る皆さん。(牧水)

もず

福岡縣下妻校尋四 森田 實義

竹やぶに

とまつてゐる

もず

竹やぶと

いつしよに

ゆれた

夜

千葉縣東金校尋六 西川むめ子

うれしいな

夜だ

七時二分の

汽車が來た

評、なんでもないやうである。よく感じの出ない、詩です。(牧水)

さざなみ

千葉縣平岡校高二 高吉さん子

ばらの花びら

池におちて

さざなみをつくる

其のなみに花が動く

評、目に見えるやうにあざかに歌はれてゐます。(牧水)

にはごり

福岡縣矢部川尋五 米永チエ子

雞がこぼれもみを

ひらつてゐる

人が來たら

二ツにわかれた

評、「二ツにわかれた」が大へんよい。感動がよく出てゐます。(牧水)

稻かり

甲府市相模生校高一 豊島 泰

みのつた稻を

さく／＼かるよ

かつてる あとから

足あとがならぶ

あさやけ

福岡縣下妻校尋四 下川スナエ

まどをのけたら

ふすまに

ばつと

あかるい朝やけが

さした

川

市外瀧野川 川島 秀雄 (十四)

朝早く

岸に立つて

川を見た

きれいな水が

流れてた

晝間

川を見た

ごみやら何やらで

黒くにこつた水が

流れてた

はぎ

千葉縣平岡校高二 石木 良子

月夜の白はぎ

しつとりとゆれる

電燈

福岡縣三橋村 鶴崎 公雄 (十三)

フツと電燈が消えた



電燈

何處を向いても真暗やみ

弟がおそれてちこまる

バツと電燈がついた

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

電燈

一時にバツと明うなつた

弟と妹がうれしがる

夜

山口縣鹽田 達介

しんとした夜

向ふの山の上の

黒い一本松が

動かない

みかん

東京市芝區金杉四ノ廿三 北村 政夫

みかんを

むいたら

おつゆが

顔にかゝつた

江戸哀話

大福餅

西川喜平

春になつたといつても、まだ寒さの酷い、一月の半ばでした。筑波おろしと云ふ冷い北風は、手も足も凍えるばかりで、どんよりと曇つた空は、今にも雪が降り出しさうでした。平常は賑やかな兩國橋の邊も、往來の人通りも少く、淋しい日でした。

ありました。橋の西詰のたもとに、いろ／＼の小商人が店を出してゐましたが、その間に交つて、古い座を敷いて座つてゐる、浪人儘の親子づれがゐる。



した。

父親は深い編笠をかむつてゐて、顔は見えませんが、身体は目立つほど瘦せてゐる、病身らしい様子をしておゐます。

古い黒羽二重の色が褪めて、ところどころ、縫ぎはぎのあつた袴を着て、見すばらしい姿をしておゐます。柄糸もはぐれて、袴の割げた脇差を左の膝近く置いて、右手には破れ扇を持つてゐました。傍に行儀よく座つてゐる男の子は、齡のころ十歳ばかりですが、品のよい顔立ちで、縞目もわからないほど汚れた、古布子を着てゐました。

やがて父親は、扇を持つた手を膝頭へあて、力のない低い聲で

語り出しました。

「それは雨の木蔭、これは雪の軒ふりて、憂き寝ながらの草枕、夢より霜やむすぶらん。」と、息せわしく語り終つて、編笠を少し上げて、四邊を見廻しましたが、急ぎ足で行く人ばかりで、お錢を投げてくれる者もありませんでした。

「お父ちゃん。お腹が空いたよ。」と男の子が、小さい聲で云ひました。

父親は黙頭いて、
「お、出掛けに握飯を一つつ食べさせたがり故、空腹じくなるのも道理じや。今日はお祖父様の御命日、お墓詣りをしたので大分おそくなつた。貰ひがあれば、暖かい

ものでも食べさせてやる。……

……この空合ひでは人足も止らぬ。」と、溜め息を吐きました。

そして川面から吹き上げる風が寒いので、男の子を袖で抱へるやうにして、顔へてゐました。

その隣りに店を出してゐたのは、大福餅やでした。

年の頃は、六十ぐらゐの肥つた爺で、勢よく客を呼んでゐました。「大福餅〜。暖かい出来たての大福餅。」と、火鉢の上に餅をならべて、賣つてゐました。

すると、急ぎ足の往來の人もち止まつて、食べて行く者もありますし、お土産に買つて行く人もありました。

男の子は、大福餅やの前へ客の

立つ度に、羨ましそうに見てゐました。

父親も不憫になつて、丁度客の絶へた時を見て、大福餅やに向つて、

「まことに申兼ねたお願ひですが、この子供に、餅を一つやつては下さらぬか。代金は貰ひがあり次第さし上げるから。」と云つて頼みました。

しかし大福餅やは見向きもしませんでした。

「わたしの店は現金商ひで、貸し賣りはしませんよ。」と慥呑に云ひました。

父親は仕方なく頭を少し下げて「御道理ではありますが、先刻から空腹がつてゐますので、御無理

なお願ひですが………」と云ひ切らない中に、大福餅やは、獨り言のやうに、

「空腹じいのはそちらの勝手じや。」と云ひ放しました。

するとそのとたん、大きな聲で

「おい、大福餅屋さん。」と怒鳴つた者がありました。

見ると、それはその隣りに出てゐる、雪踏直しでした。

雪踏直しは、三十ぐらいの色の浅黒い、瘦形の男です。

ツカ／＼と大福餅やの前へ立つて、

「今聴いてゐりやあなんだつて、空腹じいのは勝手だとはなんて言ひ草だ、御浪人があゝやつて頭を下げて頼んでゐるさるのだ。それ

に通りがりの者じやあなし、毎日顔を合せてゐる人じやあないか。たかゞ大福餅の一つや二つ。」と云ひかけたので、浪人は堪らなくなつて、

「モシ／＼直しやどの。その御立腹の元は、拙者より起つたこと、マア／＼御勘辨下され。」

「イヤ、打捨つといて下せい。あんまり情を知らないから。」

大福餅やは眞赤になつて、

「横合ひから餘計なことを云ひなさるな。情、なさけと云ふなら、お前が情を出しなされ。」

「江戸つ兒は黙つて見てゐられななんだ。オイ錢さへ出しやあ、誰にも賣るんだらうな。」

「錢さへ貰へばお客さまじや。」



『そんなら、二十でも、三十でも包んでくれ。』

雪踏直しは、懷から錢をチャラ／＼と出して、大福餅やへ渡ししました。

それから竹の皮へ包んだ大福餅を、浪人の前へ持つて来て、小腰を屈めながら、

『今は大きにお喧しうございまして。つい腹の虫が納まらないので、大きな聲を出して御心配をかけました。これは坊ちゃんへ上げますので、めし上つて下さい。』と云ひました。

男の子は喜んで手を出しました。と、父親の浪人は、これつと制へて、

『これは／＼、かやうな御心配を

下されては恐れ入る。どうぞこれはお宿のお土産になされて下さい。』

『それやあ困ります。坊ちゃんへ上げるのですから。』と、また雪踏直しが出しますと、浪人は尙も辭退しますので、雪踏直しはチョツと考へて、

『それでは私の身分が賤しいので、お受けにならないのですか。』

『イヤ／＼左様の次第では………では辱く頂戴いたします。』

浪人は遂に受け取りまして、竹の皮を開けて、大福餅を男の子に食べさせました。

雪踏直しは、男の子の喜んで、美味さうに食べるのを見て、

『子供は罪のないもんです。時

にあなたはお身體が大分お悪いやうです。ございませうね。』

『持病の胸の病が、この二三日は一層つのりまして、困却いたします。』

『それやあいけませんね。今日のやうな空合ひやあ、貰ひもありませう。ヤツ、チャ／＼やつて来ました。はやくお歸りがようござんせう。』と、云ひながら、雪踏直しは、いくらかのお錢を、男の子の手に握らせて、

『これやあ坊ちゃんのお小道ひです。』と、云つて、浪人の辭退するのを、無理やりに取らせて、自分の商賣道具を片づけ、足ばやに柳橋の方へ行つてしまひました。

浪人は、しばらく、うつ向いて

ゐましたが、笠の内から、ホロリと涙をおとしました。

『お父ちゃん。また胸が痛いのかい。』と、男の子が訊ねました。

『ム、………イヤ大きによくなつた。雪のひどく降らぬ中に歸らう。』

浪人は敷いてゐた蓆を巻いて、男の子の手を引いて、橋を東へと渡つて行く、後姿もさみしく見えました。

二

さて雪踏直しは、柳橋を渡つて第六天の方へと來かゝりますと、後から『直しやさん／＼。』と呼んで、追ひ驅けて來る者があります。見ると料理屋の女中らしいなりの

女です。

女は息を切りながら、

『家のお客さまが、お前さんに、御用があると仰つしやるので、兩國からさがして來たのですよ。』

『へい有がたうございます。チャラやつて來たので、今日は早仕舞にしましたが、直しの御用なら参りませう。』

『イエ直しの御用じやあないんですよ。何んですか、わかりませんが、はやく來て下さい。』

『へい、それじやあお伴れなすつて下さい。』と、雪踏直しは、不審に思ひながらも、女中について行きました。

つれられて行つたのは、代地河岸の會席料理屋でした。裏の門か

ら入つて、庭を通つて飛石づたひに行きますと、隅田川を前にして向ふ河岸の百本杭から、駒止橋の方を見晴らした座敷の前へ通されました。

お客と云ふのは、五十ぐらの人品のいゝ立派な武士で、雪踏直しの來たのを見て、聲をかけて、

『よく参つた。これ／＼。』と縁へ指さしました。

雪踏直しは、あんまり思ひ掛けぬことに、何を云ひ出されるかとビク／＼しながら、沓脱ぎ石の傍へ蹲居りました。

武士は雪踏直しを見下ろして、『遠慮には及ばん。それへかけろ。』

そこでは話しが出來ん。雪踏直しは、『へい／＼。』と、オ

グ／＼しながら、椽の端へ小さく
なつて、腰をかけました。

武士は顔に笑みを含んで、

「その方の名は、何んと云ふのぢや。」

「へい山谷に居ります者で、七五郎と申します。」

「そうか。イヤ見も知らぬ身共が、用があるなど、申たので、定めて不審に思つたであらう。その方の、先刻兩國橋で親子の者に向つての情ある行ひを通りすがりに見て感心いたしました。世には身分のある者で情を知らぬ者も多いに、身分柄、業體に似合はぬ心掛けは見上げたものぢや。何もないが、ゆるりと呑んでくれえ。」と、料理と酒を出させました。

七五郎は、この言葉を聞いて、ホットーと息、安心をしますと一絡に、嬉し涙がハラ／＼とこぼれました。

「とんだ所がお目に留りまして恐れ入ります。あゝ云ふ事に黙つておられませぬのが私の性分で、時々失策をいたします。それに賤しい身分の者に、おほめのお言葉を下さるなんて、まるで夢のやうでございます。」と云つて頭を下げました。

(この時代に、淺草の山谷の中に、穢多町と云ふ部落がありまして、その部落にゐる人達は穢多と呼ばれて、普通の人間より一段身分の低い、賤しい者とされてゐて、その仲間の外、世間の人と實際の出

来ないことになつてゐました。

この七五郎のやうな雪路直しを職業にしてゐる者は、多くこの部落にゐたのでした。)

七五郎は、最初は固くなつて、酒を呑んでゐましたが、少し酔が廻つたと見えて、

「結構なお料理に御酒をいたゞいて、それにお立派なお殿様のお傍で、お話しをするなんて、仲間の者にも肩身がひろいやうなわけでございます。このお座敷から本所の方を見渡しますと、まるで繪のやうな景色で……、あゝ本所と申しますと、あのお浪人はお身體がわるいので、まことにお氣の毒でございます。」

「おゝ七五郎。あの人の住居を知

つてゐるか。」

「へい、吉田町邊と伺つて居ります。」

「ム、左様か。あの人へ手紙を遣したいが、太儀ながら便を頼みたい。」

「へい、吉田町なら一と走りでございます。直に行つて参ります。」

武士は、料紙、硯箱を取り寄せて、サラ／＼と手紙を書き、狀箱に入れて渡しますと、七五郎は大切に持つて急いで出て行きました。

三

狀箱を持つて急いだ七五郎は、吉田町へ来て、あちら、こちらと

探し廻り、漸く探しあてたのは、裏町の破ら家でした。

「御免下さいまし。」と、聲を掛けながら戸を開けますと、男の子は目敏く見つけて、

「お父ちゃん。さつき大福餅を下すつた、おちちゃんか来たよ。」と知らせました。

破れ蒲團に寝てゐた父親は、身を起しまして、

「これは／＼、わざ／＼のお尋ねでいたみ入る。先刻は重々のお志」と云ひかけて胸をおさへ、息苦しく見えましたので、

「あゝどうぞおやすみなすつて。私はお使に出しましたのです。」

浪人は、七五郎の顔を見て、

「ナニお使とは、何難よりのお使」

「どうぞこれを御覽なすつて下さいまし。」と狀箱を出しました。

不審さうに狀箱を受け取つた浪人は、蓋を開けて、手紙を取り出して見るなり、

「アツ。」と驚いて、手紙を持つたまゝ、目を瞑つてうつ向きしました。涙がハラ／＼と膝へ落ちました。

やがて浪人は手紙を開いて、一行讀んでは涙をはらひ、二行讀んでは吐息をして、讀み終りましたから、腕組みをして、ザツと考へてゐました。

しばらくたつて、浪人は七五郎に向ひまして、

「拙者がまかり出て、直にお禮を申上げたいが、何分にもこの病體



曇り空に日の暮れるのも早く、外は夕闇にとざされて、家の中はもう真暗になりました。ねぐらに急ぐ鳥の聲も悲しく聞えて後はヒソソリとなりました。

やがて半刻あまりもたつたと思ふ頃、宙を飛ぶやうに、息を切つて駆けつけて来たのは、七五郎を案内として、大勢の人達でした。

提灯を持つて直先へ立つた武士は、戸を開けて暗がりの中へ入りました。

『残念ッ。』と一と聲叫びまして。見ると浪人は、位牌の前に切腹して、息が絶へておりました。

故、失禮ながら、作を名代にさし出します。御厄介ながらおつれ下され。只今お返事を認めます。』と云つて、枕元の古びた文庫の中から、紙と矢立を出して筆を取り上げ、考へ、考へ、漸く書き終りました。状態箱へ入れて七五郎へ渡しました。

そして男の子を悦へ呼びまして『コレ千代松。其方ももう十歳じや。父の名代として参つたならば、武士の子らしく立派に御奉公、イヤ名代を勤めるのじやぞ。女々しい振舞をして笑はれるなよ。よいか。イヤ七五郎殿、お待せいたした。伴のこと何分宜敷お頼みをいたします。』と云つて、胸苦しくなつたか、枕に顔をおし當てゝしま

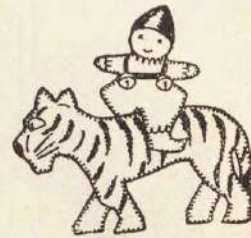
ひました。

七五郎は黙頭いて、『坊ちゃんのこととは御心配なく、シツカリとお伴れ申します。どうぞお身體を御大切になさいます。』と云つて、男の子の手を引いて出て行きました。

あとに浪人は、起き上りまして、古い机を持ち出し、その上へ位牌を据へまして、その前へ頭を下げました。

『はからずも御命日に、思ひがけぬ舊友より、元の主家へ歸参のお勧め、昔の交誼を忘れぬお志、お禮の申やうもない。これも佛さまのお引合せとも思はれて、まことに辱しいことながら、重い病に明日をも知れぬ命、とても御奉公

は勤まらぬ。それに流浪いたしてから、引つゞいての不幸に、今では乞食同様に落ぶれて、他人の情にすがつて露命をつなぐ淺ましき。それのみならず、賤しい者より恵みを受けるなど、武士にあるまじき行ひを、御覽に入れ、なんでおめくろと生きてお目にかかれやう。また先祖に對し、家名を汚せし罪は、冥途へ参つてお詫びをいたす。伴のこともお情厚いお志に従ひ、成人の上拙者に代り御奉公を願ひ、家名を立てさせることを、お頼みした上は、もうこの世に思ひ残すことはない。』と、獨り言を云つて、脇差を手に取り上げました。



童謡

野口雨情選

(子供篇)

風(賞)

群馬 笛木 松雄 (十二歳)

風さん
そつと
吹いとくれ
ありさんが
お池へ

おちました

小川(賞)

千葉 小高 とく

小川がさら〜
流れてゐる
さい〜もんづが
ないてゐる
遠くで子供が
さわいてゐる

障子

群馬 山川作兵衛 (尋五)

障子のかげが
明るいな
障子をこしてきた
お日さんが
ぬくいな

がん

愛知 大島 健吉 (尋五)

お祭のばん
がながないて
通つたよ
みんなだまつて
ながめたよ

みづく

朝鮮 河野 砥吉

ひるまのみづく
ホーホー
お月さんこひしい
ホーホー
ホー

朝やけ

千葉 伊藤 光子 (尋六)

朝やけだ
あさやけだ
とほくの方で
にはとりが
ないてる

いけ

静岡県 中村 武夫 (尋三)

ぼくがいけへ
石なげた
ボクンといつて
あぶくが出た

十五夜さん

福岡 下川トシエ (尋四)

このはがちるよ
ひら〜ちるよ
てふてふの様に
まふよにちるよ

雨

山形 山川作兵衛 (尋五)

雨が降る
からかささして
水くんた

このは

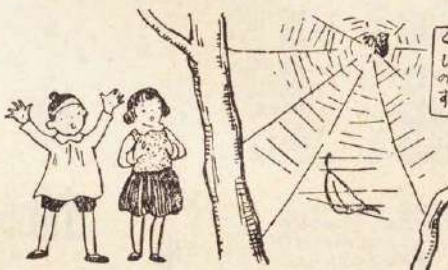
岡山 吉岡 満子 (尋六)

くものす

群馬 小林 とき (尋六)

水のはが

くしゅう



くものすへかうつて
ぶらんこを

してゐる

しよぼ〜雨

山口 未延 誠 (高一)

しよぼ〜雨が
降つてます
ゆうれいが
出そうな
本とうに
さむしい

鳥

石川 橋本 晃村 (十四歳)

鎮守のお森の
からすさん
きたないからだの
からすさん
一べんお風呂へ
行きなさい



あゝ無情

久米 舩一



【前説の梗概】
ジャンバルヂヤンは、パン一片を盗んだために、十九年間牢獄に入れられておりました。その爲に、牢獄を出てからも、心が全く僻んでしまつて、自然と悪事を働くやうになつてゐました。或る寒い晩の事、ジャンバルヂヤンは、デイナーの町へ来て、宿を借りようとしたが、誰一人として貸して呉れる者がありません。寂しきひに、ミリエルと云ふ親切な僧正の家へ来て、やつとの事で泊めて貰ふ事を出来ました。

ジャンバルヂヤンは、僧正のれてゐる隣りの室で寝む事になりました。
一、起重機のジャン
ジャンバルヂヤンは、何故、十九年間も牢獄に入れられてゐたのでせう。これから一寸、そのお話を致しませう。
ジャンバルヂヤンは、フリーと云ふ所で生れました。大へん貧乏な家で、十九の時には、自分のお父さんとお母さん亡くなつてしまひ、自分の姉さんと二人で暮らしてゐました。

姉さんには七人の子供があつて、ジャンバルヂヤンは、それを皆んな養つて行かればならなかつたのです。
ジャンバルヂヤンの商賣は植木屋でした。大きな木を植えかえたり、並木の枝を卸したりする、それは骨の折れる仕事でしたが、ジャンバルヂヤンは、一生懸命になつて働きました。併し、幾ら働いても、七人の子供があつてはどうする事もおぼつかない。次第に貧乏が非道になつて来て、冬の寒い頃になると、もう明日から食へる一月分のパン

も無いやうになつてしまひました。
ある晩の事でした。

町の大通りに、軒のパン屋がありました。が、その主人のイザボと云ふ男が、奥の部屋で仕事をしていると、店先の方で、何か熱い、物の焼けるやうな音が聞えて、何かんだらうと思つて来て見ると、どうせう。硝子窓の破れ目から、一本の大きな腕が出て、パンの片をつかんで、逃げやうとしてゐる所でした。

イザボは直ぐ表へ飛び出して見ると、盗賊は一枚に暗闇の方へ逃げだしました。イザボは大層驚けながら追かけて、露路の行當りで到々盗賊を捉へました。

盗賊はジャンバルヂヤンでした。ジャンバルヂヤンは、町を通りすがりに、ふと麵包屋の店先に置いてあるパンの塊を見ました。彼は、その軟かきうなパンの塊を見、又、自分の衣で擦るやうに懐へてゐる多くの子供達の事を考へた時、前後の考へもなく、硝子窓を打破つたのです。

ジャンバルヂヤンは、竊盗罪と云ふ名の下に、ウィロンの牢獄につながれました。そして、

で、そこで、烈しい勞役に従はなければならなかつたのです。

ジャンバルヂヤンは、恐ろしく力のある男だつたので、レール運びなどには、もつてこゝでした。普通、二人の男が、やつと持ち上げる事の出来るレールを、彼は一人で一人で運んで行きました。その爲に仲間達の者達から「起重機のジャン」と云ふ綽名をつけられてゐました。

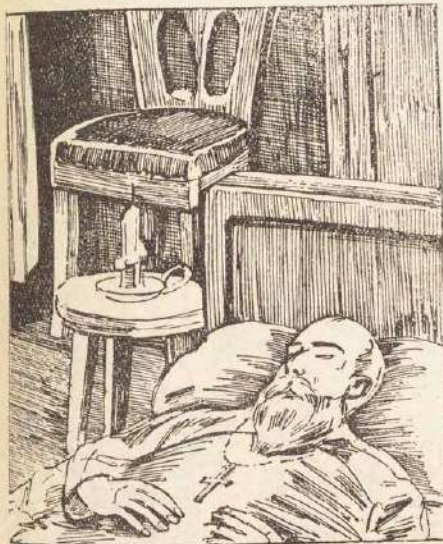
併し、まだ餘の若い、一本氣な所のある彼は、刑期の間に、ぐいと牢獄に我慢してゐる事が出来ませんでした。彼は四回脱獄を企てました。そして、その度毎に失敗して、刑期を増されて行きました。

かうしてジャンバルヂヤンは、十九年間、冷たい牢獄の鎖につながれてゐたのです。そして、曾ては、フリーの正直な植木職だつた男が、絶えざる苦しみと、辱しめのため、全く性質が一變して、自然と悪事を働くの恥としないやうな、人間となつてしまつたのでした。

二、聖者の憩ひ

ジャンバルヂヤンは、そんな事を考へないで、もう一度眠らうと試みましたが、どうしても駄目でした。
『銀の皿は、直ぐ隣の室にある。僧正は何も知らずに眠つてゐる。そつと近づいて、彼の袋の中にある、あの嚴の綿で「mitten」』

そんな考へが、拂つても頭の中に浮んで来るのでした。ジャンバルデヤンは、あつちへつちへと、寢臺の上で寝がへりを打つて、思ひ感つてゐました。
やがて時計が一時を打ちました。その音が彼には「さア、やるなら今だ！」と云ふやうに聞えました。ジャンバルデヤンは寢臺から身を起しました。途に悪の力が打勝つてしまつたのです。
彼は、袋を開けて、太い鐵の棒を取り出し、しきりに僧正の寢室との境の扉は、憎も彼を迎へ入れるかのやうに、五六寸開いたまゝになつてゐました。ジャンバルデヤンはそれに勇氣を相て、細のやうに足音を忍ばせながら扉に近づき、そつと中を覗きました。



朧げな月の光りで、室の向ふの隅に、銀の皿を置つた大戸棚と、その前に、僧正の寢臺が横たはつてゐるのが見受けられました。ジャンバルデヤンは息をひそめ、全身の注意力を眼と耳とに集めて、そのりりりと寢臺に近づいて行きました。
僧正の規則正しい、静かな氣息が聞えて來

ました。ジャンバルデヤンは、たしかに僧正の頭と思はれるあたりを見据へて、きつと鐵棒を握りしめました。
丁度其時、雲間から出た月の光りが窓を通して、僧正の寢臺を青白く照し出しました。まア何んと云ふ美しい休息の姿でせう。
神の御手に纏つてゐるのを任せようか、そんな事が起きては決して忍れぬ、全く信頼しきつた安らかさが、その顔に浮んでゐるのです。
銀白の眉、なだらかな鼻、つましく結ばれた口元、じつと見てゐると、自然と頭を下げすには居られないやうな、ある崇高さが其處にあらはれてゐるのです。
ジャンバルデヤンは、どうしても鐵棒を振り下ろす事が出来ませんでした。息づかひが次第に荒くなつて來て、顔には汗が滲んで來ました。
突然、ジャンバルデヤンは、寢臺の前に膝まづきました。そして、寢臺の外に垂れてゐる僧正の手に、自分の腕をなつてやうとしましたが、又思ひ返して立上りました。
苦痛の色が、ありと彼の顔に浮んでゐ

ました。彼は、袋を開けて、太い鐵の棒を取り出し、しきりに僧正の寢室との境の扉は、憎も彼を迎へ入れるかのやうに、五六寸開いたまゝになつてゐました。ジャンバルデヤンはそれに勇氣を相て、細のやうに足音を忍ばせながら扉に近づき、そつと中を覗きました。
例の六枚の銀の皿が、ちやんと遣入つてゐました。ジャンバルデヤンは素早くその皿を袋へ押し込むと、すかすかと窓の傍へ近寄つて、外の様子を窺ひました。
夕方あんなに強かつた風も、すっかり止んで、デイーニムの町は、灯の影もなく、静かに眠つてゐました。



翌る日の夜明方、ミリオル僧正は一人、しつとりと露に濡れた教會の庭を散歩してゐました。
すると其處へ、下女のマグラールが、息をき切つて走つて參りました。
「旦那様、大變でございます！」
僧正は靜かに振り向いて、下女の顔を見ま

した。
「旦那様の血が溢れました。銀の皿が！あの食卓が空になったのでございませう！」
併し、僧正は相變らず、顔の第一ツ動かしません。
「まア、旦那様。どうかして下さいませ。そんなに落ついてゐらつしやらないで……」
「警察へ訴へませうか？」
「あの男は、大へんあの血を賣めてゐたから、きつと欲しくなつたのでせう。もつと早く上げればよかつた。」僧正は靜かに云ひました。
「まア、旦那様は又あんな事を仰しやつて。あの血が無くなつたら、旦那様は何んで御飯を召上ります？」
「鐵の皿があつたらう？ あれがい。」
「鐵は錆が出て、駄目でございます。」
「ぢやア錆が、い。」
「鐵は匂ひが致します。」
「ぢやア、木の皿にしておくれ。木の皿は、スーパが冷えて、一番だよ。」
マグラールは、じれつたさうに足踏みをして、又何かと云はうとしました。

三、その通り

其時、庭の門が荒々しく開いて、三人の憲兵が這入つて来ました。
憲兵は、一人の男を捕へてゐました。男はジャンバルザンでした。帽子は脱げ、シャツはビリ／＼に裂け、頬のあたりから、黒い血が流れてゐました。
彼は、おづ／＼とした眼を上げて、ソツと僧正の方を見ました。その様子はいさ／＼で盗賊大のやうでした。
憲兵の一人が、一歩前へ進んで、敬々しく云ひました。
「メリエル僧正様。今朝、我々が市外を巡回して居りますと、此奴めが怪しい様子をして空家に隠れて居りました。直ぐ引提へて調べますと、身が不相應な、銀の皿を六枚も持つて居りました。ところが、此奴めは、僧正様から頂いて参つたのだと申すのでございます。」
「その通り。」
僧正はニコ／＼しながら云ひました。
「それに違ひありません。私はその皿を、あの方に差し上げたのです。」



そして、ジャンバルザンの方を見て、「貴方。貴方はどうして、あの銀の燭臺と一緒に持つていらつしやなかつたのです。あれも差上げるお約束でしたのに……」
ジャンバルザンは、ほかんとした顔つきをして、僧正の頬を見上げてゐました。憲兵も呆れて立つてゐました。
「僧正様。では、この男を許してもよろしいのでございませうか？」
「えい／＼。もと／＼この方には、ちつとも料はないのです。どうか直ぐ、その手錠を外して上げて下さい。」
手錠は外されました。そこへマクロアールが銀の燭臺を持つて来ました。
「さア、どうぞ貴方。これもお持なすつて。それからお暇な時には、又是非お遊びにいらして下さい。ろくなお供ひも出来ませんけれど……」と、僧正が云ひました。
ジャンバルザンは、もう何かなんが分らぬと云ふ風に、黙つてその燭臺を受取りました。
その時、僧正は云ひました。

「よろしいですか。貴方。この事をよく覚えて下さい。この燭臺が貴方の手に這入つた時から、貴方の心が全く變つて、もう貴方は、暗闇の者ではなく、明るい光の中を歩いてゐる者だと云ふ事を。貴方は必ずさう云ふ者になると、私に約束なさつたでせう。」
なんにも約束した覚えのないジャンバルザンは、なんの事だか、ちつとも分りませんでした。が、不思議に、その言葉が胸にこたへたのでした。
彼は左手に、燭臺を持ち、袋を擔いで、静かに外へ出て行きました。後に残つた者達は、めい／＼違つた心持で、何時までもその後姿を見送つてゐました。

四、雪だるま

ジャンバルザンは、廣い／＼荒野の中を急ぎ足に歩いて居りました。何處か道だかそんな事はお構ひなく、むち／＼と進んで行きました。
何かしら、かう、いら／＼とした「憤り」に似た心持が湧いてくるのでした。

それは、今までに、嘗て経験した事のない、不思議な心持でした。十九年、彼が來つて來た頑なな心が、僧正に會つた時以來、根柢からぐらつて來たのです。丁度、大きな雪だるまが、日に照されて、根元から崩れて行くやうに……
彼は、どうかしてその心の動搖を抑へつけやうとしたが、どうしても駄目でした。彼は、大聲を擧げて泣き出したやうな氣持になりながら、尙も荒野の中を、先へ／＼と進んで行くのでした。
その後ジャンバルザンがどうしたか、誰一人として知る者はありません。たゞ一人、ある馬車挽きが、夜遅く僧正の家の前を通つた時、その數石の所に、たしかにあのジャンバルザンらしい男が、膝まづいて、何かいふ所るやうな恰好しながら、何時までも何時までもちいつとしてゐるのを見たと言ふだけでした。
(つゞく)

(ジャンバルザンが、このちとんな活躍をするか、次號をお待ち下さい。)

島の唄

達崎龍

島はごんごと
日が暮れました
砂も渚も
ごんごご暮れる
沖の遠くで
人買船は
チロチロ灯を
もうつけました
島で暮した



貝がらたちは
夢のつづきを
みてをりました
島の子供よ
鷗ご歸ろ
鷗かぞへて
もう歸りましょ
島はごんごと
日が暮れました
砂の数々
ごんごご暮れる

(伊豆の大島にて)



金時計の悲しみ

大木雄三

支那の上海では此頃また戦争が起つて、人民たちは大へん迷惑してゐる、といふことは皆さん新聞で御存知でせう。それについて、此の間支那から歸つて来た人が、ある一人の少女の話をしてくれました。

彩華はまだ十三になつたばかりですが、支那人同志で戦争をするといふことを、ふだんから残念に思

つてをりました。しかし家が上海から少し離れた田舎にあるので、毎日大砲の音や鐵砲の響をきかないわけにはまゐりません。白い煙が林の上に立ち上るのを見るときなど、彩華は悲しげに涙をためた目でそちらを眺めてゐるのです。

彩華の家は近くに、見晴しのよい丘があります。彩華はそこで遊ぶのが何より好きでした。

『どこへも行きたくはないわ。こないだ、所はかにはないのだから。戦争の起る町なんか大嫌ひ。』彩華はかう思つてをりました。

けれども、獅子よりも虎よりも恐ろしい戦争は、日毎にだん／＼と丘へ近づいて、大砲の音が大きく聞えるやうになりました。それを丘の上から眺めてゐる彩華の顔は、いつさう心配さうになつて行きま

す。或る日のことです。丘の麓を立派な自動車が一臺、蟹のやうに進んで來ましたが、彩華の姿が見えると、



110

音もなく停りました。そして着飾つた少女が顔を出しました。

『やつぱり彩華さんだつたのね。あなたのお家この邊なの？』

『えゝ、すぐよ。』

と、彩華は答へました。自動車に乗つてゐたのは、林芳といふお友達だつたのです。

『この丘の向ふよ。よつていらつしやらない。』

『有難う。』

と林芳が言ひました。そしてポケットからびかびか光る金時計を出して、バチツと蓋を開けてから、びつくりしたやうに、

『あらつ、もう二時だわ。私伯母さんのお宅へお招はれしてゐるのよ。』

と、言ひました。

『さう。』

彩華はつまらなさに言ひました。せつかくお友

達に會つたのに、すぐ別れるのが残り惜しかつたのでありました。

二人が「さよなら。」を交しました。

ズブ……と自動車は勢よく走り出しました。彩華は、いつまでもその後を見送つてをりました。

『何て立派な自動車なのだらう。ほんとに林芳さんは幸福な人だわ。あんな綺麗な金時計をもつてゐるのですもの……』

彩華はかう呟いて、それから自分の身なりを見ました。美しい縫取りも飾りもありません。

『つまらないわ。』

彩華はさう思つて獨言を言ひました。

二

彩華の家は貧しいといふほどではありません。けれども金時計を買つて貰つたり、自動車に乗つたり出来る金持でもなかつたのです。彩華は林芳を羨ま

しいと思ひました。そして自動車が買へないのなら、金時計だけでも欲しいと考へるやうになりました。

『金時計。金時計。』

彩華が、かう歌ふやうに言ひながら、家へ戻らうとした時、林の方でバチ／＼と豆をいるやうな鐵砲の音がして、蟻のやうな兵隊の姿が見えました。

『まあ。』

彩華は胸がどきんどきんしました。急におそろしくなりました。早く家に歸らうとして駆け出しました。そしてやうやく家の前まで走りついた時、そこに青い顔をした兵士が倒れてをりました。

兵士は彩華を見ると、

『娘さん。どうか私を助けて下さい。』

と、苦しさに息を切らして言ひました。

『私は敵に追はれてゐるのです。捕へられれば殺されるにきまつてゐます。早く隠して下さい。お願いします。』

兵士は何度も林の方を振向

きました。

可哀想に、

さつと

どこ

か鐵

砲で

撃たれ

たので

せう。胸

から下へ

赤い血が滲

んで、さう痛

さうに見えるの

でした。

彩華は助けてやらう



と決心して、

「えっ。」

と、答へました。

「さあ、早くあそこへ隠れて下さい。」

さう言つて、兵士を、家の横手に積み重ねてある藁のところに連れて行きました。

「あゝ、有難う。あなたは情深い娘さんですね。有難う。」

兵士は嬉しそうに、ちつと彩華を見詰めましたが、たちまち犬のやうに藁の中へ潜り込んでしまひました。

「動いちゃ駄目よ。」

彩華は、兵士の上へもつとたくさんの藁を載せてやりました。そしてこれならば誰が見てもわかるまいと、胸を撫で下したのでありました。

「神様！この氣の毒な兵隊さんを救けて上げて下さい。敵に見つからないやうに護つてやつて下さい。」

はいけません。あれは支那の國にとつて悪い奴の仲間ですよ。ね、教へて下さい。その代りいゝものを上げませう。」

言ひながら、將校はポケットに手を入れて、彩華の顔を眺めました。

「あらつ。」

飛びつくやうな聲が彩華の口から出ました。將校の手には、さつき見たお友達の林芳が持つてゐたのと同じやうにピカピカ光る金時計が、ぶらりと下つてゐるではありませんか。

「さあ、これを上げるのですよ。だから教へて下さいね。」

將校はもういちど、にやりと笑ひました。

「でも……」

彩華は迷ひました。教へるのは可哀想だし、教へなければ時計が貰へないからです。

「あの兵隊さんを殺さないで下さい。さう約束して

彩華は掌を合せて祈りました。

間もなく、どつさどつさと荒い足音を立てて、大勢の敵兵がまゐりました。

「この邊へ来た筈だ。」

「逃げられるものか。」

敵兵たちは口々に言ひました。けれどもいくら探しても、姿が見えないのです。そのうちに、一人の將校は彩華を見つけると、偉さうに肩を振りながら近づいて、

「この邊へ逃げて来た兵士があるでせう。どこへ隠れたか教へて下さいね。」

と、優しく訊きました。

「私、ちつとも知りません。」

と、びくびくしながら彩華は答へました。すると、將校はにこ／＼笑つて、

「でも逃げるところは無い筈ですからね。あなたはあの兵士を救けるつもりなのでせう。けれどもそれ

呉れて？」

「約束しますとも。たゞあの兵士に訊きたいことを訊けばよろしいのです。」

と、將校が言ひました。

「ほんとう。」

彩華は念を押しました。

「大丈夫。」

そして將校は首を上下に動かしてから、ボンと胸を叩いて見せました。そこでやうやく彩華は安心することが出来たのです。けれども口で言ふのは怖ろしい氣がしたので、積んである藁の方を、黙つて指しました。

「わかりました。さあこれはあなたに上げます。」

將校は冗談のやうに右手を舉げて「失敬」をして、恭々しく彩華の手に金時計を渡しました。

彩華の胸は躍りました。冷い黄金の重みが身に沁みるやうに思はれました。彩華の心は、嬉しさでいつ

ばいだつたのです。

その時、一方では、大勢の兵士が葉のまほりをぐるつと圍んで、

『出て来い。』

『出る。』

と、罵り叫びましたが、兵士は出て来なかつたのです。

『面倒な奴だ。』

一人の兵士は、いきなり剣つき鐵砲を葉へぐさりと突き立てました。

『あつ。』といふ聲！

それにもかまはず、輝く銃剣は、二度三度葉を目掛けて突き刺されたのです。

『うーむ。』

葉がむくむくと動いて、中の兵士がすつと立ち上りました。けれどももう手抗ひをする力もないのか、ぐたりと手を垂



れて、たゞ怖ろしい目付きで大勢を睨めたばかりです。

『おい、妙な顔をするなッ。』

將校は、つかつかと負傷兵に近よつて、憎々しく言ひました。けれどもその兵士は何にも答へません。

まるで人形のやうに黙つてゐるのです。

將校はたうとう怒つてしまひました。

『何故黙つてゐるのだ。どうして答へないのだ、銃殺されたいのか。死ぬのが厭だつたら白狀しろ。』

でも、兵士は一言も言はないのです。

三

將校はスラリとサーベルを抜き放ちました。

『よろしい、望み通り銃殺だ。』

さう言ふと、ほかの兵士たちは、負傷兵を引き立て、無理矢理に林の方へ引き立てゝ行つてしまひました。

その間、彩華は啞のやうに、この有様を見てゐたのです。

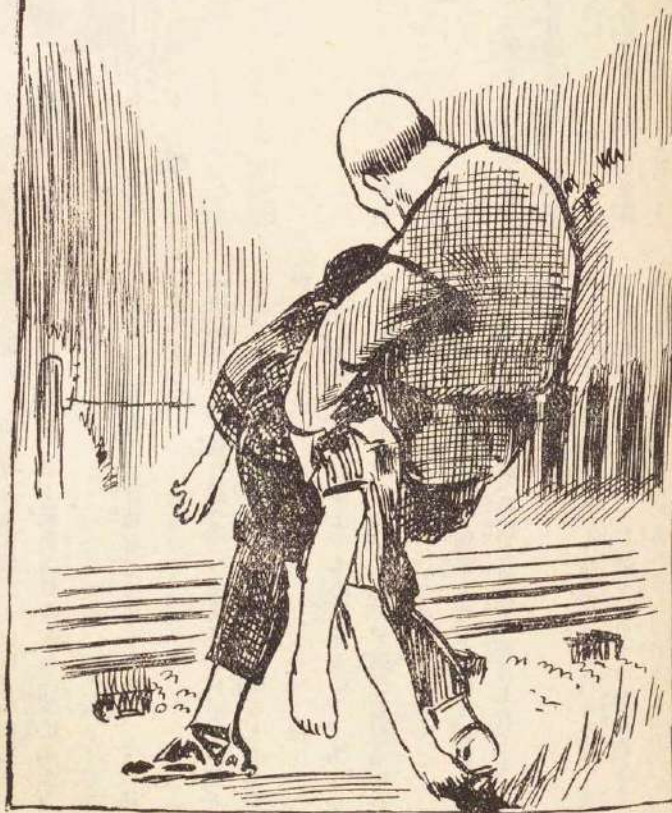
可哀想な兵士は、林の中の木に、ぎりぎり縛りつけられました。

兵士たちは一列に並んで鐵砲を肩にあてました。



それを見てゐた彩華の身體は、がたがた震へだしました。約束を違へた將校の仕打ちが憎くてたまらなくなりました。けれどもどうすることもできな

特 別 附 録 村 英 雄 水 谷 ま 子



つたのです。

「撃てッ。」

將校が叫びました。

ドド……ン。と物凄い音。

彩華は、思はずはつとして、目を閉ちてしまひました。

ドド……ン、と二度目の音がして、それきり、後は静かになりました。兵士たちの笑ふ聲が悪魔の叫びのやうに聞えるばかりです。

「神様。私は悪い子でした。あの勇ましい兵隊さんを殺させてしまつたのです。私を罰して下さいますやうに。」

彩華の目からは、熱い涙が朝露のやうにぼろぼろとこぼれ落ち、足もとの土に沁みてゆきました。向ふを見ると、兵士たちは林の中を並んで足並揃へて進んで行きます。憎い聲つき將校のサーベルが、木の間にキラ／＼光つて見えました。

彩華は、ふつと自分の手に握つてゐた金時計に気がつきました。

「こんな物を欲しがつたから、私は欺されたのだけ。こんな物。」

かう言つたかと思ふと、いきなりそれを高く上げ、側にあつた石を目掛けて力いづばいに投げつけたのでありました。

ガチャンといふやうな音がしました。金時計はめちゃめちゃにこはれて、藁のやうに平たくなつてしまつたのです。

彩華は食ひ入るやうにそれを眺めました。そして、

「あゝ。」

と溜息をしたのです。

金時計をこはしても、もう兵士は生き返らないのです。たとへ神様でもそれは出来ないのです。それと思ふと、彩華はどうしても涙をとどめることが出来ないのでした。

(をばり)



「そんなら、兼吉！ 行つて来るよ。大切な仕事やから、よう氣をつけてな。」
母親は戸口を出ると、なんどもくり返した言葉を、またくり

返して兼吉に念を押しました。

「え、大丈夫。よく氣をつけるから、安心して、や。」

兼吉は、戸口まで母親を送り出しながら、すなほに答へました。

「終列車まで、兼吉に起きて、もらふのは、氣の毒やから、十時までには歸るよつてな。居眠りしたらいかんで……。」

兼吉は、母親がいつまでも心配するので、ちよつとおかしいくらゐでした。それで、笑ひながらいひました。

「ぐるつと目を開けて、居眠りするわ……。」

そのじやうだが、母親の氣持を軽くしたらしく、母親も笑ひながら、

「そんなら、お頼みいたします。」

と、わざといいない言葉をいつて、踵を返すとそのまゝ、一本道を森の方へ歩いて行きました。

持つて、下駄をはくと、そのまゝ外へ出ました。

「今日は！」

と、道を通る人たちが、會釋をして行きます。兼吉もすぐに、

「今日は！」

とあいさつをします。いつもとちがつて、なんだか、急にじぶんが一人前になつたやうな氣がしました。やはり、じぶんの肩にかゝつて來た責任が、さういふ氣持を起させるのでありました。

また、六角時計をのぞいて、長い針が二時のところへ來たので、兼吉は踏切の柱に巻きつけてある繩をとつて、一方の柱の釘に、繩のさきの環をかけました。まづ向ひ側の方をさきに繩をかけて、それからこちら側の方の繩をかけました。

やがて、ゴウ……といふ、鐵路に響き渡るとゞろき。耳をつんざくやうな汽笛。列車は右手の曲路に影を見せました。そして、かなりな句配の線路を、

「ちやよなら、光！」

兼吉は、母親の音なかにおぶさつてゐる、妹のお光に向つて手をあげました。

お光は、きやつきやつといひながら、兄の兼吉の方をふり向きしました。すると、母親もふり向きしました。兼吉は、また手をふりました。

やがて、母親の姿は、森のなかに隠れました。兼吉は、すぐに家へ入つて、柱にかゝつてゐる六角時計を見あげました。

「まだ、二十分あるな。」

兼吉はさう思ひながら、机の前に坐つて、國語讀本をひろげました。しばらく讀んでゐるうちに、なん度となく、兼吉は六角時計を見あげました。じぶんに托された大切な仕事に對する責任が、さうさせたのでありました。

一時が鳴つて、しばらくすると、兼吉はもう机の前に坐つてゐることができませんでした。白い旗を

すばらしい速力で走つて来ました。

兼吉は、白い旗を出して、柱のそばに立つてゐましたが、列車が踏切を通過する時、烈しい空氣の動きを、ひやりと感じました。

でも、列車が通り過ぎると、兼吉ははつとして、柱の繩をはずしました。

二

兼吉は、これまでに、旗を持つて踏切に立つたことはありましたが、それは、ほんの母親の代りに立つただけで、今日みたいに、じぶんが時間を見て、繩をはずつて、旗を出すといふことは、はじめてでありました。

母親は、非常に責任を重んじてゐましたから、これまででけつして、踏切をおろそかにしたことはありませんでした。殊に、この踏切は、この村のなかで、いちばんあふない踏切でした。急に曲つて、下り坂

く母親が踏切番になつてから、線路が血に染んだこともないのに、もしかどんな間違ひがあつて、母親の顔をつぶしてはたいへんだと、考へてゐたのでありました。

兼吉の父親は、四年前に死にました。それまたその死に方ではなく、ある晩、お酒を飲んで、ふらふらとよろけ足で歸つて來た時、はかならぬこの踏切で、汽車に轢かれたのでありました。まだ、妹のお光は、母親のお腹のなかにゐて、兼吉は九歳の秋でした。

母親の悲しみは、見るも哀れでありました。病氣で死んだものなら、あきらめもつきますが、朝たつしやな身體で家を出て、晩には死骸となつて歸つて來たのですから、それも無理はありませんでした。かんじんの稼ぎ人はふいに死ぬし、さうかといつて貯金もなし、おまけにお腹には子供があるといふのですから、どんなにか辛かつたでせう。運ばれて來

になつてゐるところにありましたから、よく下り列車のために、人が死にました。早くから、踏切番をおかなくてはゐけないといはれてゐましたが、どういふわけか、長いことそのまゝになつてゐました。やつと去年の春、いよ／＼踏切番をおくことになつて、兼吉の母親が選ばれて番人になりました。

そんなわけで、母親としては、じぶんが番をする以上、今後けつして線路に血を染めまいと、かたくなを決めたのでありました。従つて、一日だつて、留守にしたこともなく、兼吉に代理をさせるにしても、一日にほんの一度ぐらゐなことでした。それも、兼吉の妹が、病氣でゞもあつて、手が離されないやうな時に限りました。

けれど、今日は、里の親の三回忌にあたるので、心配ではありましたが、よくよく兼吉といひ合めて、出かけたのでありました。さうした母親の氣持を知つてゐる兼吉は、ほんとに一生懸命でした。せつかた死骸にとりすがつて、おろおろと泣き崩れた姿は、村の人の袖をしぼらせました。然も、死骸の手には、兼吉のおみやげの木製の鐵砲が、かたく握られてゐたといふので、母親はその心持を察して、身も世もなく悲しみました。悲しさのあまり、じぶんも兼吉を追つねにして、鐵路の錆と消えようかとさへ、思つたほどでありました。

でも、その後、母親は方々の日やとい仕事をして、ほそぼそと暮しました。そして、その後、二人ばかり、やはりおなじこの踏切で人が轢かれたので、いよ／＼踏切番をおくことになつた時、兼吉の母親は、じぶんから進んで、番人を志願しました。

『わたしは悲しい目に逢つてゐますから、せひともそんなことのないやうに、氣をつけて番をします。それは、死んで行つた夫に對しても、いちばんいい供養だと思ひます。』

さういふ氣持を知つた村の人たちは、喜んで母親

の申し出を受け入れました。そして、なるほど、その後の踏切には、すこしの變つたこともありませんでした。

三

兼吉は、上り下りの列車を、四度ばかり無事に務めました。

やがて、日が暮れはじめました。さつきから、しきりに森の方で鳥が啼いてゐましたが、それがすっかり静まつたので、あたりは急に静かになりました。おまけに、西の空には、雨もよひの雲が出たので、四時をちよつとまはつたといふのに、もう暮れ方のやうでありました。

兼吉は、やはり、たび／＼六角時計を見あげました。そして、四時二十分になると、兼吉は旗を持つて出ました。兼吉は、ほんのすこし早めに、繩をかけました。その時、踏切に立つてゐたのは、おちい

さんの百姓だけでした。

『今度は下りだな。兼吉。』

おちいさんは、兼吉にたづねました。

『ええ。』

『下りはあふねえな。』

おちいさんは、ひとり言のやうにいひました。そして、腰から煙草入を出すと、

『ちよつくら、火を貸してもらふべえ。』

といひながら、番小屋の土間へ入りました。

その時、また、踏切の方へ急いで來る、一人の人影がありました。その人は、踏切の繩の前に、ちよつと立ちましたが、二重まはしの前を開けて、帯から大型の金時計を出して、

『ちえッ、まだ時間があるぢやないか。』

といひました。そして、なほも耳を傾けましたが、列車が来る氣配もないので、

『なんだい、早くから關所とめにして……わしは急い

ぐから通るよ。』

といひながら、繩をくゞつて通らうとしました。

見るとそれは、隣の村の金貸しをしてゐる六兵衛といふ男で、義理も情も知らぬといつて評判されてゐる男でしたが、兼吉はすばやくその男の二重まはしの袖をつかまへました。

『いけない。』

力のこもつた聲が、りと響きました。

『なにをする、小伴め！ 放せ！』

六兵衛は、ふりもぎらうとしました。けれど、兼吉はぎゅつとつかんで放さうとはしませんでした。

『わたしは踏切番だ！ 大切な務だ！』

兼吉の聲は、きらりと光る匕首を、相手の胸につきつけたやうに、鋭く強く、そして冷かつたのでした。

六兵衛は、小さな兼吉から、さういはれてみると、非常にじぶんの誇を傷つけられたやうな氣がして、

『生意氣いふな！』

といひ放つて、袖をつかんだ兼吉の手を左の手でびしりととぐつて、無理にも放させようとした。けれど、はさみ虫のはさみのやうに兼吉の手は袖から放れませんでした。

さうした争ひのうちに、列車の響きが、線路に傳つて來ました。一秒——二秒——三秒——曲路にさしかれば、踏切迄いくらの時間もかかりません。

兼吉はあくまでも、袖をおさへたまゝ、左手で白い旗を出して、つゝがなく列車を通過させようと考へてゐました。

けれど、ああ！ あくまでも、かうなつたら、我意を通さうとする六兵衛は、是が非でも袖をふり放つて、踏切を渡らうといふ氣持で、胸いつばいになりました。義理も情も知らぬ六兵衛は、病人の蒲團さへも、借金のためにはひき剃すくらゐでしたが、さういう意固地な氣持のために、今やじぶんの身が

危険であるかないかを考へることをせずに、この小さな兼吉のために、のめくと引きさがるのがなによりも、癪にさはるのでありました。それで、まとも、烈しく、兼吉の手をびしりとたゝきました。思はず、兼吉が手を放すと、六兵衛はすばやく縄をくゞつて、向ふ側へと踏切を渡らうとするのでした。

ところが、その時、列車はもう曲路へさしかゝつて、細く鋭い汽笛を鳴らしてゐました。兼吉は、思はず叫び聲をあげました。

『あぶない！ あぶない！』

四

六兵衛は、日和下駄をはいてゐました。運わるく、その下駄の齒が、向ふ側の線路の溝にはさまつて、べたりとそこへ尻餅をつきました。あゝ！ 兼吉の身體を、いなづまのやうに、びり

つと烈しく通りぬけたふるえ！ そして、ぐいと胸をつきあげた強い責任の感じ！ 兼吉は、われを忘れて、縄をくゞりました。列車は、一秒も猶豫なく、烈しい勢で、勾配を下つて來ます。どうしやうもありません。兼吉は、六兵衛のところまで飛んで行つて、脊中に兩手をあて、力をこめて、うんとつき飛ばしました。うまく、つき飛ばせたので、兼吉もいつしよに、前へのめりました。

そして、その時！

列車は、ゴウ……と音をたて、通りました。けれど、その大きな機關車の車輪は、兼吉の右の足が、まだ線路にかゝつてゐたので、それを轢いてしまひました。

さつさ、番小屋へ火を借りに入つた百姓は、兼吉



が縄をくゞつて行つた時に、

『あぶねえ！ あぶねえ！』

と、聲をあげて叫びましたが、今は地面に頭をこすりつけるやうにして、列車の車輪の下を見ました。そして、兼吉も六兵衛も、轢かれてゐないらしいので、

『六兵衛の野郎、つまらねえ意地を張りやがるから、もうちつとべおそけりや、えらい子供を死なすところだつたあ。』

と、身ふるひしながら

ら、ひとり言をいひました。

だが、列車が通過してしまふと、六兵衛はもう起きあがつてゐるのに、兼吉はぐたりと線路のわきにころがつてゐました。

「なんだ！ 轢かれたか！」

百姓のおぢいさんは、繩をはづして、あはて、兼吉のそばへ行きました。

「どうした？ どうした？ しつかりしろやい！」

兼吉は氣絶してをりました。

「六兵衛！ さあ運びやがれ！ てめえのために、でけえことになつたぞ！」

おぢいさんは、すつかり怒つてをりました。

六兵衛は、ほかにだれもゐなかつたら、そのまゝ逃げ出したかも知れません。けれど、ちやんとした證人がゐるので、どうしやうもなく、それに、じぶんももう少しで轢かれるところでしたし、また、いくら無慈悲な男であるにしても、かうして兼吉がじ

て、膝のうへをぎゅつとしばつて、血の流れるのを防ぎました。

やうやくのことで、兼吉は息を吹き返しました。そして、どんよりとした、にぶい目を開けました。

「わかつたべ、兼さ！」

おぢいさんの目には、涙が光つてゐました。

その時、兼吉は足に痛みをおぼえて、ふつと顔をしかめました。

「あつ！ 六兵衛さんは、どうしてやつた？」

とたづねました。

さぞ痛からうに、痛いといふ言葉よりもさきに、六兵衛のことを心配してたづねたと思ふと、百姓のおぢいさんは、もう我慢がでさずに、烈しく涙をこぼしながら、

「えらいなあ！ 兼さ！ 六兵衛は助かつた。だけど、おめえ痛かんべなあ！」

ぶんを助けて、身代りになつてくれたとすれば、濟まない氣持にもなつたでせう。すつかり、しほしほと萎れ返つて、兼吉の身體を抱いて、番小屋に運びました。

五

百姓のおぢいさんは、壁にかゝつてゐる富山の藥賣りの、赤い大きな藥袋をはづして、なかゝら氣つけ藥を出しました。そして、それを口で噛みくだいて、水を口にふくんで、口うつしに兼吉の口のなかへ入れました。また、顔には冷たい水をそゞぎました。

「おい、おい！ 兼さ！ 兼さ！」

おぢいさんは、できるだけの聲をあげました。

その間に、六兵衛はふところから紙を出して、兼吉の足に流れてゐる血を拭いたり、腹の手拭をぬい

「助かつてやつたか？」

「うん……」

おぢいさんは、もう涙が鼻につまつて、返事もろくにできないのでした。けれど、ふつと氣がついて、

「六兵衛！ てめえ醫者さ行つてこ！ そしてな、道にだれでも村の衆ゐたら、すぐこけえ來るやうに、いふんだぞ！」

と、六兵衛に向つていひました。

六兵衛は、うなづいて立ち上りました。

「急ぐんだぞ！ てめえの命の親だべ、えゝか！」

ふたゝび、おぢいさんはいひました。

借金を支拂はないといつては、すめぶんこの村にも来て、威張りくさつた六兵衛も、もうかうなつては、頭が上がりません。毛皮の襟のついた二重まはしも、縮緬の帯も、帯に巻きつけた鎖にも、なんらの威厳もありません。きたない仕事着を着たこのおぢいさんに、亂暴な言葉を使はれても、すなほにす

るよりほかありませんでした。

六兵衛が出て行くと、おちいさんは、兼吉の頭を冷しました。なるべく、氣を使はせまいと思つて、こちらからは話しかけずにゐました。

兼吉は、痛いと思ひました。けれど、いろいろ考へてみると、六兵衛をつき飛ばして、あの危いところを助けたことがはつきり、思ひ出されて來たので、責任を全うしたうれしさがありました。痛みに堪えかねて、顔はしかめましたが、その時、かすかなほほえみが、たとへば池に吹くそよ風がたてたさざ波のやうに、兼吉のしかめた顔に浮びました。

おちいさんは兼吉が、痛がつて泣きもしないので、すつかり驚きました。その我慢強さに感心してしまひました。

『どでえ、えれえ子だ！ おまけに、感心な子だぞ！ おら、こねえな子、話にも聞かねえぞ！』
さう考へながら、おちいさんは、頬を涙でぬらし

塊ともいつていゝ、小さな村の英雄のために、みんなはどんなにでも働いて、一日も早くなほしたいと思ひました。それにしても、憎い憎い六兵衛！六兵衛には、どんなにしても、あやまらせ、また、この兼吉のために、できるだけのことをさせるやうにしようと思ひました。

『それにしても足はどうかなあ？ だめかなあ？』
一人の若い男が、そつとたづねました。

『あゝ、だめだあ。そつくり指をやられてるだあ。惜しいことをしたでねえか、せつかくの子を不具にしただあ……』

おちいさんは、なにを語るにも、涙でありました。そして、村の人たちは、なにを聞いても涙でありました。

やがて、虫の知らせといふのか、兼吉の母親はなんとなく心配なので、早く切りあげて歸つて來ました。母親が歸つて來た時には、醫者の手あても濟ん

てゐました。

六

『もう上りは通つたかしらん、五時の上りは。』
兼吉は列車を氣にしていひました。

『あゝ、心配するでねえ。踏切は、おらがよくするからな。』

おちいさんは、いちらしくてしやうがありませんでした。

『足が痛いよつてな、今晚はもうあかりは出せんよつてな……おちいさん……頼みます……あかりは青いあかりつけてな……』

『あゝ、心配するでねえ、心配するでねえ。たくさん、村の衆が來てくれるわ……』

そのうちに、六兵衛から聞いて、村の人たちが來ました。おちいさんが、低聲で話す話に、みんなはもらひ泣きをしました。この勇ましい、そして情の

でありました。村の人達は、みんな傳へ聞いて、それぞれお見舞の品を持つて、くさん集つてゐました。話を聞いて、母親は兼吉のために、悲しみましたが、けれど、兼吉のしたことが、美しいことなので、わが子ながらすつかり感心してしまひました。

『兼や、痛かつたらうなあ！』

母親は、兼吉の枕もとで、泣きくづれてしまひました。

『でもな、人を助けて、不具になつたんよつて、ええわ。お母も悲しいけど、うれしいわ。』

兼吉は、母親が來たので、さすがに、いろ／＼の悲しみに襲はれて、泣きながらいひました。

『えらい人になつて、お母に孝行したかつたけど、足がだめになつて、したいこともできんのだな。濟まんのだな、でもな、足がわるうてもできる仕事あるよつて、さうすりやえゝなあ。今それ考へてたんや。』

母親は、それを聞くと、つゝ伏したまゝ、おいお
いと泣いてしまひました。
村の人たちも、やゝおさまつた涙が、しきりなし



一三二
に流れて來るのでした。部屋のかなは、鼻をすゝり
あげる聲や、咳をする聲であふれました。ある者は、
たまらなくなつて、母親といつしよになつて、おい
おいと泣きました。

「えゝ子を持つたものやな。」

「とても、十三や十四で、あんな事いふ子ないわ。」
女たちは、ひそ／＼と囁きました。

「兼吉！ 心配するでねえ。おめえさのしたことは、
でつけえ、えらいことや。村の衆がよつてたかつて、
お母のめんどう見るだ。」

おぢいさんは、強い口調でいひました。

「さうとも。」

「さうだ。」

「心配するでねえよ。」

村の人たちも、てんでにいひました。

この村の英雄の前に、村の人たちの心は、暖かく、
一つになるのでありました。

をさげました。

「命の親です。ありがたうございました。」

といひました。そして、今度は村の人たちの方へ
向きなほつて、



「鬼の六兵衛といはれた男でした。このなかに、
わたしのために、泣いた方もありませう。あやまり
ます。どうか許して下さい。それから、みなさんの
前で申します。兼吉さんの一家のめんどうは、萬事
わたしに見させて下さい。罪ほろぼします。お錢が
いちばん大切なものでないことがわかりました。」
と前向きをして、いろ／＼とごんげをしました。

その心からの言葉は、みんなの心をうちました。
鬼の六兵衛が、義理と情の力を知つた奇蹟は、大き
な感動を與へました。

だが、それもこれも、すべてが、小さな十四歳の
兼吉にあつたことを思つて、今更のやうに、その美
しさに胸をつかれるのでありました。（をばり）

だが、その時、さつきから小さくなつて、萎れ切
つて坐つてゐた六兵衛は、村の人たちからいろ／＼
いはれたことにも、ろくに返事もせず、まるで心
を失つたやうに、しほしほとしてゐましたが、ふい
に立ちあがつて、兼吉のそばへ行つて手をついて頭



綴 方
齋藤佐次郎選

秋の野良の夕方（賞）

茨城県結城郡五箇校高一

古谷 みい

秋の夕方、野を吹く風は身にしみる。私は弟をおんぶして、今、田のあせみちに立つてゐる。稲をかつた後のかぶから、緑の芽が、やせこがれて出てゐる。いなどはのろしの稲にとまつて、何かしらん考へこんでゐる。『おや、あのいなごがあの緑の若い芽へとんで行つた。今までじー

つとして、何か考へてゐたと思つたら。』

私は日の暮れるのも風に吹かれるのも忘れて、いなごの有様を見つめてゐる。せなかの弟が、『ナゴ来たよ。ナゴ来たよ。』

見ると自分の目の前ののろしへ来て、羽をやすめてゐる。何気なく西の方を見ると、日の暮れるのも知らずに稲をかつてゐる人があつた。日はとつぷりと入つてしまつた。さうするうちにだん／＼と暗くなつて空には大きな星が光り出した。弟は見つけて、『星出たよ。家へいんべよ。』とはじまつたので、私は家へ歸つた。けれど、先に見た稲かりの人はまだ腰をかざめてゐる。『まだおいないんだ。』一人言をいひながら家に歸つた。電燈は家の

中を照らしてゐた。

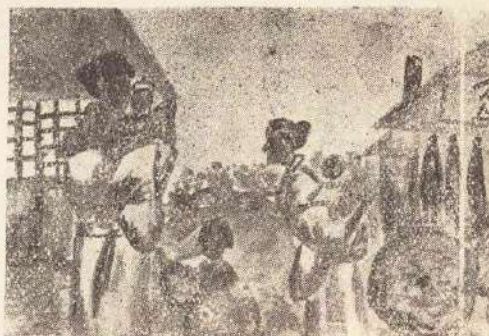
火事のある夜（賞）

長野縣小縣郡和村栗林

飯島 光男
（十五歳）

『おや……すりばんがなる様だ。』『耳のせぬだらう。』『いやたしかにすりばんの様だ。』きんちようした話聲が茶の間から聞える。おどろいて自分も、耳をそばたてた。かすかに鐘のやうな音が響いてくる。それから一二分程過ぎたと思ふ頃、大川の半鐘がなり出した。父と話してゐた客は『鐘のなつたのもうそではなかつた。遠くではないやうだ。』と、ころぶやうに外に出た。『今頃どうしたんだ。こたつからでもないやうだが。』父の聲がきこえる。自分は足袋をはき、

マントをかぶつて外に出ると、部落の鐘がなり出した。さへきつた冬の月は、凄く下界を照してゐる。



「傘屋の前」（賞）

無名

どこからか、らつぱの音が勇ましく聞える。すぐ前の道をちようちんを腰にした消防夫が飛んで行く。まだ鐘はなつてゐる。消防蔵の前に来た時はもうポンプはなかつた。それでも、ちようちんやトビを持つた人は大勢ゐる。マントをぬいで火の見はしごにのぼつた。一段、二段と登つて行く中に、身がふる／＼ふるへる。はしごの半分程登つた時『大屋のへんだ。集會所の所がまつかになつてゐる。』誰か上でさげんだ。集會所のむかうが火の粉でまつかになつて見える。少し寒くなつたので下へおりた。消防蔵の前では焚火をしてゐる。豫備の人達が、四五人火のまはりにゐる。『誰か面白い話でもしないか、ひまでこまる。』よその人がのんきそうに云つた。する

と色々と言の火事の自まん話のはじまつた。

前の火はとろ／＼と燃える。そして二時間位たつた頃であらう。三四人の先着の人々がかへつてきた。

『火事は大屋の帝中だそうだ。』皆のはつびはよろいの様にかん／＼してゐた。そして火の中にころび込む様にして温まつた。この寒いのに、ぬれたまゝ大屋からこゝまで半里もある所をきたのだから、と思ふと、自分達が寒いなどと云つて火に温つてゐた事がすまない様に思はれてならない。二十分程すぎた頃、全部の人たちがかへつた。そしてあちらこちらに集まつて、過ぎた火事の出来事を語り合つてゐた。



大先生(賞) 東京本郷 中坂石次郎

けいちやん(賞)

千葉縣山武郡東金校尋六

須長かをる

昨夜、いさ子ちやんが臺所の方から「姉ちやん、呼んでるよ。」と言った。私は大急ぎで臺所へかけて行ったら、お母さんが「おせんこしらへたいよ。」と言った。私はおせんをこしらへるのに茶碗を取

りに行かうと思つて、大急ぎで立つたら、そこにけいちやんがゐて、二人で頭をぶつけた。けいちやんが大きな聲で泣き出した。私は知らない顔をして茶碗を持つて来て、おせ

んの上にのせた。お母さんは「誰がやつた。」と言つて、けいちやんをだました。けいちやんは「姉ちやんが頭ぶんなぐつた。」と言つて泣いてゐる。私は「おこられつといけねから」「ね、けいちやん、いさ子ちやんがぶんなぐつたねえ?」と言つたら「姉ちやんがやつた。」と言つて、まだ泣いてゐる。お母さんがおこつた

顔をしてゐるので、私はやりつばなしのまゝ店へ逃げてしまつた。すると兄ちやんが「あで、けいちやん泣かした。」と言つて私の頭をぶんなぐつた。私はまた臺所へ行つたらお母さんが「あにしておせんこせない。」と言つた。私は「こせつさ。」と言つてこしらへた。

けいちやんはもうだまつて「姉ちやん、かんにんすつさ。」と言つた。私は「おせじつかつてんでんかい。」と言つた。けいちやんはだまつて店へかけていつた。私は大きな聲で「けいちやん、きたいよ。」と言つたが、けいちやんはしらん顔してちよこんと店にすはつてゐた。おばあさんが「けいや、ごはん食べないか。」と言つたら「あ、」といつてかけて来た。おせんの前にはすはつて、皆でごはんを食べた。

よび聲

山口縣熊毛郡浦田校高一

加藤正子



風景

岐阜縣關小學校

岩田繁夫

私は洗たくソーダの紙袋を大切に「かゝえて、洗たくのことをいろいろ考へながら、せつせと歸つてゐると、「よーい。」と、誰かをよぶ聲が向うの田から聞えた。私は「はてな。」と思つて、なんだか自分がよばれたやうな氣がするので向うを見渡した。

「よーい。」

私がふりむいたのがわかつたらしく、「こゝだ。」と云うやうに、ふたゝびよび聲が聞える。丁度小路を三人の人が立つてゐる。「あれかしらん。」と思ふと、次にはすぐ「誰だらう。」と云ふ心がひらめく。よくはわからないが、二人は白い手拭をかぶつた女らしく、もう一人は男の子らしい。

私はどうも、わからなかつた。

「私をよんだんじやないんだら

う。」と思つたりして返事をかへすのをわすれてゐると、又「よーい」「加藤さん。」と二人がどなつたらしく、重なつて聞えた。

やつぱり私だ。「おーい。」私は大きな聲で手をかざしながら返事をした。「來ないのー。」と、又言つた。

私は弘中の所からの小路を、ばた／＼と三人目がけて下つて行つた。近づく程によくその人がわかり、とう／＼中村さんであることもわかつた。「やあ、來た／＼。」とみるるさんが、からだを飛び／＼しながらさげんだ。「なーんだ、馬鹿／＼しい。」と私はがっかりした。

雨後のながめ

長野縣下高井郡中野校高一

徳武邦雄



「茶の花」 大南 分石 縣村 矢田 季吉

しとくと降つた小雨も、いつしかやんでしまつた。向ふの山にかゝつてゐた白雲が東へ東へと走つて、われもくと山をはなれる。あとには洗つたやうな樹々の緑が、日光にかがやいてゐる。逃げおくれた雲のかたまりが、少しばかりまだ山の頂に残つて、離れよらつて居る。やがてそれも行つて

いたやうだ。
『バタ／＼』と、羽音のするほど群をなして來た雀が、庭の櫻の木にとまつた。枯櫻の露がばら／＼と散る。ふと見ると、軒ばたの上の方の空を、とびが輪をかきながら飛んでゐる。やがてすつと向ふの縣道を越して川堤の方へ飛んでいつた。縁先の方に目をうつすと、手水鉢の向ふからすつと枝

一三八
をのばした柳がしづかに垂れて、一枝の葉に青蛙がやすんで居る。葉の先の方には眞白の雨の玉がぶらさがつてゐて、時々ぼたり／＼と白い光を引いておちる。
『ト、ト、ト』といふ音に、はつと後をふりむいたら、かしはの葉がゆら／＼と左右にゆれてゐた。門口から黄色な傘がポツト出て來た。女中だ。ざるの中に豆腐の入れたのを持つてゐる。日がざら／＼と照り出した。そこら中の物が一せいに光を放つ。空は全く晴れて青空になつた。

幼き思出

千葉縣長生郡茂原校高一 浦島喜久雄
僕がちやうど六歳の時の事であら。八幡神社の祭に、母につれら



「叔母の家」 關三 縣村 鶴崎 公雄

れて神社に参拜に行つた。道々色色の店が出てゐて、買ひたいものばかりである。その中に僕が一番氣にいつたのは風船である。母に『買つてくれ／＼』とねだつた。母は『参拜して歸りに買つてやるから。』といつた。僕は『やだよ』と無理にねだつた。母はしまひにはこまつて、しぶしぶ買つてくれた。母は『しつかりにぎつてゐる

だよ。』といつて、僕に渡した。参拜をすまして神社の境内を出た。僕はうれしくて地をとぶやうにかけた。母は『そんなにかけると風船をとばしてしまふよ。』と、いひ終らぬ中に、風船はするすると僕の手からぬけた。あつと思つた時はもうおそい。電信線の間を通りぬけて、上へすん／＼上つて行く。僕はそれをしばらく見てゐ

たが、しまひには大聲あげて泣きだした。道を行く人は僕の顔を見ながら行く。しばらくして涙の浮んだ目をふと空にむけると、もう風船の姿は見えない。僕は急になしくな

つて來てわつと泣き出した。

お酉様

東京市東區小學校尋五 後藤賢三

今年のお酉様は大へん人が出ました。僕もお金をいただいてお詣りにゆきました。そしておさいせんをあげておがんでゐたら、後の方でいやといふほど頭をおつたので、後をむいてみたら女の人が、『ごめんなさいね。おさいせんをなげたら、つひあなたの頭にあたつてしまつたのですから。いたかつたでせう。』といひました。僕は『いゝえ。』といひましたが、なんだかはづかしくなつたので、かきだして吉原公園の方へいつて、見せ物をみて歸りました。まだその時のこぶがのこつてゐます。

「果物」

京都市格致校
松崎政治



寫生

東京府下八王子市明神町六一五
設樂 樂(十二歳)

私の愛蔵して居る物

京都市西洞院白隠長校高二

東政二 郎

私の愛蔵して居るものは紙挾である。今はぼろ／＼になつて、黄色いボール紙が肌を出して居る。開けて見ると一方に小さく『東八重子』及び『東八重子馬鹿』と書いてある。亡くなつた妹の形見だ。此の紙挾はお母さんが本町から買つて来て下さつた。勿論こんなに汚くなつては居なかつた。其の时分僕には一つの紙挾があつたので、妹の戴くのを空しく指をくはへて見て居なければならなかつた。しかしどうも残念だ。『僕のが汚くて、妹のが綺麗だなんて、そんな法があるものか。』と勝手な理屈をつけて、何とかして僕のも

のんびりとした秋日和だ。稻が黄色になつて、所々にはもうかつてねかされてあるところもある。空はあゝ色にすんで、お日様がきれいに光つてゐる。

サラ／＼。クレイヨンの音。

『あんたしやせい。』とつせんこゑをかけられたので顔をあげてみると、いなごの袋をもつた女の人になれ／＼しくよつてきた。

『えゝ。私は當わく顔にいつた。又こんな人がきてといつた顔で。』

『ちよつと見せてね。ちよつとよ。ね。下手でも笑はないわ。』にこにこしていつた。私がみせると『上手だわ。ちよつとかしてちやうだい。』といつて私のクレイヨンをとつた。しばらくサラ／＼クレイヨンを動かしてゐたが、『さ。これでいゝわ。』といつて、私にクレイヨ

のにしてやらうと考へた。よし、おどかしてやれ、と妹の後に忍び寄つた。そして側の硯の墨をたつぶり筆に含ませて、妹の大切にしている折紙箱を引張り出し『八重ちゃん、さつきの紙挾を僕におくれ……呉れないッ……呉れなきあれ……さあどうだ／＼。』とばかり、筆を澤山の折紙の中に入れて、掻きまわさうとする勢を見せた。しかし八重ちゃんの大夕立の爲に、此の示威運動はまんまと失敗した。お母さんが『これいけませんね。紙挾がほしけりや買つてあげますものを、そんな事をして……』と、とう／＼お目玉で事はすんだ。だがすまないのは僕の胸だ。『なんだ八重子の泣蟲奴が。』とその晩そつと紙挾に『東八重子馬鹿。』と書いて置いた。所が翌朝妹が僕

ンを渡した。『どうもすみません。ありがたうござまりました。』『いいえ。』

あらッ、私は驚いて繪をよく見た。私のかゝうと思つてたところとすつと違つてゐる。『あら、ちがふわ。』私はいつもの、兄さんと雑誌のせつめいの時のやうなかん高いこゑでいつた。そうして私のかくところをよくいつた。『そう。ちやあごめんなさい。』女の人はいなごのふくろをさげてすた／＼田の道に向ふへいつてしまつた。こんなに黒くぬられてしまつて、私ほんとにどうしよう……。ほんとにけちな女の人……。心の中でつぶやいた。私は大いそぎで田の道を家の方へかけ出した。涙を目に浮べて、かきかけの繪をかへたまゝで……。』

に『いゝものを上げませう。』といつて、その紙挾をくれた。これが今も僕の持つて居る紙挾の歴史である。『東八重子馬鹿。』の六字は鮮かに残つて居るが、書かれた主はもう居ない。

私のチャボ

秋田縣仙北郡荒川校尋二

岩谷 ミヨノ

私は、まつ白で大そうかあいらしいチャボをかつてをります。をんどりが一羽、めんどりが二羽で、みんななかよくあそんでゐます。よくなつて、遠くにゐても、よぶこゑがしると、すぐはしつて来て、足をちゝいたり、着物のすそをひつぱつたりします。そして時々えんがはを足あとだらけにしたりはちうへの草や花などに上つたりして家の人をこまらせませす。



通信

自由畫選評

山本 鼎

△無名氏の傘屋の前の繪(推賞首席)——色とか形とかはすいぶん不十分ですが繪柄の面白味と全體に活き——として居る處を重んじて首席にしました。

い筆が相當利いて居ますが少し標本見たいになり繪品が冷め度いです。△隨時公雄君のコンデー世、物がきつかりきつかり描けて居るのはいちがちと黒くしすぎます。又あまりこすりすぎます。それ故全體が死んで来るのです。

幼年詩選評

若山 牧水

▼今度は大へん出来がよかつた。初めの方の七八篇はほとんど優秀のない出来栄えだと思ふ。制限された僅かな頁数のなかになるべく一般的に採らうとするので相當いので捨てたのも多かつた。つらいことだけれど、さてどうにも仕方がない。

綴方の選後に

齋藤 佐次郎

○田舎の子供が野や山から受けた感じをそのまゝ書いたものには、何ともいへないよい味のあるものである。何かうまい作をして見ようなどといふ氣持から書いたものはお面白くないが、自分ではたゞ書きたいから書くといふものには本當に面白いものがある。古谷みいさんの『秋の野良の夕方』はさういふ意味から面白く讀みました。

童謡の選後に

野口 雨情

よき童謡とか、あしき童謡とか作品のよしあしは別として、これは童謡になつてゐるか否かを見分ける方法があらば知りたいたと云ふ意味の通信が、これまで屢々ありましたが、元より方法と云ふべきものであらう筈がありまじから、そのまゝにしておきましたが、今回も京都の田川某氏よりこの意味の通信がありました。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありましますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。

編輯室より

(記者)

○冬が来ました。寒い。風が東京の町々の中を吹くやうになりました。皆様お寒くもございませぬか。記者一同も大元氣です。○二月號はいそがしい年の暮の内に全部の編輯を終へました。新年そう／＼皆さんのお手に入ることでせう。各長篇はいよいよ面白くなつて参りました。月を追つて皆さんに御満足な與へることでせう。

自由畫掲載外佳作

中坂石次郎(東京) 進藤 政雄(秋田)
河野正二郎(朝鮮) 津津 清純(東京)
進藤 卓藏(秋田) 中島とさ子(千葉)
西脇 國華(愛知) 荒木善太郎(静岡)
山本 静(千葉) 田口 積三(長野)
鶴崎 公雄(福岡) 水野 實(岐阜)
有方 忠男(大阪) 古澤 恒敏(福岡)
豊島 泰(甲府) 東政二郎(京都)
石崎 むつ子(千葉) 高須 賀澤(大阪)
北村洋次郎(滋賀) 和田 悠市(岐阜)
飯島 光男(長野) 岩谷ミヨ子(秋田)
北村 政夫(東京) 古澤 岩美(静岡)
猪野 タニ子(千葉) 山村加枝子(熊本)
川西 義雄(廣島) 土堀 繁雄(東京)

幼年詩掲載外佳作

藤澤 一郎(東京) 原田小太郎(神奈川)
土堀 繁雄(東京) 望月 みと(静岡)
山本秀(和歌山) 佐藤 唯志(新潟)
壇上泰之助(和歌山) 宮川 清(香川)
加藤 勇(東京) 山本 正巳(千葉)
若本 順喜(和歌山) 森本 康雄(熊本)
若槻 繁(新潟) 山本千代子(千葉)

綴方掲載外佳作

志村明正(神奈川) 守屋 光子(東京)
山口壽満子(長野) 古谷 みい(茨城)
中里 素行(神奈川) 山本みゆき(滋賀)
沖津 清純(東京) 皆川 充(東京)
川島 秀雄(東京) 香山 雅夫(神奈川)
船越 英蓉(栃木) 茂呂 きく(茨城)
齋藤 健(東京) 築地 明(不明)
下平 博(長野) 松澤 恭三(大阪)
山本 秀(和歌山) 清水 正明(京都)
大倉 富恵(岡山) 岩本 順喜(和歌山)
龍口 孝子(福岡) 宮本千代子(福岡)
茶本富美子(神奈川) 戸館 カツ(青森)
松井 俊郎(東京) 奥田 恵子(東京)
荒木善太郎(静岡) 母田 静雄(長野)
今井 三郎(東京) 磯崎 正明(東京)

童謡掲載外佳作

大島 秀夫(愛知) 秋村 卓作(不明)
大野貞二郎(北海道) 船越 英蓉(青木)

子供供

五條くみ子(甲府) 葛木 和夫(高知)
古谷 徹三(大阪) 津津 清吉(東京)
小林 重義(東京) 佐藤 武夫(東京)
鶴崎 隆起(静岡) 手塚 敬三(神奈川)
三井 謙延(長野) 高橋 長一(青森)
鹿嶋多味男(静岡) 逸見 千穂(埼玉)
松井 純(東京) 橋本 五郎(茨城)
藤山 大さき(京都) 河津嘉美子(神奈川)
都築 保三(愛知) 柳澤ふみ秋(長野)
小玉禮之助(秋田) 坂口 友吉(鳥取)
萩 賢治(大阪) 水谷 白陽(東京)
川口 洋(東京) 木村 光義(神奈川)
兼木 七郎(神奈川) 山本 秀一(和歌山)
井上 芳雄(東京) 田中 義郎(京都)
太田 貞夫(愛知) 高橋興吉(岩手)
池谷 義治(神奈川) 田島 英一(京都)
若井ひろし(廣島) 福永幸次郎(京都)
宮本 範吉(熊本) 廣瀬 正(兵庫)
仲村多治見(千葉) 三瀬 琢士(兵庫)
尾木 俊三(兵庫) 野坂 治(福岡)
川川多重郎(秋田) 館岡 行雄(神奈川)
小栗 一郎(東京) 深見 久恵(愛知)
山岡 静子(岡山) 萩原ひろし(宮城)
平澤 哲男(青森) 中村 武男(東京)
西野 光兒(岩手) 佐藤 明(神奈川)
横井日出之進(大阪) 山本 静(千葉)
岩本 貞三(秋田) 松波 茂(東京)
東 政二郎(京都) 三島 定一(島根)

新誌友名簿

吉澤ミヨ子(東京) 大場須賀子(東京)
花澤 一郎(東京) 太平 勲(岩手)
遠山 茂登(長野) 藤澤 ふさ(長野)
伊東 純平(愛知) 早川 龍夫(北海道)
齋藤 利平(静岡) (以下次號)

新らしく出た本

◆日本の児童と藝術教育 (沖野岩三郎先生著) この本こそ児童の教育と藝術とにたずさる人々の是非とも讀まなければならぬ名著であります。金の星社は、本書を佛蘭西の有名なルツワンの「エミール」にも比べるべき名著として推薦してゐますが、本書を一度讀めば児童に對する考へ方に就て、これまでに気づかなかつた驚くべき眞理を發見するに相違ありません。殊に此の本は童話と児童との問題に就てあらゆる方面から論じてありますから、日本に現れた最初の、しかも最も興味深い童話論として推薦されてゐます。(四六判三二〇頁定價壹圓八拾錢 金の星社發行)

◆よく解る算術の解き方 (中村八郎氏著) この本は小學校を卒業して中學校や女學校の試験を受けようとする人達には大層役に立ちます。算術の問題がその三四年來非常に變つて來たもので、さういふ問題にぶつかつても困らないやうに、問題についての考へ方と解き方とを、誰にでも解るやうにしてあるのが此の本の特色です。(四六判一三八頁定價六拾錢 京 南館町 實業の日本社發行)

る人で、また東京市外阿佐ヶ谷の幼稚園の園長として實際に少年少女の教育に携つてゐる人であり、従つてこの著者の作つた童話は、いづれも慈愛に満ちたもので、お話の中からは自然と美しいもの、尊いものに心がけられるやうな宗教的教育を與へるやうなものがあつて、安心して讀める本であつて、しかも定價が安いので、大層よい本です。(四六判一一一頁定價金五拾錢 日本橋金吹町三橋監社發行)

◆嬉しきゆふべ (高崎能樹氏著) たのしき家と共に「宗教教育児童圖書」の一冊であります。この本の方にはクリスマス用の對話や児童劇やお話が集めてありますから、日曜學校などの催しにはそのまゝ役に立ちます。尙讀んで見ても十分面白味のあるものばかりです。(四六判九二頁定價金五拾錢 日本橋金吹町三橋監社發行)

◆ジャンヌ・ダルク (大木雄三氏著) 金の星社の偉人傳大系の第一編として發行になつたのですが、目下各書店で大評判となつてゐるさうです。何故そんなに大評判なのかと云ふと、第一に本の装幀からして舶來の最上等のクロスに美しい繪や模様が飾つてありますし、口繪や挿畫が他社の出版では見られぬ美しい立派なものばかりです。讀んだ人の話を聞くと、一度讀み出したら止められないといつてなりました。四六判一八〇頁定價九拾錢 金の星社發行)



讀者だより

▼あゝまた一年といふ長いやうで短い日かもう立ち去ります。懐しい少年時代と一日一日と別れて行かればなりません。なんて嫌な事でしょう。けれども私は年がゆけばゆくほど子供と尚更親密になるやう仲よく遊ぶやうに考へております。そして子供の世界を私等が思つてゐたよりも上のものにするべく、つとめればなりません。野口先生の主張される情操教育を童話によつて歩を進める様に勵まればなりませぬ。来る大正十五年もそのつもりで迎へる用意を今からしてをります。ではさうなら大阪お伽亭 藤野富久雄

▼藤野先生は早くから金の星を愛讀して居りました。讀めば讀むほど其の頁にも童心の宿つて居るこ

とを知つて、無二の親友以上に思つて居ります。先生どうか何時までも童心のこもつた筆跡にしておいて下さい。私は金の星に對しての投書は之が始めてですが、今後盛んに童話童話を投書させていただきます。(大阪 萩野賢治)

▼記者様の星にも、サンタクロイスのお爺さんがついて、今年の分も、なほりました。あれ、あとは、正月號待つばかりとなりまして。正月號はどんなにすばらしいでせう。私共は、豫告を拜見して、未だ見ぬ正月號を、夢見てゐます。十二月の作曲「僕はこころ」は、ほんとに、愛らしい曲だと思ひます。私共は始終口ずさんで、楽しんで居ります。それから「小島は空に」面白く、讀み終りました。サンタクロイスになつたお爺さん」は、一番純なお話と思ひます。(秋田市 木下孝)

▼金の星は他の雜誌に見得られないよるこぼし行事があり得る。童話界の貢獻があり得る。それは何か？ 傳説童話募集にあると思ひます。私は何處までも童話においは、傳説を研究すべきことを主張します。此の日本農村には何百

編といふ、まだ世間に知らない童話のひそめられてあることを認めることが出来ます。金の星の諸先生、並に愛讀者諸兄諸姉よ、白い童話や童話をお見せ下さい。(秋田縣 川井多重郎)

▼日増に寒さ加はりました。記者先生お變り有りました。十二月號拜見致しました。いつも懐しみある本誌の編輯振が嬉しい。本誌の表紙は特別美しい。寺内先生は帝展に御入選なされた山お目出度ふ存じます。それから未見の船木具郎様、冬木一様、益々お勵み遊ばせて。おたより時々下さいな。未だやうと草分け時代の私の作がたとへ選外でも御誌の末端を繰し得るのを喜びます。更に力闘つとめようと思ふ次第であります。(雪の男 山田下、日光稻荷町 船越)

▼十二月號の内一番良かったものは小島先生のお話でもした。それから目出さんのお話もおもしろうございました。又なくした笠は大變気に入りました。三浦大船さん、荒井正巳さん、早田松夫さん大いに振つて下さい。私も一月號▽本誌入賞自由畫「傘屋の翁」の作者、御住所宛御知照下さい。(熊野)

「地方文藝雜誌名簿」
青い夢 八王子市平岡町五八 薄井益太郎
すどらん 臺中市明治町五三六 日高捷一
櫻んぼ 岐阜縣関町相生町金森武夫方 童心藝術社
理想 京都市上京區衣笠南道町二十四 長野品水
海邊公子著 熊本市安巳橋通十一
お日さん 童話集 詩火線社
虹の影 愛知縣知多郡半田町(丸一方) 虹の影社
▼今年もう日数が少なくなりまして。年末にのぞんで拙ない筆を取りました。記者様益々御指導下さい。私も今年十五歳ですが、いつでも子供でありたいと云ふ私の心で之を記しました。(長野縣 飯島光男)

▽この頃、金の星の讀物や挿面に對する批評がちつとも参りません。どんなものが面白かつたか、どうぞ御感想を御聞かせ下さい。(記者)▽本誌入賞自由畫「傘屋の翁」の作者、御住所宛御知照下さい。(熊野)

期 日 切 迫
締 切 一 月 二 十 日

第二回傳説童話募集

『金の星』が各地に傳へられてゐる傳説童話を初めて募集したのは、昨年の一月でありましたが、その結果は非常な好成績を擧げて、日本の童話界に偉大な反響を與へました。

童話の世界的珍寶といはれてゐるグリムの名作も、アンデルセンの名作も、殆ど凡てがその國に傳へられた傳説を基礎としてゐる事を思ふと、我が國も是非今の内に、各地方に傳へられてゐる傳説童話を研究して、それ等の中から後世に傳ふべき價値ある、尊い話だけを選んで、集める必要を感じます。第一回の金に成功した我が社は、こゝに第二回の募集を行つて、日本の童話界のために貢獻したいと思ひます。左の規定に従ひ、奮つて應募下さい。

選 者 沖野岩三郎先生、野口雨情先生、齋藤佐次郎先生。
賞 金 一等(一篇)金參拾圓。二等(一篇)金拾五圓。三等(三篇)金七圓。
原稿枚數 二十字詰二十行原稿用紙十枚以内。
締 切 一月二十日。



金の星社 二月號 出版だより

本社出版部の 一大計畫

金の星社は著々として、日本に於ける少年少女の讀物の爲めに努力を盡して参ります。諸外國の少年少女が非常に豊富な讀物をめぐまれているにもかゝらず、わが國の少年少女達はそれと比較したら實にあはれな状態である事を思ふと、ちつとしてゐられない氣もいたしますし、又それを何とかするのが本社の一使命であるやうに考へまして、こゝに一大計畫に着手した次第であります。

従つて、冊数は百冊になるか、二百冊になるか、それはよく發行した上でなければ明らかではありませんが、兎に角十分な努力を此の仕事に向つて、その準備と決心とを抱いて、この仕事に着手いたしました。

金の星社の出版であるだけに、必ず讀書界から大歡迎を受けるだけの自信を持つて参ります。

もう少しくわしい内容に就ては次號に第一編第二編乃至第三編までの書名が發表しますから、その際に申し上げます。

第一編は二月のはじめに發行の豫定であります。

英國の偉人 ネルソン (近刊)

三井信衛先生著 定價金九拾錢
世界少年少女偉人傳大系の第三

編として近日發行になります。日本の東郷大將は日本海の大海戦で世界的に名を知られて参りますが、それ以上に時代だけに世界にあまねく知られてゐるのは此のネルソン將軍であります。しかも、ネルソンはその時の大海戦で戦死したのであります。それだけに、一層有名であるといへますが、本書はそのネルソン將軍の生ひ立ちから最期までくわしく書いたものでありますから、實に興味深いものであります。

世界少年少女名著 大系の第二期刊行

『ロビンソン漂流記』を第一編に、最後に『小公子』を發行して全部二十冊で名著大系の第一期の出版を終りました。二十冊は各編とも非常に歡迎を受けまして、今や増版又増刷で出版部の手が廻らない位の賣行を呈しました。かほどまでの歡迎を受けたことは全く感謝の外ございません。

そこで本社は、この第一層の努力をいたしまして、ますます日本の讀書界に貢獻したいと思ひ、いよいよこゝに名著大系の第二期の刊行に着手いたしました。

第二十一編として『母を尋ねて三千里(タオレ)』を發行いたします。タオレは昔々、御存知の通り日本では、また『愛の學校』などといふ名になつて早くから知ら

れたるのを見てもわかります。偉人傳大系を讀んだ人達は、この本の良いところを知つて全く感心されるやうです。また御覧にならない方がありません。是非一度御覧下さい。

神野三郎先生の『日本の兒童と藝術教育』は思想界及教育界に非常な反響を興へました。兒童の教育問題に就て、最も熱心な新潟縣下の『越後新聞』は本書に對して左の如き批評を掲げました。

れてをります。

本社がタオレを特に『母を尋ねて三千里』といふ名で發行する譯は、タオレはそれの中にある『月次講話』があるために有名であり、又非常に面白くあるのです。そこで最も面白い部分だけを抜取る必要上、この『月次講話』を掲げることにし、その中でも最も深い感ひ感動を興へる『母を尋ねて三千里』をとつて本書の題とした次第です。

母の行方を尋ねて三千里の道を行く。思ふだけでも涙をよほす程深い感動を受けるではありませんか。本書の全部は此の名の示す通り、涙と愛にみちた物語りであり、また是非お讀み下さい。定價等は凡てこれまでの名著大系と同様です。

ジャンヌ・ダルクの評判

偉人傳大系の『ジャンヌ・ダルク』の評判はステキです。先づ第一に本の美しさに驚かされると見えて、各書店でよくこんなに立派な良い本が安く買れる。と言つて

『日本の兒童と藝術教育』を讀む

小學校教師から牧師、教師から小説家と永い生活を通じて常に人類社會を宗教時代に到達せしめ得るの信念のもとに奮闘されて居る、我々神野三郎先生の近著『日本の兒童と藝術教育』は四六三三頁、三百三十ページの小冊子ではあるが全部ポイント組だけに遙かに他の五百頁位の書と匹敵する。それよりも、其の内容の豊富充實して居ることは、到底他の千頁の書にも見られないものである。

神野先生の講演を聞いても座談を聞いても又は著述を見ても、その圓熟した人格と雄偉なる識見は今の文壇人には見られないやうである。實川豊彦氏は筆に口を青く染め、社會改革に努力して居るクリスチャンであるが我々神野先生は、人間の教育を始めからやり直して以て眞の人間を作つたならば社會は獨り手によくなると云ふことに根柢をおかれ、筆に口に兒童教育に力を注がれて居るクリスチャンである。今でも毎年夏期には輕井澤に於て日曜學校を主宰され又常にお話をされると聞く。又金の星社の依頼によつて数年前から日本内地は云ふに及ばず朝鮮まで童話の講演旅行をされて居る。それだけに兒童心理を根柢とした童話には他の兒童教育家の及ばないものがある。

かうした先生が其の天稟の麗筆をもつても書かれた本書は、行文流麗、他の教育家や藝術家の爲しに能はるほど平易に童話教育、兒童教育、藝術教育の大問題を併へ何

讀後感を募集します。

金の星社發行の書籍に就て、皆さへのお感じになつたことを、そのまゝ、遠慮なく記してお送り下さい。よい批評には賞品を差上げます。

ンオイラ

磨 齒 煉

香のよい
 味のよい
 使ひ心地の
 此上もなく
 よい歯磨



煉齒磨には
 チューブ入の
 ほかに
 固煉の
 ニッケル鍍入
 があります。